
主人公の妹に転生したようです。

モーリリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公の妹に転生したようです。

【Nコード】

N9718P

【作者名】

モーリリン

【あらすじ】

サラリーマンな人がワンピの世界へ転生し、敵をバツバツとなぎ倒していくお話です。この物語は主人公最強です。原作介入します。

転生（前書き）

全然リリなののが続きが思いつきません。いつの間にかワンピースで最強物を書いてしまっていた。反省はしているが悔いはありません

転生

私の前世はしがないサラリーマンだった。

毎日がノルマとの戦いで何時も帰るのは夜遅かった。

学生の頃に見ていた漫画や、プレイしていたゲームは社会人になってからは休日以外手にしていない。

周りはそんな会社を辞めろと言っていたけど、このご時世に再就職場所何て直ぐに見つかるわけもなく、ただ、何となく毎日を過ごしていた。

そんな中、たまの休日にはパソコンでインターネットや漫画を楽しむ。

パソコンでオンラインショッピングとかも面白い。そう、そんな毎日を送っていた。

だから予想外であった。何時もの如く会社から帰ってシャワーを浴びて今日は6時間も寝れると意気揚々にベットに入ったのだが…

「今日からお前はアイラじゃ！」

大きな男が私を抱えてそんな事を言っただけだ。当然あまりにも突拍子が無い事なので直ぐに意識を飛ばせた事が幸いか。

意識を飛ばした日から4年間。毎日その男…モンキー・D・ガープのお世話になっていた。

そう、ワンピースの世界に転生してしまっていた。…女として。

まあ、別段よかった。前世で結婚はしていなかったし、仕事もストレスがたまっただけで面白くない。

唯一、家族が心配だったが、時間が全てを忘れてくれるだろう。そう思った。

前世を振り返っていたのは良いが、どうやら私は主人公…ルフィの妹である事が判明した。

1歳年下で原作開始直後の年齢は16歳か…まあ村に引きこもってれば良いか…そう思っていた時期がありました。

「アイラももう4歳か…ならジャングルだな！」

こいつは馬鹿か。誰かこのじじいを止めてくれ。そう思ったがまあ止まるわけもなく、兄は何処かに行って居ないし、エースも何か居ない。4歳児がじじいを止められるわけもなく…

いつの間にか孤島の海岸に漂着していた。死んだら呪ってやると胸に刻みながらどう生き抜こうかと頭をフル回転させる。

持ち物は、着ている服とそのポケットに入っていた5ベリー…ま、環境はそこまで悪くはな「ギャーギャー…」いなんて事は無いな…何か出てるよこれ。

4歳で生き残るの無理かと思ってきた。もう笑うしかないよねあははははは…

じじい…絶対に凹す！覚えてろよ！くそおおおおお！

さて、まあこのまま何もしない＝餓死だ。それだけは避けられないといけない

つまりこのジャングルの中でサバイバル生活を送らなければならな

い。まずは住みかから決めよう。
今は何が有っても逃げる事にするしかないなあ…

そう思つて私はジャングルへと足を踏み出した。ここで運命の出会いが有るとは思わなんだ。

案外何とかなるもんだ。ジャングルへ入って日中ずっと歩きっぱなしでうるついていたら水辺が見つかった。

喉も渴いていたので直ぐに水を飲んでここを拠点として今後は行動していく方針に決めた。

次は食事。4歳児が肉何か獲れるはずもなく、ならば果物だと思つたのだが…うん。

困る事は無いほどあるのだが…いや、たくさんあるのだが、そう、全てゲテモノみたいな形なのだ。

まるで悪魔の実みたいなのが凄くたくさん生えている。…まあ実際は形の悪い果物で中身は凄く美味い。

バナナみたいなのからリンゴみたいなのまで、後は食った事無いようなものも沢山ある。

案外簡単にサバイバル出来るもんだなと思つていた…夜中になるまでは。

さて今度は寝ようかなと思つていると「ウーウー」とうなり声が聞こえる。とつさに身を隠して

辺りを見回すが…微妙に月明かりに照らされているだけでめっちゃくちゃ暗い。

まあ暗いだけならいいのだが、そこに動物のうなり声何か聞こえて

くると安心して眠れない。
がさつと音が聞こえた瞬間に何か私に目掛けて飛び出してきた。
何かは分からないけど直ぐに身をひるがえして、ジャングルを駆け
だした。止まったら死ぬ。そう思ったからだ。

私の判断が正しかった証拠は直ぐに分かった、うなり声を上げなが
ら迫ってくる猛獣であったのだ。
途中拾った石とか投げるが、余計な時間を食っただけで状況が改善
されない。むしろ悪化している。
最悪だと思っていると目の前に何とか登れそうな木がある。

直ぐに飛び付いて必死に登っていく。一際大きい枝に腰掛けて一息
すると、仲間の猛獣なのか直ぐにこの木に集まって来る。
目視だけで10以上。マジ怖い。正直少しちびつたのは内緒だ。

「くそ…」

悪態も付きたくなる。何だってこんな所でサバイバルしなきゃなら
んのだ。4歳児だぞ。
そう思った瞬間私はあのじじいに帰ったら復讐をしてやると誓った。
そのため何が何でも生き残らなくてはいけない。それに…物凄く強
くならないといけない。

しかしまあ長くても1年ぐらいなサバイバルだと思う。その間にじ
じいを超える事は…不可能。

が、一つだけ可能な方法がこの世界にある…「悪魔の実」だ。
ロギア系の悪魔の実であれば奴にひと泡位は吹かせる事が可能。し
かし、そう簡単に見つかるのかなあ…

と、思っているうちに何か下の獣どもがじりじりとこの木を登ってきている。

「嘘……」

四足歩行のライオンみたいな虎みたいな……まあ何れにせよ肉食であるう事は判断できる。

ははは……ここまでかな……何か悲しさよりも空しさが胸に広がる。このまま身を預けようかな……

と思っただけど、やっぱり悔しくなったのでもうすぐこの枝に着きそうな猛獣に対して一撃は何かパンチでも何でも中てよう

そう思っただけで猛獣がこの枝に着た瞬間にパンチをお見舞いしてやろうと構えて力を込めると……

バチバチ……

何か自分の手から変な音がすると思っただけで見てみると……

「手から何か電気でとるやないか」

あまりにも咄嗟のことだったから大阪弁になっちゃったが、まさか「ゴロゴロの実」か!?

と興奮したが、別に雷に形を変えられるわけでもない。考えたかったのは山々だったが

その時間すらない。であれば、迎え撃つしかない。

猛獣：例えるなら爬虫類みたいなライオン。そんな感じな気持ち悪い生物だった。

それが月明かりに照らされて不気味なことこの上ない。

「うあああああああ！」

叫びながらパンチする瞬間に自信の叫び声と共に電気を帯びたパンチをお見舞いした。

結論から言おう。4歳児でも肉は食えた。

あの後普通にびくびくと痙攣して落下。このままいけば勝てる！と思いついて、木の上で確固撃破。結果殲滅に成功。普通に勝てた。何かあつけないほど。これぞ火事場の馬鹿力。

何時の間にか悪魔の実を摂取していたのが幸いし、サバイバルが凄く楽になった。

まあゴロゴロの実では無く、本能で理解したのだが…「ビリビリの実」だ。

ゴロゴロの実の下位に当たるものでまあ雷という規模の大きなものでは無い。電気を操る事が出来る。なのでロギア系に属しておらず恐らくパラミシア系であると思われる。まあそれはそれで強い。

電気の括りで見ると雷だつて電気だ。そして私の知る限りの最大ボルトは10億ボルト。

限界がそれレベルなのかは分からないが、そのレベルまでいけない事は無い。…と思う。

まあその10億ボルトは雷何だけどね。やっぱりゴロゴロの方が手っ取り早く強くなれるよね。

まあ食ってしまったのは仕方がない。自身の身を雷に変えられないのであれば、どうにかして強くなる方法を模索するしかない。

このサバイバルで出来るだけ多くの手札が強力な一撃を作つてあのじじいにひと泡吹かせてやる。

まずはどうやって電圧を上げるのか、まあこれは毎日何かしら使つていくしかない。

放出は出来ないかと考え実行。まずは、近くにある石に向かって電気を弾にして発射するイメージで…

最初は放電するだけで放出はされなかったが、日がたつにつれてだんだん弾の形になつて来ている。

1週間でついに弾一発作成に成功した。そう考えると、電気を操るだけではなく、生成する事も可能という事が判明。

しかし、規模はやはり雷以下なので改めてゴロゴロの実の下位に当たる能力なのだと実感した。

「ルフィ兄は今頃何してるかなあ……」

夕日を背に黄昏ながらサバイバル生活を楽しんでいた。

転生（後書き）

ビリビリの実はゲームに出てくるの物と関連性は一切ありません。
ご容赦お願いします。

誤字脱字等御座いましたらご指摘をお願いします。

将来は

正直ワンピースはロビンを救出した時点しか見ていない。その先に何があったかは知らない。
だからこそ確かめたい。その先に何が起きているのか。でも、海賊にはなりたくない。
村や町を無差別に襲い略奪行為をする何て、私は認めない。

確かに、すべてがそんな海賊じゃないのは確かである。

しかし、大部分の海賊が略奪行為をして財政を潤している。それが真実だ。

まあ、このままじいについて行けば最低でも海軍に入隊できるはずである。

そう、その中でたまに出撃でき、ほとんどが事務仕事な兵隊になれたかった。

1年過ごしたジャングルから帰還し、フーシャ村に戻った私が見たものは

赤髪海賊団であった。近くで見るとマジいけめん。許せん。あれ？

私はいま女か…

よし許す！とシャンクスの顔を見た瞬間に判決を下した。

「アイラ！」

「「アイラあ？」」

「ただいま、ルフィ兄」

シャンクスと一緒にいたルフィが私を見つけると駆け出してきた。

うーん…元気があるなあ…このころはまだゴムゴムの実を食べていないのか…

目の前にルフィが来て突然につこりと笑い

「おかえり！」

こうして、じじいが居ない間の休息が始まったのである。

「相変わらずマキノさんの料理は絶品ですね」

「ふふ、ありがと」

と、ミルクをサービスしてくれた。さすが美人。

「あー！おれもおれも！」

ルフィもミルクが欲しいのか声を上げる。

マキノさんは柔らかく笑いながらルフィのカップにミルクを注ぐ。

「おいルフィ、この嬢ちゃんとはどういった関係なんだ？」

そうシャンクスが問いかけてきた。

「自己紹介が遅れました。私の名前はモンキー・D・アイラ。アイ

ラと呼んでください」

「モンキー…もしかして」

「はい、御察しの通り、ルフィ兄の妹です」

「おう！」

その後はまだ5歳と驚いていたり、ルフィがそれに反発したりと、平和な毎日を過ごしていた。

ルフィとエースと同じな黒髪を腰まで伸ばしている。

顔はまあ自慢ではないが、整っている方だと思う。体の発育は…まあこれからだろう。

そうして、早一ヶ月くらいが経った。この一カ月は能力開発に勤んでいた。まあジャングルで急激に強くなったんだけど。原因としては、落雷が私の体に直撃したのがきっかけ。まあ気絶したんだけど、何か怪我とか全くなかった。起き上がってふらふらしていると、いかにも肉食ですと自己主張が激しい牙を私に向けて駆けてくる。

どうもそれがスローモーションで感じた。何か簡単に反応が出来た。腕を振るうと簡単に電気が出せた。結果瞬殺した。あまりにもあっけなかった。

さすがにおかしいと思って現在どれくらいの電気が放出できるか試した。

雷が出せた（笑）

恐らく雷に打たれた瞬間に体が「雷の電気」を覚えたのだろう。

私はこの事実に気付き、雷雨の日は木の天辺で長い枝を掲げて雷に打たれまくった。

…第三者の眼から見ると非常にマゾいというより、自殺志願者だと思っ。まあ人間なんて私一人しかいなかったけども。

結果ジャングルの一年で「ゴロゴロの実」に匹敵する程の力を手に出来た…と思われる。

実際、どのくらいの電力かなんて測ってみないと分からないし、ゴロゴロの実は自身を雷に変化出来る。

攻撃力なら匹敵したかもしれないが、所詮はそれだけ。まあそれでもかなり嬉しいんだけどね。

むしろ攻撃力のみ観点なら、最強ではないのか…しかもパラミシア系。

まあ上には上がいる。つか、そこまで強くなる必要もないんだっ。事務仕事が出来れば後はOKなんだっ。

そこから半年以上経過し、私の反射神経…もとい、生存本能からなる直感がすさまじく鍛えられた。

某ゲームみたいにティン！と来たり、アラームを検知した瞬間にそ

の場を飛び退くと隠れていた猛獣が
先ほどまでいた場所に飛び込ん出来たりと、もう予知能力でいいん
じゃね？というレベル。

そしてじじいが迎えに来ると本能的に悟った私は、じじいが単独で
乗って来ていることを木の上から確認。

懐から「残り」１ベリーになったコインを親指で弾く。回転して私
の目の前に降りてくる前に凸ピンの姿勢。

今までの鬱憤と能力開発の集大成を電気に変えて…

光速に限りなく近い超極太電子レーザーが、じじいが乗っている小舟もろとも跡形も残さず吹き飛ばす。

物質（１ベリ）が超高速で動いた結果の衝撃波で海から天高く水柱が立ち、衝撃波の余波が孤島を襲う。

しかし、今の私はその余波が心地良い。まあ、じじいは恐らく何らかの力で死んではいないだろう。

だからこそ撃つたのだ。…無論亡き者にしてやるという意味は存分に乘せたが。

亡き者には出来なかったが、奴さんを気絶させることは出来た。

幸いにも孤島の海岸に打ち上げられていたじじいを回収した。簡単な治療をして数時間。

むくりと起きて拳骨を一発もらったが、何故かそこまで怒っていない。

「この分だと、前線でk…」

よく聞き取れなかったが、まあグランドラインに配属にならなければ

ばいいや。

その後、どこからともなくデンデン虫を取り出して小舟が大破したと一報を入れて部下に迎えを要求。

まあその二日後に海軍の軍艦が着て私は無事に海軍本部にいったん帰還した。

その後、何故かじじいが六式の取得を強くお勧めしてきたけど、体が出来上がってないので理論だけおいしく頂いて、フーシャ村へ帰った。じじいは任務が何かで途中で別れた。

そして、ルフィとシャンクスのお出迎えである。

そういえばこの時期って確か、ルフィがナイフで自分の顔を傷つけるような…

まあいいか。原作軸に乗ってその場面を見れるだけで感動もんだよ。ミルクをこきゅこきゅ飲んでるルフィを見ながらそう思った。あ、救急セット用意しなきゃ。

ある日、いつも通り朝起きたら何か外が騒がしい。

「俺は遊び半分なんかじゃない！！証拠を見せてやる！！」

朝から我が兄ルフィが騒がしい。ナイフ持って叫ぶなよ。

「ヤソップさん、何が起きてるんですか？」

射撃が神懸かっているおっさんに話しかける。

「あ？おお、アイラか。坊主のやつ急に俺たちの船で覚悟を見せてやる！とか何とか言ってるこの様子」

成程。いよいよもって原作の一番最初の場面なのか。あつという間だったな…あれ？本格的に冒険に行くまで、後どれくらいの期間があるんだっけ？まあいいや。

「そう」

「そうって…相変わらず淡白だなあ嬢ちゃんは」

まあ、見てて飽きないよね、ルフィ兄は。

「イッツツツテエ〜!!」

「ば、馬鹿野郎！何やってんだ！」

「はい、救急セット」

「嬢ちゃん用意周到すぎるだろ!？」

「あー痛くなかった」

「うそつけ！」

「うそだね」

マキノさんの酒場について怪我の痛みが落ち着いてきたのか、心にもない事をいうルフィ兄。

まあ嘘なのは見え見えなんだけど。

「全然痛くねえんだ！怪我だって怖くねえ！だから次の航海に連れてつてくれよ！」

その言葉に爆笑しながらシャンクスが反論する。

「カナヅチは海賊にとって致命的だぜ！」

私は既にカナヅチだがまだ誰にも見せてはいない。海賊になる気はこれっぽっちもないから良いか。

海軍での事務仕事が私を呼んでいる！

「嬢ちゃんもそう思うだろう?」

「確かに」

「な、アイラまで!」

ムキーと怒る姿は子供らしくてほほえましい。このまま成長しても
らいたいものだ。

「で、でも俺は闘いでも強いんだ!パンチなんてピストルみたいな
んだ!」

「へえーそう」

「お前ら馬鹿にしてるのか!?!」

まあ、何でそこまで海賊にこだわっているのか分からんが、志は素
晴らしいと思う。

「まあ、がんばって」

「すっげえ投げやりだな...」

「なげやり?」

...もう少し頭が使える大人になってほしいと心の底から思った。

「邪魔するぜえ」

ガン!と扉を蹴飛ばして入ってきた柄の悪い男たち。ああ、確かな
んだっけ...そう、山賊さんだ。

のしのしと肩を張って威嚇しながら歩いてきているが、残念なこと

になで肩なので威圧感ゼロ。

「俺たちは山賊だ。が、別に店を荒らしに来たわけじゃねえ」

もうすでにドアが破損してるからね。

「酒を売ってくれねエか、樽で10個ほど」

まあお酒なんかあるわけないよね。今まで散々バカどもが飲んでたからな。

ふと、シャンクスが手に持っているお酒がある。

「ねえシャンクス」

「なんだ、嬢ちゃん」

「それ」

ああ、と納得してくれたのか、山賊のリーダーに向かって

「これでよかったですらやるよ。嬢ちゃんのお勧めだ」

結構安ものだと思ったけどね。まあないよりある方がいいよね。何事も。

むしゃむしゃと野菜サラダを食べているときいきなり瓶が割れる音と共に、お酒が少し私の顔にかかった。

む、やはり安物だったか。

「この俺が第一級のお尋ね者なのを知ってる事か？ああ？」

あーあー、勿体ねえと聞く耳持たずに後かたづけを始めるシャンクスに腹が立ったのか、

抜刀して、カウンターの上の食器をなぎ払っていく。私のミルクも巻き込まれてご臨終なされた。

私も掃除するために箒を用意するために席を立つと同時に、山賊が一言。

「じゃあな腰又ケ共」

ルフィ以外は全員スルーしたのは言うまでもない。

まあ別に私の能力でのたうちながら殺してもいいが、ぶっちゃけ村でそんな物騒なことをしたくない。

別段あの山賊は村を襲っているわけではないので、華麗にスルーするのが得策なんだが…

「何で戦わないんだよ！あんな事されて笑っているなんて、海賊じゃないぞ！！」

まあ、海賊に夢見るお年頃の男の子にはやはり、我慢ならなかったよ
うだ。

「知るか！弱虫が移る！！」

シャンクスがルフィを諭したが、逆効果で怒って帰ろうとする。シヤンクスの手がルフィの腕をつかむ。

ビヨーン

本当に、面白いな…ゴム人間は。

山賊が去って、ルフィ兄はゴム人間になった。

…そうして原作を振り返って思う。シャンクスが片腕にならなければ、この世界はどうなるんだろう。そう思うと、実行せずにはいられない。

あの海の主を私の能力でしばらく動けなくすればそれどオツケーかそれとも…ま、今まで楽しかった分のお礼でもいましようか。

シャンクスたちが航海へ出て早2ヶ月以上。多分このタイミングだというのを私の直感が教えてくれる。

そして、町が騒がしくなる。

ルフィ兄が案の定山賊たちにリンチにされている。

ルフィ兄はゴムだから被害が及ばない私の能力でやつらをしびれさせてもいいけど…

まあここは原作通りシャンクスを待とう。

「よし、売り飛ばすのはやめだ。殺しちまおう」

刀を振り上げた瞬間

「港に誰も迎えに来ないかと思えば…」

そう呟きながらシャンクス達が騒ぎの中心へ来た。それを確認し私は海岸へ先回り。

海の主が出没する海域がよく見渡せる高い場所へ移り、機をつかがう。

おせーおせー！

山賊の頭に引きずられてくるルフィ兄。小舟に乗ろうとした一歩手前で

サンダーボール
電気玉

電気の球が小舟を襲い粉々に破壊する。

「だ、だれだ！」

自身がいた場所から飛び降りて姿を現す。

「な、なんだ…ただのガキか」

「アイラ！」

まあ5歳だからね、その評価は間違えていない。だが、決定的に間違えている。

「ルフィ兄、パンチはピストルみたいに強いんじゃないの？」

「う、うるせえ！」

「へへ、人質がもう一人のこのこ現れるとは…俺に運の女神が微笑んでるぜ」

運の女神ね…まあ殺しはしないけど。

「ねえ」

「あ？怖くなつたか？だがだ」「ねえ」「何だ！！」

「おかしいと思わないの？」

「何がだ？」

気付かないというのか…この場には私とルフィと山賊さんしかいないのに。

「誰が船を木っ端微塵にしたと思うっ?」

にやっとしながら山賊に話しかける。

「…は? 誰って…いや、それは…まさか…」

「ねえ誰が木っ端微塵にしたと思うっ?」

バチツと一瞬体に電気を帯電させる。そこで悟ったのか

「う…あ…くるなあ!」

「アイラ…お前…」

「ふふ、800万ベリーで何が出来るかな?」

「うあああああああああああ!」

「まさかアイラもいつの間にか能力者だったとはな」

赤髪海賊団がとうとうこのフーシャ村を旅立つ時が来た。シャンクス
の腕は…健在だ。

あの後には普通に痺れさせて警備隊に連行してもらった。賞金は半分
村に寄付して半分自分とルフィの財産にした。シャンクス達にも謝
礼として渡そうと思ったが、お金には全く困っていなかったので遠
慮なく貰った。

「うん。おじいちゃんが去年どこかのジャングルでいきなりサバイ
バルしろって言うからさ、変な果物食べたら…」

「それが、悪魔の実だったってわけか」

こくりと頷き肯定の意を返す。

「…嬢ちゃんは海賊になるのかい？」

「ううん…私はむしろ…捕まえる方かな」

「はは、そうかい…じゃあこの麦わら帽子は…ルフィ！……お前に
預ける」

ワイワイと航海の準備をしている最中に話しかけられ、麦わら帽子
はルフィに渡った。

「海賊王に！俺はなる！」

ルフィの宣誓が青い空に響き渡った。風は今日も優しく吹いている。

将来は（後書き）

誤字脱字等ありましたらご指摘をお願いします。

旅立ち

さて、8歳になった私の身長は119？と素晴らしい身長だ…あれ？何か低くない？まあ、いつか。顔つきも女の子らしくなってきたいる。

確実に美人か美少女にはなる。うむ。母は誰かわからないが、さすが主人公の妹だ。

まあさすがに同人誌で見た蛇姫レベルまではいかないと思う。まあそれでも十分すぎる。

能力開発と体力作りと航海術と…いろいろやりたかったけど、まずは能力開発と体力作りに励んだ。

能力開発はいたって順調。認識一つで電気の威力が段違い。故に恰好よく三段階の形態を作った。

変身といっても、纏う電気の色が違くなるだけなんだけど…

まずは、最初の段階「ブルースターター」は1000万Vを扱う。

纏う電気の色は青っぽい白

次に、2段階目「ブルージェット」は1億Vまで解放。纏う電気は青

最後に、「エルブス」は1億V以上の解放。纏う電気は深紅

何か、格好がいい気がしたから。形態あるってほら、ロマンでしょ？まあ本当のことを言うと、区切りを付けることによって意識的に切り替えが出来るようになってる。

技も大きいものから小さいものまで開発済み。まずは戦闘時、自身の神経の電気を操って驚異的な

反射速度と移動速度を実現させる。名前は別がない。戦闘態勢は常にその状態なのだ。

体が思ったように動くのは相当なアドバンテージなのだ。そこそこの怪我でも関係なく力を発揮する。

さらに形態を解放する事によって速度、反射速度等も上昇するのだ。

後は、「ブルースターター」状態での必殺技が「千鳥」…まあ某忍者漫画のあれだ。

溜めは必要なく瞬時に展開が出来る仕様になっているが、余裕があるときは溜めるよう心がける。

理由は簡単だ…そこにロマンがあるからさ。

「ブルージェット」の時にプラスされる必殺は「レールガン超電磁砲」

まあこれも、某魔術のやつです。理論なんて分かりません。悪魔の実だから実現可能なのです。

まあ今は3年前よりも威力が段違いに上がっており、今ならじじいを仕留められる…と、思う。

最初はコインを弾いて撃つたが、別に無くても撃てる。まあ物質の衝撃波は出ないけども。

最後の形態「エルプス」状態で発動可能な必殺は「クンゲニル神の槍」

…実を言うとまだ試したことはない。エネルの小島ひとつ吹き飛ばした威力のやつを凝縮した感じなもの。

作成した時の威圧感は異常でした。私でもこれを受けたらまずいんじゃないかな？と思うほど。

多分普通の人は当たった瞬間に残骸すら残さずこの世から消えることになると思う。

形は深紅の電気が凝縮されて何か、魔王がもってそうな禍々しい槍

と思ってくれ。

後は細々とした技がいくつか取り揃えてあります。戦闘方法は速さで勝負な近接型を目指そうと思ってる。

……っは！事務仕事を目指しているんだった………まあいいや。
この世界は強くないとやってけなさそうだしな！うん！

体力作りは理論だけ習った六式を主に鍛錬している。

この世界は鍛えれば鍛えるだけ力がついて来るように感じられる。
なので、ガンガン鍛えてがつつり休む。

結構充実した日々を送っている。たまに、ルフィとエースを交えて航海術の勉強会を開いている。

まあ、ルフィはまったく聞く気はないのか、はなっから寝ている。

私とエースは意見を交換しながら

勉強する事がもはやデフォルトの状態になってしまった…当初はルフィも混ぜようと必死だったが、

あまり言うことは聞かずに寝たりして結構やりたい放題だった。まあそこがルフィらしいと言えばそうなのだが…勉強している身にもなってほしいものである。

まあ後はお二人さんが組手をしているのを見学してたり、私も少し混じったりする。

「アイラは結構筋あると思うぜ」

とは、エース談だ。ちなみに私が能力者だということは既に周知の事実。

電気操れますと宣言した時のルフィの顔は結構おもしろかった。その後いいなあ！とせがまれたが、

「ゴムに電気は効かないんだよ」

サンダーボール
電気玉を軽く当てるが何ともない事実に見てみるとこちらも微笑ましくして直る。

だっはっはっは！と笑っている姿を見ているとこちらも微笑ましくなる。

…電気から生まれる熱量に耐えられるかは別と言うことは、墓場まで持っていく事にした。

エースはと言えば、やはり泳げなくなるのが嫌なのか、あまり羨ましがらなかった。

まあエースは戦闘者としての才能があると思う。…全力を出せば私が多分圧倒する…と思う。

そういえば、海軍にはいるんだから敵になるのかあ…まあどこに配属されるかわからないから何とかなるだろう。そうそう、もうすでにじじいには海軍へ入隊する事を宣言している。すっごい笑顔になつて

「よーし…9…いや、今年からもう海軍本部で修行じゃ…！」

こいつは馬鹿か。と思ったけど、やはり六式は海軍本部で修行が一番効率がいいと思う。

剣とか、鉄塊とか出来たには出来たが…果たしてそれが正しい形なのか分からない。

故に海軍本部でみつちりしごいてもらい完璧な六式を覚える。

……事務仕事は…ええい！もう諦めたわ！この世界に来てからはあんまりじつとして仕事とかやりたいと思わなくなっただ！つか、前世でそういう仕事やったから今回は思いっきり動くんだああ！

「アイラ、何力んでんだよ…出すなら家で」

ルフィの顔面を思いつきり殴ってやった。結構派手に吹き飛んだ。20?以上も身長が上の人間を吹っ飛ばす少女…すごくシールドです。

「さすがアイラだぜ…パンチのキレが半端ない」

褒められても嬉しくねエ。

しかし、やはりエースは強い。何かこう威圧感がある。他を圧倒する何か…カリスマ的な何かを持っている。それが何なのかは…分からない。もう少し原作を読んでいたら分かったのかもしれないが、生憎そこまでは分からない。故に、私が海軍にお世話になる前に、その秘密を知っておきたかった。

「なんだ、アイラ夜遅くにこんなところに呼び出して」

手っ取り早く拳を交えればいいじゃないか、と思い即実行し、エースを深夜に呼び出す。

「エース…私と決闘して」

「……へえ…本気なんだな」

エースが持っている不思議な何かも確かに、知りたいが、もっと知りたいのは…ルフィとエースの「過去」

ルフィがじじいに連れていかれて、エースと出会い、何があったのか…聞いても言葉を濁すだけで教えてくれないし、ルフィも何か知っているが口を割ろうとしない…それ故に今は話せない事情があるのか、それとも仲間はずれにしているのか…切り分けをしたい。一体、私がジャングルに言っている間に何があったんだろう。

エースの言葉に頷いて肯定の意を返す。まあ能力は初期段階の「ブルースターター」で行くつもりだ。

「エースのその纏っている…何と言えればいいかわからないけど、そのオーラ…それが何なのかを見極めたい」

そうか、と一言つぶやいてエースは構えてくれた。

その事に感謝をしつつ、全身の電気信号を掌握し、いつでも動ける姿勢にする。

瞬間、二つの影は月を背にしながら激しい舞踏を開始した。

まずは、どう勝つかを模索。結果鍛えようがないみぞにストレートを決めるという結論に至った。そのための道筋を作っていかなければならない。二人の拳が衝突した瞬間、力は完全に負けていると判断。交えた瞬間にタイムラグほぼ無しに顔面めがけて上段蹴りを鎌の如くエースにお見舞いする。

背を低くして避けられてお返しと言わんばかりのアップパーパンチ。子供とは思えないその速度で数多の猛獣や賊を葬ってきた鋭い攻撃だ。あせらず、蹴りの余韻で体を回転させて受け流し、足払いをかける。ジャンプをして避けられるが、その時間を利用して距離を一瞬にしてあける。

「っは！やっぱルフィより強かったか！アイラ！」

何かに火がついたのか、威圧感が段違いに増した。子供、大人という括りで決定つけられない何かを纏っている。これがいったい何なのか…それを手にしたい。平和に生きたいと思ってるのにこの矛盾自然に口が吊り上がる。

「私は、海軍へ入る。もちろん海賊を取り締まるために」

「海軍何かの何が面白いんだ！俺たちと一緒に、この広い世界を旅しようぜ！」

そう言い合ってお互い全力で攻防を繰り広げる。

「確かに、この世界を見て回るの面白いと思う。だけど、犯罪を冒してまで回ろうとは思わない」

「そんなのは関係ない！俺は自由に世界を見て回る！それに都合が

いいのが海賊なんだ！犯罪を犯そうとは思っていない！」

強烈な一撃が私の胴体へ入る。完璧なカウンターだが、私は無理やり体を力に逆らわないように態と吹き飛ばされてダメージを最小限に抑え、空中でバク転して着地する。

「でも、エースだったら海賊にならないで、冒険家でも安全に航海は出来ると思う。なんで冒険家にならないの？」

「俺は…約束したんだ…あいつと！ルフィと！【くい】の無い生き方をするって！俺はやりたいうようにやる！人がどう思っているなんて関係ねえ！」

ごう！つとエースの気迫が「形」になって迫ってくる。正直立っているのも辛いが倒れるわけにはいかない。

「…私が何で海軍になろうと決めたか…知ってる？」

「……」

「それはね、エースとルフィ兄が海賊になるんだったら私は海軍になって二人を捕まえるの。それで、私が二人に付いて行かなかった期間に何があつたか問い詰めるの」

「…！…それは…」

「今は言わなくていい！…でも、約束して…もし私がエースとルフィを捕まえたら…真実を聞きたい」

真剣な目でエースを見つめる。エースも私を見つめ返す。

「っは…そうなったら俺たちは多分死罪だぜ」

「そう…そんな大物になるんだったら、やりがいがある仕事になりそうね」

「ぬかせ」

そうしてまた私たちは衝突しあった。…不思議とエースから感じていた威圧感は…感じなくなっていた。

結果からいえば、私の負けだった。そして、エースが何を纏っているかがようやく理解できた。

名前はなんかオーラと適当につけるけど、私のオーラはずいぶん攻撃的な物だったとは決闘後のエース談。

「私はあと…ひと月でこの場所を出る」

「…そうか…まさか、俺たちの中で一番ちっこいアイラが先に巣立つとはな…」

しかも、実力も隠してたしよ…とちよつと不機嫌なエース。

まあいいじゃないかと笑うと、まあな…と髪を掻きながらつぶやく。…まあ能力と六式は使ってないけどもけどね…：…そうして私たちはそれぞれの帰路についた。

「寂しくなるのぉ」

出発直前に村のみんなが港に集まって来てくれた。

村長はそう言って本当に寂しそうな顔をするもんだから結構堪える。

「アイラ！何で海軍何だ！？俺と一緒に海賊になろうぜ！」

ルフィはエースと同じことを言っている。しっかし、海軍の何がダメなのか逆に聞きたいよ。

「ルフィ兄…私には私の目標があるの」

それだけで意思が伝わったのか、急に静かになり笑顔を見せる

「…そうか、アイラがそう思うなら、俺は何もいえないな」

ニシシと笑うルフィは何処か男の顔をしているように見えた。

「ルフィ兄…次に会う時は…敵同士だね」

「なーに！それでも兄妹だろ？」

「ふふ…ありがと」

そうお礼を言っつて海軍の軍艦に乗る。さすが中将が乗っている事だけはあつて、かなりでかい。

「お別れは済んだかの？」

じじいが顔を覗かせて私の様子を見る。頷いて肯定の意を返し、船に搭乗する。そんな時

「アイラ〜!!」

エースが何処かの屋根の上で大きな声でこっぴつた。

「約束は…絶対守る！だから…待っているぜ!!!!」

甲板にたどり着く前に振り返ってエースに向かってサムズアップ。勿論だという意思を乗せて。

「出航〜!!!!」

船は海軍本部へ向けて海を渡って行った。この大海原に希望を乗せて。

旅立ち（後書き）

形態のモデルは超高層雷放電です。

誤字脱字等ございましたら、ご指摘をお願いします。

海軍本部へ

海軍本部に行く途中、私は海兵さんと混じって端っこの方で一緒に特訓していた。

やはり、自主特訓じゃ限界がある。そう実感せざるを得ない。なぜならぐんぐんレベルアップしていくのだ。

戦闘は確かに臨機応変だが、何事も基礎がしっかりしていないと何にも対応できない。

故に、海兵さんの訓練は非常に基礎の土台を作るのにつけてつけないのである。

その訓練が完了した後に、じじいと特訓を開始する。勿論六式だ。

剣と鉄塊なら合格圏内で月歩以外はあともう少し、月歩はまだまだという評価を受けた。正直、剣と鉄塊ってあれでよかったのかと今更になって思う。

それと、エースとの決闘で得たオーラの正体がわかった。覇気、というものらしい。

その覇気には3種類あるらしい。ひとつは周りを見通せたり先が読めたり出来る覇気。武器の強化等が出来たり、能力者にダメージを与えられる覇気、最後に周りを威圧する覇気。

私は、威圧する覇気以外すべて習得可能であるとの事。中でも強化の覇気はすば抜けている。らしい。

実際に鍛えて伸ばしていかないと分からないと思うんだけどね…

まあじじいが経験則の元判断しているから、間違っではないと思
うけど…まあいつか。ないよりあるに越したことが無い。

ちなみに、エースとの決闘は剃とか使っておりません。…驚く顔が
目に浮かぶぜ。

まあそれはさて置き、今日もじっくり鍛錬しますか！

s i d e ガ ー プ

わしの孫娘はまさに天才じゃった。孫もなかなか才能があると思
うし、将来でかくなるだろうとも思う。

確かに、器としてみるなら孫の方がでかくなるだろう。じゃが、事、
戦闘に関しては孫娘の方が圧倒的に軍配が上がるのは明確だ。正直
8歳の少女が六式をほぼマスターしている何て夢にも思っておら
んだ。

部下も、ワシと一緒に六式の特訓した時は口をあんどり開けていた。
それはそうじゃ

自分たちが長年かけてようやく少し使えるようになる六式が、8歳
の少女が軽々と使つてのけるのだ。

…ワシも理論だけは教えたのだが、まさかたったの3年で物にする
とは思わなかった。

アイラに対しては。辛口で評価したかの。

月歩以外なら十分に合格を与えてもいい。剃と鉄塊はもうマスター
しているのではないのかの。

それほど完成度が高い。月歩はあともう一步といったところか。

…この力は絶対に海軍に留めておかねばならん。この子が海賊志望

じゃなくて本当に助かったわい。

まあこのことは既に上層部に報告済みである。また、アイラが海軍でどの位置に落ち着くかも…

既に決定している。とにかく、限界のギリギリの範囲で無理をさせて経験を積んでいって欲しい。

恐らく我々の想像以上だとは思うがの。

さらにビリビリの実の能力者という事もあり攻撃力も相当な期待が持てる。

というより3年前にこの身をもって証明されたしのお…正直覇気がなかったらと思うとぞっとする威力じゃった。一発のでかさでは既に将官クラスに匹敵していたからの。

さらに「覇気」まで使いこなしておるのは吃驚じゃ。…残念ながら霸王色ではなかったがそれでも十分。

むしろ他二つが飛びぬけておる。まさに戦闘に特化しとるの。

…今はどれくらいなのじゃろうか…本当に恐ろしく感じる…わけない。

確かに、戦闘者としての才能は天才じゃが…普段の姿を見ておるとそんな認識なんぞ簡単に吹っ飛ぶ。

まずは、かなり愛くるしい。身長が119?とかなり低め。そして起きた時に眼をこすっている姿に思わず頬ずりをしてしまったの。

…電気ショックをプレゼントされたが、それもちょっとしたお茶目みたいなもんじゃ。

総合的に言うと不思議な子じゃ。そんな少女をワシら海軍は歓迎するぞ。アイラよ。

直ぐに戦場に行くかはどうかは…まああの子次第じゃな。

side アイラ

海軍本部に到着して甲板へ出て思う。相変わらずでかい。

そう思うのも無理はない、この海軍本部は全世界の海軍の総本山なのだ。

そしてこの海軍はグランドラインの真つただ中に存在する。最前線の基地でもある。

海軍本部はその中に居住区もあり、相当な広さを誇る。そして何と言つても和風な建物が数多いということも挙げられるだろう。元日本人の私にとって、馴染み易い空間になっていてかなり嬉しい。

さて、海軍本部へ到着します早速向かうのが…センゴク元帥に報告である。

じじいに連れられてひたすら長い通路を歩いていく。途中様々な人とすれ違つが、皆敬礼をする。

…そういえばこの人中将でしたね。あまりにもフレンドリー過ぎて忘れていたよ。

そう思っていると、ふとじじい…ガープ中将の足が止まった。どうやら目的の部屋に付いたようだ。

まあいくらフレンドリーなガープ中将だけど、流石に元帥の前では緊張するか…と、思っていたが

「センゴク！連れてきたぞ！」

ダン！と扉を開けてズカズカ入りこむ。……これで良いのだろうか。考えるのを放棄して部屋に入った。

「もう少し礼儀良くとは言わん。静かに入って来い」

「ぶわっはっはっは！いいじゃないか！」

「まったく…ところで、この娘が？」

そう話題を早速本題へ切り替えて、私に視線を向ける

「はじめまして、モンキー・D・アイラと申します」

ぺこりとお辞儀をしてセンゴク元帥の様子を見る。…うむ、この人が元帥ポジションというのがしっくり来る。つか、ガープ中将が明らかに異常なんだよね。

「ほう…ガープの孫娘とは思えないほど礼儀がなつとる。うむ、私はセンゴクと申す」

子供にもきつちり礼を尽くしてくれる何て…やっぱりガープ中将がフレンドリーすぎるんだな。うん。

「それで、海軍に入りたいと聞いておるが…まだ、8歳の身。…何に生き急いである」

ギン！と威圧感が増して私を見抜く。多分船で習った覇気をぶつけているのだらう。それを受け流して

「私には目標があります。それを達成するには海軍が一番都合がいいのです」

キツと見つめ返して答える。…どんどん威圧感が増していつてるんだけど…

「ほう…受け流すか…面白い。ただ、8歳で海軍に入って海賊共を捕まえるのはだめだ」

「…何故ですか？」

「海軍にも体裁というものがあるし、世間が子供を前線に出す海軍を信用すると思つか？」

…そりゃそつか。そういえば8歳の少女だったんだ。あくやっぱ無理だったか…

「まあそう落ち込むな。そうだな…10歳になったら何処か適当な部隊に付けて正式に入隊とする」

「ほ、ほんとですか！」

いやっふー！そうなくても後原作まで5年はあるぜ！じっくり社会勉強と自己鍛錬を怠らなければ確実にやつらを逮捕出来るぜ！…たぶん。

「その間までは海兵見習いという立場で修行だ」

「了解」

ピシッと敬礼を決めてセンゴク元帥に応答を送る。

「只今をもってして、モンキー・D・アイラを海軍本部勤続の海兵見習いとして入隊を許可する」

「ありがとうございます！」

敬礼の姿勢のままびしっと決めた。今日から海兵生活かあ…がんばるぞ〜

「ぶわっはっはっは！流石はワシの孫娘じゃ！」

流石に横やりは入れてこなかったガープ中將が笑いだし肩を叩いてくる。結構痛いです。

「おい、ガープ痛がつてるぞ」

「大丈夫じゃ！なんとってワシの孫娘だからな！」

お次は頭を叩いてきた。けどここで反撃すれば上官に対しての不敬罪となりうる…おのれえ…

「ガープ、そろそろ訓練について話をしたいのだが」

「お、勿論ワシが教官であろう？」

それについてだが…とセンゴク元帥が提示したのは

- ・ 訓練所は能力者がよく訓練する場所か、無人島
- ・ 教官は誰か空いているもの

の二つである。まず一つ目の理由がガープ中將が私の能力で気絶した時の事も報告していたらしく、

海軍本部でやると被害が発生しそうなので、能力中心の訓練であれば無人島の使用許可をするというもの。

二つ目はそのまま。誰か空いている人が訓練する際の教官となる。

「以上だ。何か質問は」

「ありません」

「よし、住居についてはガープのところでもいいだろう」

「むしろそのつもりじゃ」

まあ妥当なところだと思うので肯定の意を示した。そうして、私の海軍での生活が始まったのである。

そうして迎えた最初の訓練なのだが…

「やあゝまたせつちやったかな」

黄猿ことボルサリーノであった。何でこんな大物が…と、一瞬硬直してしまっただが、直ぐに気を取り直して

「い、いえ！はじめまして、モンキー・D・アイラと申します。海兵見習いをやらせていただいております」

「礼義正しいね、わっしはボルサリーノ。まあ肩の力を抜いてねえ」

「はっ。お心遣い恐縮です」

…いや、正直まさかでしたよ。大将じゃなくてももっとこう…大佐とか中佐とかの方かなと思っただけ…

良い意味で裏切られた。…この人そうそう死なないから本気で訓練が出来そうだ。

「報告には聞いているけど、実際はどれくらいかわっしと模擬戦してもらっからねえ」

文面だけじゃ動きまでは分からないからなあ…そう思って敬礼を返して構える。

「おや、何か武器とか使わないのかい？」

「はっ、誰にも教わらなかったし、能力者なので不要かと思っております」

そうかあ〜と返事をし、いつでもいいよ〜と間の抜けた声で掛け声をかけるもんだから一瞬力が抜けそうになる。気を取り直して全身に電気を巡らせる…

「【ブルースターター】」

バチつと電気が鳴いた瞬間に剃をして、ボルサリーノの背後へ回り脚へ攻撃。普通の剃と違い電気を組み合わせた剃で普通の剃より数倍は速い。はずなんだが…

「おお！速いねえ〜」

と、光になって避けられる。ち、やはり覇気を使わないと勝負にもなりやしない。

であれば、覇気を全身に纏って攻撃の続行。

「へえ！覇気もつかいこなすの！」

驚いているすきに脚へと攻撃を行うが、足の裏で防がれる。

「サンダーボール
電気球」

防がれると察知した瞬間電気を練り、発射。ほぼゼロ距離からの発射だが、体を光にして距離をとられる。

「ふう〜ひどいじゃないか〜」

……本当にロギア系はチートだ。まずは防御力が高いというのもそうだが、回避力も相当高い。しかもピカピカの実は環境を問わない。ありとあらゆる場面で自身を光に変えられるチートぶり。また、光速での攻撃は正直避けられる気がしない。…あれ？こいつ弱点なくない？

「君ほんとに8歳〜？」

「8歳ですよ」

そう軽く言葉を交わして剃を掛けて接近戦を再度挑む。…まあこの状態じゃ勝てないという事は先ほどの攻防で確信している。案の定

「それじゃあ、こつちから行くよ〜」

と聞こえた瞬間に直感がアラームを検知、すぐさま覇気を纏い鉄塊をしてガードする。

瞬間、腕にもすごい衝撃が走り10m位飛ばされてしまった。…本当に人間かよ……

「あらあ、今のを防ぐの。すごいねえ〜」

…この余裕面を一発ぶん殴りたいぜえ…

「【ブルージェット】」

纏う電気を1億Vまで解放し、電気が青に変わる。

「ほお…」

此方を感じるように見るが、その余裕が命取り、先ほどの10倍の火力を持っている。

単純に10倍強くなるのだ。…無論速さも。

剃を掛けてボルサリーノの後ろに回る。最初の速度の10倍をもつてして。

「!?!」

たぶんボルサリーノの眼には青い軌跡が尾を引いて自身の背後に回ったという認識しか抱けないだろう。それほどの速度なのだ。さらに覇気を纏いローキックを入れる。

光って避けられた…が…此方のスピードが予想以上なのか足には焦げ跡があり、動きすらそうだ。

それはそうだ、超高压の電気が一瞬触れたのだ。むしろ、そこまで距離を取れた事に驚きだ。

「ほんと…8歳かい？」

「8歳です」

バチバチと青い電気を鳴かせて堂々と宣言する。相手の油断が完全に取れた瞬間であった。

不意に、ぴかっと光るが、先ほどほぼ変わらず瞬間的な攻撃で威力も相当ある。

避けることは不可能なので、先ほどと同じ防御でやり過ぎす。：残念ながら攻撃、スピード、反応速度、といった攻撃、移動、回避面以外ほとんど強化されない。故に先ほどと同じくまたもやブツ飛ばされるが、さらに追撃の踵落としが来た。電気で筋肉を強引に動かし空中で直感に頼り体を振る。

ガァン！

と、地面に陥没が出来るほどの威力があつた。私は紙一重で避けられて体制を整える。

「ほお〜面白い事が出来るもんだね〜」

あなたの方が面白いという事は口にしない。くっそ…必殺の超電磁砲はこの海軍本部内では打てない。相当な被害を被ると思う……いや、待てよ。打てる方法がひとつだけあるな。

「電気を使う器具ならコンセントいらすですよ」

軽口を叩いて、相手に正面から挑む。

激しい攻防の中、テレフォンパンチをお見舞いする。避けるほどもないと思つたのか、防御をして受け止める。そこで、距離をとり、一瞬にして青い雷を左手に纏わせ

「千鳥！！」

地面を抉りながら高速で接近して、相手の足を狙うように攻撃する。流石に超高圧の電気を貰うわけにはいかないだろうし、先ほど距離をとって避けられなかった。故に思いつきジャンプする。するし

かない。少しでも触れると、行動が少しの間：一瞬かもしれないが止まる。距離を開けられた時はまだ、1億Vでは無かったが、今回は真正銘1億Vで、何とも強力そうなのだ。違う方法で避けるに決まっている。そして、この瞬間を待っていた。

レールガン
「超電磁砲」

右手で密かに溜めていた電気を全力全開で解放する。4歳の際に出したものよりさらに強大になった超極太の電子レーザーがボルサリーノを襲う。

ヤタノカガミ
「八咫鏡」

天高く空に輝いた柱が覆っていた雲を拡散し、青い空が顔を出した。自分でもこんなに威力があるとは思わなかったです。はい。

「ちょっと〜！あんなの当たったらわっしひとたまりもないんだけど〜」

ぶんぶん怒っているが、一瞬間こえた八咫鏡で瞬間移動して避けたのだろう。

マジ強い。さすが大将である。

「まあ、これで君がどれくらいかわかったよ〜、だから今日はここでおしまいねえ〜」

君も疲れたでしょ？と伝えられるが、まだまだ動ける。

「まだ動けますよ」

「…まあガープ中將の家系だからねえ〜」

と、あさつての方向を向いて何か納得していた。何が不満なんだろう。まあいいや。

休憩する事も仕事と言われて、今日は解散となった。：まざ全力では無かったが：いつか見せるときが来ると思う。その時全力出せばいいか。そう思って、私は自宅へ引き上げた。

海軍本部へ（後書き）

誤字脱字等御座いましたらご指摘をお願いします。

1・9 娘 孫娘 に修正しました。

1・14 息子 孫 に修正しました。

重み

最初の訓練から早1年が経過した。週に5日訓練で、2日は休暇を貰っていた。給料は一応雀の涙ながらに出る事に驚きだ。理由を聞いた所「自立するにも何でもお金が必要になつてくるし、一応海兵だから」というものであった。まあ訓練は確かにやるが、他の部隊の雑用や、訓練場の掃除とか諸々といろいろお手伝いをしていたからだとも思う。しかし、前世でひいひい言いながらやつとこ稼いでいた事の比べ、今は確かに体力的に辛いが、それでも面白い、楽しいと感じているという事は自身にとって僥倖といつても過言ではない。

この1年でのイベントはジンベエが王下七武海に入った事だ。まあそれによってアローロンが解放されてしまったが……すまんナミ。私はどうやら力になれそうにもない。つうか、海兵見習いが上の方針に文句が言えるはずもないけどね。まあ実際は気付いたら終わっていた状態なんだけど。

まあそれはそれとして、この1年間で確実に成長出来たと自負している。まず挙げるのが六式のマスターが挙げられる。無論六王銃も使用可能である。さらに自身の能力も加味するので威力だけならならんでもないクラスだ。まあそれでも体がまだ完全に出来上がってないので、無理はしていない。…けど、何だろう…まだまだ強くなれる気がする。

次に能力なのだが…まあ随時能力を解放してもあまり疲れを感じなくなつたのと、六式との複合技が出来上がって来たと言つた所かな。電気の使い方をまだまだ勉強しないとなあ…もつと日常でも使えるような便利能力にしたい。つかする。…そんな中だ。

急にガープ中将に呼ばれたかと思つたら、海賊の殲滅戦に出るとの事。おいおい、10歳になるまで仕事はしないんじゃないのか…と思つた。その事を聞いてみると

「これは訓練の一環じゃ」

そう言つて、船に乗せられた。無論、ガープ中将の船である。まあ、いいやと軽い気持ちで船に乗つた。

海軍は基本海の上を漂つて海賊を見つけるか、目撃証言、もしくは駐屯している海賊の情報を頼りに、ログポーズを必要なだけ持ち出して航海を実施する。勿論期間が決まつており、それにより食料等の量も決まつてくるし、お金も決まる。

そついつた細かい所を中将の部下の方に教わりながら、航海の準備を整えた。

今回の目標は賞金首6000万ベリーの「ヤムチエ海賊団」の殲滅である。とある拠点から件の海賊団が駐屯しているとの情報が入り、結構近いという事もあり中将とその部下+私という形で任務に当たる。

帆を広げて前進する。ここら辺はまあ航海術を嗜む程度の私ではどうこう出来るレベルでは無いので完全にお任せ状態だ…人には向き不向きというものがあつてね。まあ何だ、航海なら普通にできるけど、こつ波とかの予測とか全然わからない。まあグランドラインとついうのもあるけど、それを差し引いても航海術の才能は無いのだから

う。

1週間が過ぎて件の海賊団が駐屯している島に付いた。…普通に海軍支部が立っている島である。

よくもまあ堂々と…そう思って戦闘の準備を整えている最中ガープ中将が

「のう、アイラよ…命の価値とはどう決まると思っ」

突然の質問に戸惑ったが、決まるといふより、初めから平等。という答えを返していた。

「そうか」

その一言だけ残し、海賊団を殲滅するために部下に指示を出した。無論私の配置も既に指示が出ていたのでそれに従った。先ほどの質問は…これから来る実戦の興奮で既に頭の奥深くに眠っていた。

私の配置はガープ中将と同じ本体に決められた。この他にも偵察、奇襲と各部隊が揃っている。

本体の役目は奇襲で混乱した所を一気に畳みかける役目、つまり部隊の火力係だ。

私の能力も生かせるし、この配置は嬉しいところだ。何かあれば直ぐにガープ中将が駆け付けられる。

偵察部隊が戻って来て、町の住民も避難し終えた。幸いというか、そこまでアクティブな海賊では無かったが、やはり住民に死者が出ているらしい。被害状況を淡々と報告している海兵の姿は何処か無機質に感じられた。

「奇襲部隊が仕掛け、間を置いたら直ぐに当たるぞ」

「了解」「了解」「了解」

本体は、海賊が拠点にしている所から少し離れたところで待機し、奇襲部隊が動くのを待つ。

少し経つと、人の怒声や悲鳴が上がって来た、その時に

「これよりヤムチエ海賊団を殲滅する！」

「了解！」「了解！」「了解！」

その合図で本体からの攻撃を仕掛ける。まあ、殲滅と言っても殺しはしないだろう、ガープ中将の力量をもってすれば、無傷で海賊を捕える事が出来る。そう思っていた。

しかし、その認識は間違っていたのだ。これは、漫画の世界じゃない。現実なのだ。

刺が出来る者は激戦区へ足を進め、スリーマンセルになって敵と当たる。私は能力者でこの部隊の中でもレベルが高いという事と、ぶっつけ本番で何処かに組み込むわけにはいかないなので、遊撃担当になった。

「ぐあああああ！」

剣を使いながら敵を撃破していく。無論、殺してはいない。その必要性を感じなかったからだ。

だから、普通に蹴りを入れて足を折ったり電撃を浴びせたりと再起不能だと思っレベルで留めておいたのだ。

「クソ！海軍の英雄様が俺たちの海賊団に何の用だ！」

船長のヤムチエが出てきて怒声を上げる、海賊に用なんぞ決まっている。

「年貢の納め時じゃ」

ピシッと固まるのもつかの間

「う、うああああ！」

声をあげて、一気にガープ中将に向かって来たが

「アイラ！お前がやるのじゃ」

「…了解しました」

上官に質問できる立場でもないのです、ここは私が相手をする事にした。

「は、はは…海軍がこんなガキを連れてくるとは…なめんじゃねえー！」

「…【ブルースターター】」

バチつと体に電気を纏わせて戦闘態勢へ、能力者という事に一瞬ひるんだが、剣を片手に突っ込んでくる。

「俺が何故6000万の賞金首なのか教えてやろうか！」

そう言ってグン！と、スピードがかなり速くなったが…私から見れば正直鈍い。

鋭い突きが私の顔面に入る前に、剃を掛けて一瞬で背後に回る。首

筋に電気を当てるが、何と耐えきっていた。

「があ！…くそ！こんなガキに…やられてたまるか！」

まあ悪あがきなのだろうか、動きが先ほどより怠慢なので懐に潜り込み覇気を纏わせた拳でみぞに思いつきリストレートをに入れてやり、ヤムチエが派手な音を撒き散らしながら数十メートル吹っ飛んだ。奇しくも私が今まで戦っていたところだった。

「もう降参しなよ、楽になれるよ」

「…は…誰が、するかよ…」

息も絶え絶えに答えるが、もうこいつの未来は決まっているだろう。そう思つて、縄を取り出し捕まえようとしたら突然、ニヤッと笑つた瞬間に

「う、うあああああ！」

どこからか潜んでいたヤムチエの部下が私に斬りかかって来た。あまりにも突然の事で体がまったく…脳がまったく状況に追いついていない。走馬灯が頭の中で流れていく。そのスローの世界で見たものは、私が良かれと思つて生かしておいた、敵であった。

死にたくない。

そこからは自然だった。脳が理解するより前に体が状況に追いついたのか、一瞬にして千鳥を展開して、斬りこんできた敵の斬撃を避けて懐に潜り心臓を思いつきりこの手で貫いた。大量の返り血が妙に温かった。

「じはあ…あ…し、に…た…」

最後まで声を発せずに、襲いかかった海賊は…息絶えた。いや、私に殺された。

「え…あ、ち、がう…違うよ…」

完全に頭の処理が追いつかない。が、体は無意識に反応するもんだ。直感がアラームを検知して咄嗟に左腕に鉄塊を掛けた腕で首をガードする。

キン！と金属音が鳴り響いた。

後ろを振り返ると、ヤムチエが驚いた顔で此方を見ている。そこまです理解した所で既に私の腕はヤムチエを貫いていた。

「え…また？…いや、違う…これは…違う！」

「何も間違っではない。これが現実じゃ」

これが現実。これは漫画の出来ごと…違う。これは…紛れもない…現実だ。

その事を理解した瞬間に、私は自我を保つために慟哭をあげた。そうでもない気が狂いそうだった。

「のう、アイラ…命の価値は…どうやって決まる」

帰りの船で吐いて、ずっと眠り続けた時にそうガープ中将が質問してきた。

私はそれにこたえる気力すらない。正直、自分が殺人を犯した事に対して理解はしているが、まだ受け入れられていない。しかし、その事を気にしていないのか、こう言ってきた

「命の価値はの…自身の価値観で決まるのじゃ。自分の身近な人が死んだら悲しい。が、まったく見ず知らずの人間が死んでも、涙は…出てこないじゃろ」

確かに、死者が出たと聞いても涙は出てこなかった。

「それが人間というものじゃ。だが、ここは海軍でお主は海兵じゃ。故に海軍の価値観に従わなくてはならない。その観点からみるとアイラよ、お主は正しい結果を導いたのじゃ。犯罪者に人権無し。あの結果で…正しかったのじゃ」

諭すように、言い聞かせるように話しかけてくる。

「じゃがの、アイラよ。…お主にはそうなってもらいたくはない。

何故ならそうなってしまうと、ただの機械になっってしまうからじゃ。確かにそれが軍としての理想の形なのじゃろう。じゃが…それが本当に正しいのかは…お主が決める事じゃ。それがお主の「正義」に繋がるじゃろうて」

軽い気持ちで来たこの任務だったが…これが海軍なのか。確かにガープ中将も、周りの方も、普通に…殺しをしていた。それが海軍の意向だから…政府の意向だったから。

「アイラよ。今回は軍に則って任務に当たった。じゃがの、自分の正しいに反する事はの…無理してやる必要はない。ワシらもまた、人間じゃからの」

そう、最後に言葉を残して気配が遠ざかっていく。

…これが軍隊…これが海軍。情け容赦なく敵を蹂躪する。しかし、それで町の人に平和が訪れるという事も確かだ。簡単に命を奪って平和をもたらすのが正しいのか…私にはわからない。けど、一つだけまた目標が出来た。…自分の正しいを見つけるという事だ。その日も夢見が悪かったが、朝はきちんと起きる事が出来た。

今日も空が青かった。

重み（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願いします。

あと、随時電気でこんなこと出来るよとかあれば凄く教えていただきたいです。

出会い

一つの正義を学んでから更に1年が経過した。もう10歳になり、いよいよ海軍の正式な海兵デビューだ。…と言ってもそこまで盛り上がらなく。どこの部隊に配属になるか教わり、それに対しての辞令を頂いただけだ。…まあ、そんなもんだろうと納得している。だが、この日から世界が変わったと言っても過言ではない…いや、あの日からも既に変化していたのだろう。何が変わったのかは表現し辛いけど何かが変わった事は確かだ。

身体的にもかなり変わった…身長も130cmとなり11cmもの成長を遂げた。

しかし、町に行って女の子を見るとどうも自身の身長が低いように感じられる。もう一息足りないような…

まあ別段気にしていない。筋力もトレーニングすればするほどついてくるしな。体は女の子らしさを保っているので不思議である。

顔ももう完全に女の子らしさが出てきている。少し吊り目気味ではつちりしている日本人みたいな黒い眼。

頬には少し赤みがあり可愛らしさを倍増してしまっている。鼻はすらつとしており絶妙な位置と高さがある。

口はふつくらしており、ピンクのルージュを塗ったように潤いがある。髪は昔から変わらずに腰まで伸ばしており、気分でポニーテールやツインテールにしている。

全体的にみると美少女…まだ美少女か？まあ何でもいい。正直、うつすらと喜びを感じている。

まあ、可愛くないより可愛い方がステータスになる。世間が渡りやすいと思う。将来はクールビューティーな感じになりそう。

海軍本部内では「電気ちゃん」と呼ばれている。…少し安直過ぎない気もしないでもない。

でも悪い気はしない。ガープ中将の娘…まあ孫娘なんだけど。という事もあまり気にしないで、気さくに話しかけてくれる。前なんか何処かの部隊のおじさんから飴玉貰ったよ。何故か開封済みで既に手に持ってたけどおいしく頂いた。はあはあ…と息が荒かったけど、風邪でも引いたのだろうと思ひ、気を使ってあげたら何故か叫びだして何処かへ行ってしまった…何かいけない事でもしてしまっただけだろうか。

そんなこともあり、海軍での生活は概ね平和と言えるだろう。

…そうそう、どこの部隊に配属で階級がどれ位なのかまだ発表していなかったな。

まあ、部隊に関しては皆さんの予想通り…

「モンキー・D・アイラ中尉です。これからよろしくお願いします。ヒナ中佐」

「よろしく」

白い正義印のコートを装着して挨拶をビシッと決める。何故ヒナ中佐の部隊なのか…ぶっちゃけ女性で部隊長の部隊のつてあまりないのが現状。その中で今、輝いているのがヒナ中佐の部隊であった。

海軍に忠実で、部隊のまとめ方も巧みだ。経験を積ませるにはうってつけなのだろう。

事実、私が不足しているのは現在、集団の中での戦闘であった。：
必要か不要かは別として。

訓練はワンマンしかなく、集団での連携なんて全く考慮されていない。

海軍大将やガープ中将と言った大物から直々の訓練なのだからしょうがないと言えましょうがない。

ゆくゆくは大將みたいにワンマンで動くように配置するとセンゴク元帥が言っていたが、いずれにせよまだまだ経験知不足なのでそれはいずれとなった。：というより、中尉が好き勝手動きまわれるはずがないのだ。

ただし戦闘力だけの観点からいえば、既にガープ中将レベルで火力だけなら大將に並ぶレベルだ。

ガープ中将の読み通り、身体強化する覇気が目覚ましく成長し、物凄い身体能力が実現した。

：ガープ中将より力は負けるが、覇気を使えば海軍本部内でも上位に入ってしまう程だった。

スピードもそれに増して速くなり、速度ではボルサリーノ大將に次いで早い。

：こんな海兵見習いは、後にも先にも自分だけだと辞令直前に大將らとセンゴク元帥は口をそろえて言った。

まあそれでも集団における連携等の経験値は0に等しい。力をセーブするのもまた訓練とボルサリーノ大將も言っていたではないか。緊急事態になるまではセーブしていこう。

早速訓練に混じらせてもらった。中には見た事ある顔の人もいるし、女性隊員も見かける。

基礎訓練を繰り返して、集団の戦闘訓練。…いきなり誰かと組むわけは無く、基礎訓練をしていなさいと指示があり、集団戦闘の訓練が終わるまで基礎を繰り返していた。

「さて、あなたの実力が分からないの。だから知る必要があるわ」
集団訓練が終わったのか、いつの間にか此方に来ていたヒナ中佐の一言…全くもってその通りであった。
しかし、どうやって見せればいいのだろう。首をかしげていると

「私の部隊とあなたで模擬戦をしてもらおう」
「…了解しました」

いきなりですかい。と思っただけど…まあやるしかない。油断を振り払って一定の距離をとって構える。

今回は六式では剃しか使わないようにしようと思う。この条件でどれ位いけるのか見極めたい。

ヒナ大佐の部隊も整列が完了したのか、全員が構えている状態だ。
…数人震えている人がいるけど。

「…はじめ！」

正面からその陣形を食い破るように剃で一番先頭の者に一瞬で近づく。

「へ？」

がら空きな胴体に掌底を一発お見舞いしてやる。ゴフッと胃液を出して吹っ飛んでいく。

飛んで行った人に当たらないように散会して、私を囲んでいき距離

を詰めていく…が四方向からの攻撃に気をつけていれば何の事は無い、対応できる。直感と、訓練で培ってきた勘を頼りに包囲網を食い破っていく。

「せい！」

と一声気合いを入れて地に手を付けて足を高速に回転させて蹴りを周囲に撒き散らす。

まあ所詮130cmの身長なので数名に当たっただけでほとんど避けられてしまうが、回転の余韻で近くの海兵を蹴りつける。防御されるがインパクトに耐えきれずに少しよろめく。

そのインパクトを利用してバク転の要領で態勢を整える。…先ほどの動作ってあんまり意味無くない？

そう思っているのもつかの間、隙間なく襲いかかってくる海兵を相手に奮闘した。

side ヒナ

あの子がヒナの部隊に配属されるのが分かったのは配属の一週間前。まさかうちの部隊とは思わなかったわ。しかも、階級は中尉。…何処に大将と渡り合える中尉が存在するのよ。ヒナ、驚愕。

聞くに集団戦闘の経験が無いとの事。それでも有り余る戦闘力と将来性に少し嫉妬してしまったわ。

きつと、直ぐにヒナを追い越して将官クラスにあつという間に上り詰めるのだろう。ヒナ嫉妬

そして、配属の日、噂の電気ちゃんが来るとのことで隊の男性陣は皆そわそわしている。

…全く、今日の訓練は厳しく行くこうかしら。集合時間の丁度10分前に噂の彼女が現れた。

…大将と渡り合えるというのに、ヒナの胸辺りしか身長が無い。

そんな女の子が正義のコートを身に付けてキビキビ歩く姿を見ると子供が背伸びをしているように感じて、母性を刺激されるわ。本当に噂の電気ちゃんなのかヒナ疑問。

そんな疑問も直ぐに解決したけど。ヒナの部隊と電気ちゃんを当てたらあつという間に部隊が崩れてしまったわ。電気ちゃんの由来である能力も使わずに…仮にも仲間になった彼女を疑ってしまうとは、ヒナ反省。

…これは部隊に組み込むより、遊撃にさせた方がいいかもしれないわ。集団での戦闘は個での実力があまり離れてないのが通常であつて弱点を補い合うものだ。彼女は残念と言っべきなのか、並大抵の相手ならば一瞬にして倒せる戦闘力を有している。故に誰かと組ませるより遊撃というポジションにして臨機応変に対応すべきだと思ふ。うん。ヒナ名案。そうと決まれば彼女に、アイラ中尉に伝えなくてはいけないわ。

丁度模擬戦が終わったのか、ヒナの部隊が誰一人として立ってないけど、ヒナ納得。

そうして彼女に向かって足を進めるのであった。

side アイラ

ヒナ中佐の部隊に配属されて早3か月が経った。

あの訓練から遊撃担当と言い渡されて、ぶっちゃけ集団での戦闘というより、戦闘全体の把握に重点を置いて、観察眼を鍛えた。ぶっちゃけ集団戦闘は私にとってあまり役に立たないのでワンマンプレイでの戦闘力を伸ばした方が私にとっても隊にとっても有益なのだ。

そんな中、聖地マリージョア…ここなんですけどね…で世界会議を開催するとの事で急遽、その警備に配属された。勿論、ヒナ中佐の部隊に混じってである。無論大将や中将等も直々に警備にあたる。

が、正直ここに攻め込む輩なんぞ早々居るものではないので正直あつてないようなもの。

しかし、形でもやらないと本当に意味がなくなるので形だけはきちんとやるのだ。

…万が一という事もあるしな。

と言ってもやる事なんて大したことは無い。部隊ごとにエリアを割り当てられていてそこを警備するだけ。

私は遊撃なので、デンデン虫をもって部隊に割り当てられたエリアをふらふらしているだけだ。

「アイラ中尉、暇そうですね」

「暇です」

「「「我らもです」「」

気が抜けるようなやり取りが出来るほどゆとりがある。…正直これでお金がもらえるとか、詐欺だよね。

「今日の会議って何をするのですか？」

「はっ、確かドラゴンの危険性について…あ」

「いや、気にしないで」

申し訳ありませんと返答してくれるけどぶっちゃけこっちが謝りたい。

そういえば父についての会議だったね。すっかり忘れてたよ…革命家ドラゴン…はあ…

ガープ中将も相当居心地が悪そうだと思う。まあ仕事だから我慢だ。

そうして一日中ふらふらしていると、小さい水色の髪をした女の子がいる。

…あゝ誰だっけ？もう覚えてな…あゝ思い出した。アグレッツシブな王女だ。ビビだっけ。

確か砂漠の国の人だ。ターバンしてないけど。

まあ身分が違うのでこそこそ通り抜けようと思ったら…

「こんにちは」

話しかけてきやがったよ畜生。しかもものっそい笑顔！眩しい！

「こゝ、こんにちは」

「ねえ、あなたはそんな恰好で何をしてるの？」

「警備です（キリ）と答えたいが…まず信じてもらそうに無いなあ…まあいいだめもとだが」

「警備です（キリ）」

「本当？…私より年下そうだけど…何歳なの？私は10歳よ」

華麗にスルーされたけど…あれ？同い年じゃないか

「同じで10歳です」

「うそ！？」

吃驚しすぎです。王女吃驚しすぎです。しかしその顔も可愛らしいじゃないか…これが本当の女の子の顔か。

中身が男だからなあ…そういう顔は出来てないだろう。ま、いいけどね

「そうなんだ…ねえ、私ネフェルタリ・ビビって言うんだけど、名前を覚えてくれない？」

「アイラ…モンキー・D・アイラです」

「よろしくねアイラ！」

そうやって握手をした。…同年代の女の子にこの世界に生を受けてから10年にして初タッチである。

内心感動したのは言うまでもない。ん？待てよ？この子警備対象じゃないのか？

「すみません、お父上はもしかやネフェルタリ・コブラ王では無いで

しょうか？」

「そうだけど…もうそんなに畏まらなくていいの！」

ぶんぶん怒っているが…恐らくビビは自身の立場を理解して…いるのかなあ…徐々に思い出して来たけど、飛んだお転婆王女だったと記憶している。…そこが人を引き付ける魅力なのかもしれないけどね。

「そうですか、ただ敬語は使わせてもらいますよ」

「うゝまあいつか」

納得してくれたらしい。いや、顔は全く納得してません顔ですけど。

そうして私たちは年が近いという事もあって、直ぐに打ち解けた。た。

話した内容は、今の生活の事とか、何が好きだとか嫌いだとか、最近こんな事があったとか…本当にとりとめのない話だった。しかし、いつまでもこんな話が続くわけない。というよりビビの方がそわそわして来ているではないか。そこで私は提案した。

「ねえ、鬼ごっこしません？」

「おにごっこ？」

ルール説明をすると、何故か得意顔になり体力には自信ありですと言っのける。

じゃあ勝負だ！と宣言して私が鬼になる。範囲は…定めていないのでマリージョア全体であった。

とんでもないほど豪華な敷地で美少女と鬼ごっこことは…海兵って最高だぜ！

まあ一応ギリギリで捕まりそうな速度で適度に追い詰めて捕まえた
り、捕まったりしていた。何回かやって私の鬼の番になった。数を
数えていると、キヤーと悲鳴が上がった。見るとビビが階段から落
ちようとしている。その瞬間身体強化の覇気を纏って能力無しでの
全力の剃で一瞬で近づき抱きとめる。

「ふう…大丈夫ですか？」

「…」

「え、ビビ！大丈夫！？」

「え、あ、う、うん！大丈夫だよ！」

と、顔を見ると真っ赤になっているではないか。もしや、遊びすぎ
て熱中症なのか、それとも熱を出してしまっているのか…いずれに
せよどれ位熱があるのか測らないといけない

「顔が赤いですよ」

「え？あ、だ、大丈夫だよ！」

強がっているけど心配だ。子供は風の子と言うが、体力が低い状態
での風邪は厄介だ。こういう場合は早期的な治療が必要になってく
る。それ故に少し失礼と分かっているながら、ビビのおでこに自分
のおでこを当てて熱がどれくらいか比べよう

「ちょっとごめんね」

「えっ…」

びと

眼を見開いているビビ王女がいる。…あまり熱は無いようだ。ほっ
としておでこを離す。

「あ……」

「ごめんね、嫌でしたよね？」

「え、う、ううん！全然嫌じゃ無かったよ！」

そう言ってくれて少しは気が楽になる。やはり、器がでかいなあと思っ。

「……あ！アイラずっと手加減してたでしょ！？」

「……ばれちゃいましたか」

「もう！」

ちよっぴり怒ってたけど何故か笑顔だったのでまあ良しとするか。

「おーい、ビビー！」

「あ、パパ！」

会議が終わったのか、ビビの父、コブラ王が迎えに来たようだ……それにしても、パパか……フレンドリーだな。まああそこの国はそれでいいのかもしれないな。

「全く、何処へ行っていると思ったら……」

「ごめんなさい、パパ」

「ふむ、そこの夢見るお嬢ちゃんと遊んでいたのか」

ふ……やはり、そういう認識なのか……まあ仕方がないけど

「もう！パパ！アイラに謝って！これでも海軍本部中尉なんだよ！」

「これでもって……」

「ははは！ビビは冗談が上手くなったなあ」

地味に落ち込むぜ…この親子め…

「ほんとだよ！アイラ！びしつと決めちゃって！」

と言ってきたので、海軍本部中尉の証明書を懐から取り出し見せる。

…そこにはモンキー・D・アイラと乗っている。

「モンキー…」

「ええ、家の父がご迷惑を掛けて申し訳ないです」

「え？どういうこと？」

ビビが会話についていけなくなっているので、今回の会議の議題にあがっていた人物の娘ですと改めて自己紹介すると

「ええ！アイラのお父さんが…そんな…」

「…軽蔑した？」

そう思われているだろうと予測しているが…何故か聞かずにはいら
れなかった

「…ううん。ビックリしちゃったけど、全然そんなこと思ってない
よ」

「嘘…海軍でも疑惑の視線があるんだ…どうs」だって！」「…」

こっちを向いて満面の笑みで手を握ってくれて

「私を助けてくれたじゃない、それだけじゃダメなの？」

……………本当にこの子は…

「ありがとう」

私も満面の笑みで答えた。コブラ王は此方をみて微笑んでいた。

船まで見送りに行った際

「疑ってしまつてすまなかつた」

と一言謝つて頂いたが逆に此方が謝りたいと伝えたが

「親の罪に子は関係ない」

その一言でバツサリであった。…やはりこの国はこれで良いのだと確信した。

「ねえアイラ、私たち…ずっと友達だよね？」

「勿論！今度は私が遊びに行くね？」

待つてる！と元気よく返事をしてくれた。そうして出航した船を見えなくなるまでずっと手を振っていた。

また、いつか絶対に会いに行くと誓いながら。

「アイラ中尉は何をやっているのかしら」

腕を組んで集合場所に仁王立ちしているヒナ中佐の姿があったとか
なかったとか。

出合い（後書き）

誤字脱字等御座いましたらご指摘を願います。

日常？

ビビと友達になり、既に1年が過ぎた。あれからビビとは会っていないが、文通を行っている。

…この世界はペリカンが正確に手紙を届けてくれるという不思議があつてだな…それはそれとして、手紙の内容はありきたりな事が大半でくだらない事で文通をしていた…それだけで心が温まるもんだ。

この1年で私は昇進し、今は海軍本部大尉である。…そして現在、海賊たちの間では「紫電」と呼ばれてしまっている。由来は、電気を纏って高速で動きまわる際に、電気が尾を引いて見える事からだそう。町でもそれなりに有名になって来てしまっているけども、11歳という事も要因の一つと言えるだろう。

そんな時の休日は至って普通である。

朝は普通に起きて冷蔵庫から現在ある食材で料理を作り朝を過ごす。パジャマから着替えて居住区から商店街がある地区まで散歩気分で歩いていく。たまに同僚を見かけると敬礼してくれるけど、恥ずかしいのが本音である。

私がよく買い物に行く店は書店だ。この世界、ゲームというものが無くて休日過ごすのは本しかない。

…同年代の友達って遠く離れたビビしかいないから本当に休日は暇になるのだ。

まあお金は有り余っているので、買い食いしながら本を買って何処

か日当たりがいいところに腰を落ち着けて読書に勤しむが休日の過ごし方だ。

しかし、今日はほんの少し違っていた。

「あら、アイラ大尉じゃない」

ふと顔を上げるとカジュアルな服を身にまとったヒナ中佐であった。直ぐに直立不動になりおはようございますと敬礼をするが、

「今日は休日なのよ？気楽に行きましょう」

と、休日は無礼講で良いらしい。それにしても偶然であるもんだ、今までこんな休日は無かったしな。

ヒナ中佐もそう思っていたらしくせつかくだから何処かにショッピングに行こうという事になった。

しかし、改めて見るとヒナ中佐は相当な美人だ、出ているところは出ていて、まさにボン、キュッ、ボンなのだ。服のセンスもあり、より一層彼女を引き立てている。メイクもナチュラルメイクで自然のままでの美貌だ。…道中の男どもが視線で追いかけるのも無理は無い。むしろ私ならガン見する自信がある。

まず最初に商店街の服屋に突撃した。理由は私の服装があまりにもシンプルだからだ。

白いワンピースで白いサンダルだからね。それに麦わら帽子だからね。何処の田舎の少女だよと思った。

「いらっしゃいませ」

所狭しと服が並んでいる。…無論女性物の服おんりー。匂いも何か女性独特のにおいがあり、胸がドキドキする。多分、顔が少し赤くなっていると思う。

「それじゃあ、早速選んで試着してみましよう」

そう、それから既に2時間は経っている…女の買物物は長い。世の男性陣が確かに疲れてしまふのは分かる。

しかし、着せ替え人形みたいにされている私の方が疲れていると断言できる。

まずは、服選びから始まった。私はシンプルなものがいいのでこういうのはどうですか？と自身に重ねて見せるが、ヒナ中佐はシンプルすぎるのが納得いつてないらしい。

…戦闘するときはシンプルなスーツな癖に。と、思ったがそこはやはり女性。仕事と私生活はバツサリわけているらしい。流石出来る女性である。

ヒナ中佐といつの間にか混じっている店員に服をコーディネートされた。そこから試着会が始まったのだ。

次から次へと来る服を試着させられて披露する。時間が経つにつれて大胆な物や前衛的な物まで混じって来ているが、深く気にすると負けだと思った。兎に角満足させれば早く解放されるのだ…その一心で試着を続けた。

そう、2時間もである。店内の私のサイズに合う服は全て着たのではないかというほどだ。

いつの間にかギャラリーも出来ていた。おお〜とかかわいいい〜とか言わないでくれ。ヒナ中佐ものりのりでコーディネートしないでくれ。

「それじゃあ、似合ってるこれとこれと…」

試着会が終わり、ギャラリも元の姿に戻って行った頃、カウンタ
ーには山のように服が積まれている。

その中で記憶を掘り起こしてどれが似合っていたのかとジャンルが
被らないように決めていく。

店員も途中から最後までいた方で、ヒナ中佐とのりのりで意見を交
換し合っている。ぶっちゃけ私はおいてけぼりだ。つか、戦闘訓練
より疲れた…精神的に。

ぼくっとしていると、どうやら服を選び終えたらしい。

その金額が眼が飛び出るほどの金額であったがまあ今までの貯金で
普通に賄える。

では、何故眼が飛び出るほどのなのか…ぶっちゃけ前世で服を買った
最高金額の桁がひとつ繰り上がっている。

しかし、そんなにもってきていないので…と辞意しようと思ったけ
ど、ヒナ中佐がポケットマネーで出してくれた。この後貯金から切
り崩して返してくれればいいらしい。…ありがとございますと返
事はしておいた。

しかし、服はそんなに持てないので、今日着ていく服をチョイスし
て、着替えて、残りを配達で自宅に届けてくれるらしい。サービス
ですという店員の一言と共に放った笑顔がすごく眩しい。本当にあ
りがとだよ…

さて着替えた服装なのだが…何と言うか、少しゴスロリ気味。

黒いローファーに縞々のソックス。先ほどのワンピースより飾り気
味があり、スカートにはレースがついていて黒色が基調となってい

る。何と言つか、西洋風ドレスを簡易化させた見たい。当然白い大きなリボンでツインテールだ。

胸には可愛らしいバラ色のリボンがアクセントで乗っていて胸元が結構広い。

屈んでもギリギリメイクビが見えるかどうかってところか…おい。

何冷静に評価してるんだよ。

街中をこれで歩けてか？おい、何私やりきったみたいな顔してるんだよこの店員とヒナ中佐は。

「うん。素材が良いと服も映えるわね、ヒナ感激」

「ええ、ここまで着こなすとは思わなかったです」

感激スナナ。

「恥ずかしいのでもう少し抑えた服装…」

「「だめ」「」

さいですか…こんな恰好、大将どもに見られたらかなりの期間で笑い草にされること間違いなしだ。

まあそこまで過激じゃないので…妥協するしかないのか。帰ったら引きこもろうと決意して店を出るのだった。

「ありがとうございました〜！」

店員は終始元気がよかった。

街を歩いてると、何か視線を感じる。海軍内での視線というか…ちらちら見られている。

…隣に歩いているヒナ中佐でも見ているのだろうと自己完結して視

線を振り払った。

お店で私の大好きなカフェオレを買って飲みながら街中をうろついていると、

「ねえねえおねえさん」

不意にヒナ中佐に声が掛けられた。見ると何か軽そうな男どもだ。つかヒナ中佐を知らないのかこ奴ら。

…まあ広いし、居住区でずっと暮らしていれば海軍内部の事なんてほとんど知らない人間が多いのかもしれないな。

すたすたとそれを無視して歩くヒナ中佐。その態度が気に入らなかつたのか、強引に肩に手を置いて引き留めようとするが、簡単に振り払われてしまった。

「おい、あんま調子こくなよ」

「おいおい…小さい子の前で恥を晒したくないだろう？」

「へへ、その小さい子もすっげえかわいいじゃねえか」

…ペロ…！！これはナンパな味！

とまあ、結構強引なナンパなんだ〜へ〜これがね〜と思っていると

「相手にしている暇は無いの、ヒナ不快」

その一言で奴さんが切れたのか、何かそろそろ同じような男が周りを囲んでいく。

おいおい…過激だなあ…と、思いながらカフェオレを飲む。うむ、どの世界でも最高の飲み物だ。

いや、マイベストフレンドだ。ただのカフェオレとは言わせないぞ。

「おい、痛い目見たくないならおとなしくしろ」

「ああ、直ぐに気持ち良くなるからなあ！」

「……ははははは！」

にやにや此方を囲んでいるが…まあヒナ中佐が何とかしてくれらるろう。

過ぎゆく町の人は気の毒そうに見ている人もいれば、男たちに同情の視線を流す人もいる。

…後者は私たちが何者か知っている人たちだ。

「ちよつと、ヒナさん。えらいおおごとになりましたけど」

「たまにいるから厄介なの」

たまにいるんだ…それにしても前世であればこの事態に陥ったら絶対にビビってるけど…

今はすごく軽い気分だ。実力が違いすぎるので万が一すらない。ナイフとか手に持ってるけど…

そう思うと、一人私に襲って来たではないか…眼が血走っていて何

か怖い。

「俺はこいつをやるぜえ!!!」

と気合いを入れてパンチを放ってきたけど、遅いのなんの。

ひょい

軽く避けてパンチが空を裂く。そのすきに脛にローキック。

「いてええええ!」

その場で蹲ったので顔面めがけてハイキック。どがという効果音と共に男どものところまで転がっていく。

「あ…正当防衛です」

「そうね、正当防衛ね、ヒナ承知」

涼しい顔で言ったからか、相手の堪忍袋の緒が切れた

「ぜってえ鳴いても喚いてもゆるさねえ」

「ボロボロになるまで使い続けてやるよ!」

その一言で、わーっと私たちに襲いかかる。正当防衛ですよね？

「そうよ、遠慮はいらないわ」

さいですか、まあカフェオレを溢さないようにしないと、そう思
つて男たちをいなが、

流石にそれは無理だった。男の突き出したナイフを悠々と避けた時

に油断しすぎてカフェオレが入っているカップに当たってしまい、
中身が零れてしまった。

その瞬間世界が色を無くした。カフェオレが地に零れる瞬間がやけ
にゆっくりと感じた。

…そう、走馬灯いうものに近いのだろう。手に取るよう分かってし
まう。無残な姿になっていくカフェオレが。零れた個所を見ると、
カップの下の方に切り傷がある。

そこからカフェオレが零れてしまったのだ。中身はもう…殆ど無い。
カップをそつと地面に置き向かってきた男に裏拳をかまして吹っ飛
ばす。

「君らさあ…自分が好きな物を壊された瞬間の気持ちって…分かる
？」

覇気を解放し威圧感を倍増させる。瞬間何かに飲み込まれるように
男たちの動きが止まる。

「私は分かる…何故なら、今、この瞬間に、大好きな物が奪われて
しまったから」

更に覇気を解放していき空気を縛る如く周囲を重くさせていく。

「ちょ、ちょっと…アイラ、カフェオレならまた買ってあげるから
…」

「ヒナ中佐…」

「な、何」

「…命令を…この蛆虫共を粛正する命令を…」

カフェオレを失い、世界の色を私から奪ったこの屑共を一刻も早く
粛正したい。

「だ、だめよ…彼らは守るべき市民よ」

ほう…この蛆虫共が守るべき市民だとは…

「ヒナ中佐…ここで彼らを血祭りに上げた方が、この町の治安も良
くなると思うんだ」

にっこりと笑う。何故か笑みがこぼれてくるんだ。

「あ、あなた達！早く逃げなさい！」

「へ、へへ…何が起きてるか分からないけどチャンスだな」

やっぱりこいつらは粛正されるべきなのだ。貴重（主観）なカフェ
オレを無駄にした罪は…重い！

一人出張ってきたやつを剃で接近し空中に蹴りあげようとした時に

「だめよ…！」

その叫びで蹴りあげる直前でストップさせた。

「へ？」

一瞬過ぎて呆けている、男が尻もちをつき、此方を見上げてくる。

「それでも彼らは一般市民なの…それを行うと、あなたもこの男た
ちと何も変わらないわ」

その言葉でようやく世界に色が戻った。そうだ…私の力はこんな事のために存在しているのではないんだ。

「ヒナ中佐…ありがとうございます」

そう言って彼ら全員を一瞬で気絶させた。勿論首筋のチョップで。

彼らを警備隊の方々に引き渡し、カフェオレをヒナ中佐に奢って頂き今は相当気分が良い。

「ほんと、現金な子ね」

とはヒナ中佐談だ。…い、良いじゃないか！あれはたまたまストレスが爆発しただけでな…

「はいはい」

もう時間も夕方だ。そろそろ帰る時間になったのでヒナ中佐に挨拶をして私は帰宅した。

家に帰ったら、ガープ中將がいて私の恰好をみて爆笑していたので思いつき顔面にパンチを入れた。

今日の事はそれでチャラにしてやろうと思った。

日常？（後書き）

誤字脱字等御座いましたらご指摘をお願いします。

体験

「ガープ中将」

「おお、どうしたんじゃアイラよ」

「なんで私がガープ中将の部隊にいるのですか？」

「そりゃ、ワシがヒナのところから借りてきたんじゃ、二つ返事でオツケーじゃったわい」

そりゃ中将だしな…そう思ったが決して口には出さない。そう、ここは今、新世界真つただ中である。

海軍の仕事にはまだ発見されていない大陸や、その大陸のログをとることも仕事である。

故にマリージョアのエターナルポーズを片手にふらふらするのも立派な仕事なのだ。

…まあ発見されてない大陸は新世界方面が大多数を占めている。

もちろん、奥に進めば進むほど危険を伴う。まずは海王類が多数存在している中での航海だ。

ぶっっちゃけ襲ってくる事もあるけど、全く問題ない。

「中将」

「じいちゃんと呼んでくれんか」

「あと5分ほどで海王類の群れに衝突します」

「ナチュラルにスルーされるとは思ってた。…おほん！アイ
ラ」

「了解」

船首の上って、狙いを定める。コインを弾いて

「超電磁砲」(レールガン)

音を置き去りにする電子レーザーとそれに伴う物理的な衝撃波を撒き散らしながら海王類の群れに直撃。

大きな海柱を立てて、衝撃波の余波がこの船まで襲うが、そこは船の熟練者、何事もなかったかの如く舵をコントロールして態勢をあっという間に整える。

前方にぶかぶかとかい生き物が多数浮いているが全て海王類なのだ。

「…相変わらずの威力じゃの」

相変わらずの威力です。底なしに強くなってきている最近。もう大将と渡り合えております。

ガープ中将の戦闘力を越しました。というよりガープ中将を下したのがつい先月。

「今日の訓練相手は…ガープ中将ですか」
「ぶわっはっは！たまには娘がどれくらい強くなったか見なくては
の」

そう言って始まった模擬戦。「ブルースターター」で様子を見て「
ブルージェット」で
火力を10倍にし、全力の剃で懐に入り込みあのチンピラに決めら
れなかったエリアルコンボを決める。

足を鉄塊で強化し、思いつき蹴りあげる。無論ガードされたが、
私の覇気もプラスされているので体が浮き上がる。さらに逆の足で
もう一度蹴りあげ空中へ、月歩を利用しながら空中でコンボを決め
る。

一通り決まったと思ったら

「紫電・嵐脚」

電気を纏った鎌居達兼蹴撃を体に地面に向かうように叩きこむ。覇
気でガードしているが、電気の前では無意味…なのかは分からない
が、少なくとも痺れて体が動けないであろう。

地面に叩きつけられた所に更に体を縦に回転させて踵落としを決め
る。地面が蜘蛛の巣状に抉れるほどの威力を叩きつけてKO。

骨とか折れていたけど、訓練という事で許してくれた。ここまでな
ると思わなかったから平謝りだ。
強くなりすぎじゃとは怒られたけど。まさにチートボディ。何故か
底なしに強くなる。

体のラインは女の子なのに不思議！

その日から丁度3か月目で完治したこともあり、念のため私を連れ
ての航海であった。

まあこの航海で何をしなくても少佐に昇進するというのが既に通達
されてある。…海軍は実力主義なのだよ。

というより、ガープ中將が病院送りされた原因が私との事もあり、
海軍にとってはさっさと海に放って活躍させたいのであろう。私も、
自由に海を航海したいぜ。

まあ、そのためには…

「中將、前方に海賊旗を携えた船があります」

「ほう…新世界の海賊か…全隊、戦闘配備に付け」

「いえ、私のあれで…」

「アイラよ、情報というものは時に、お金よりも大事なのじゃ」

…なるほど、新世界の海賊を捕まえて情報を頂くってわけか。

「了解」

海賊の方も此方に気付いたのか、砲撃を放ってくるが、ガープ中將
の前では無意味。

すべて拳骨で撃ち返している。が、敵もすごい使い手が船に乗って
いるのか、砲弾が真っ二つになってる。撃ち返したものを全て斬っ
ているよ…

「奴さんやりますね」

「久々に腕が鳴るわい」

そして…衝突。数多の海賊が流れ込んでくる。流石新世界だけあつ

てかなりレベルが高い…がまだ遅い。

剃と紙絵で交わしたり、紫電・嵐脚で敵をなぎ払っていると、直感がアラームを検知。

直ぐに剃で回避すると、私がいた所に見えない斬撃が入ったかのごとく、床が斬られている。

「ほう、避けるか」

声が出たほうを見ると、和服を着て刀を携えている…侍がいる。

「新世界の方ですか？」

「くつく…まあ君らにとっては新世界なのだろうが、私にとっては故郷だよ」

それはそうか、新世界の意味はまだ発見されていない大陸のことを指すからな。

「しかし、海軍にこのような小さい子がいると思ったら、なかなかどうして…やるもんだ」

にやっと此方をみて刀を鞘に納める。

「…抜刀術ですか」

「くつく…中々博識なお嬢ちゃんだ」

自身の戦闘術がばれたのにこの余裕、相当自分に自信を持っているに違いない。

「砲弾を斬ったのもあなたですか」

「いかにも」

そうですか、と納得し剃をする。後ろに回り込んで蹴りを入れるが、ひよいつと避けられる。

そして、相手の絶対領域に入っているので、当然の如く抜刀術での斬撃が来る。

それを紙絵で避け、すかさず

「電気玉」（サンダーボール）

音速以上の速さで飛ぶ攻撃を反応して刀でぶった切られてしまった。

「能力者か」

速度だけ見ると、ガープ中将並みか…これほどの者が…いや新世界だからこそか。

「【ブルージェット】」

バチつと身に纏っている電気が鳴いた瞬間に青色に変わる。相手はほうと行って直ぐに構えをとる。

「雷剣」（ライティングブレード）

勿論私は剣を扱えないので、周りに青い電気の剣を展開する。数は8つ。

それを電気鋸みたいに超高速で自身の周りを回転させて防御も攻撃も兼ね備える素晴らしい技だ。

…某デビルが参考だ。

更に8つ展開して相手に向かって神速をもって叩きつける。

すかさず反応して斬りに行くが、先ほどの「電気玉」（サンダーボール）とはわけが違う。動きがファンネルの如く自身で操って攻撃が出来るのだ。数個が斬られてもまだまだ出せる。

キリがないと悟ったのか、俊足をもって私に近づいてくるが…それは悪手だ。

何故なら前から後ろからも「雷剣」（ライティングブレード）が襲いかかってくる。

沈め！と思つて全ての剣を相手に突き立てようとしたのだが…

「竜巻！」

高速に回転させて何か知らんが剣がこっそり持つてかれた。…こ奴…全力を出してしまつても構わないだろうか…

「くつく…面白い」

私は面白くねエよ。さて、どうしたもんかな…と思つていると、斬撃を容赦なく飛ばしてくる。

紙絵で避けるが、数か所かすってしまったらしく、深くは無いが浅くは無い傷を負つてしまう。

くそいてえけど…今はどう切り抜けるかだ。つか、中将クラスがころつじて反応する速度に普通に着いてきているという事が問題だ。

「煩惱砲！！」（ポンド砲）

剃で避けるが、後ろにあつた船室が跡形もなく轟音を立ててぶつ飛ぶ。すげえ威力。

「本当に面白い娘だ…名は何と言う」
「…アイラ、モンキー・D・アイラ」

そうか、ということと抜刀術の構えに戻る。

「来い…次で決める」

そういうと、眼を閉じて自然体になった。その構えに一部の間も見当たらない。

しかし、私は興奮していた。まだまだ強い人がいる。まだ、強くなれる…と。

「千鳥」

右手に青い雷が集中してバチバチと鳴いたかと思うと、チ…チチ…と凝縮された電気が鳥のように静かに鳴く。これぞ千鳥の本領。その突きは名刀の如くなキレ味。

「俺とお主、どちらが強いか…勝負！」

その瞬間二人同時に駆け出して、1秒の10分の1の世界の時間の中で交差した。

「ふ…小娘に負けるとはな」

その一言を言うと相手から大量の血が噴き出して…その身を地に沈めた。

「ぐっ！」

私も当然無傷では無く、腕に深い切り傷を負ってしまったが死にはしないというレベルだ。

「っは…疲れた」

そうして新世界の海賊との戦闘が終了した。

あの後、すぐさま海軍本部へと帰還となり、私も船室で治療を受けた。幸い素晴らしく綺麗に切られていたため、怪我の跡が残らないらしい。…相当な腕前だったんだなあ。つか、漫画でも載っていた技を使っていたような気がしないでもない。…まあいつか。

結局、生き残った海賊から情報を丁重に頂いて連行した。無論、あの侍も連行対象である。

ただ、瀕死の状態なので死なない程度に治療を施した。

本部について海賊を引き渡し、ようやく長い任務に終わりを告げたのであった。

ちなみに、ガープ中將は私が戦っている所を観戦していただけであった。

本人いわく、いつでも助けだせるよう準備しておいたのだ。闘いの邪魔をしないようにの。

との事。まあやれるとの判断を下したのだろう。まあいつかと軽く

流すのであった。

体験（後書き）

誤字脱字等御座いましたらご指摘お願いします。

アラバスタへ（前書き）

ずっと絵を描いておりました。

アラバスタへ

あれから半年以上が経過し、怪我也完治した。そして、ビビと別れてから既に2年経っている。

が、とうとうビビと再開できる目処が立ったのである。その事を手紙で伝えると、すごく喜ばれた、おいしい物作って待っているそうだ。その事に感謝の意を記して、さりげなく好物も記して手紙の返事を送った。…その時から丁度1か月。

「アイラ〜!!」

「ビビ!」

再開した瞬間に抱きしめあう私たち。…若干、胸の感触が布越しに伝わって来て最高だぜ!

そうして、お互い顔と顔の距離が5cm位で見つめあって

「会いたかった…」

「私もだよ」

と、恋人みたいなやり取りをする。…相手が美少女だと、感動がひと押しだ…

「アイラ君。よくぞいらした…そして、ようこそ、アラバスタへ!」

コブラ王とその隣の前衛的な髪型の人が微笑んで此方をみて歓迎し

てくれている。今日からひと月、このアラバスタに滞在する。

あの海賊を捕縛してから、少佐へ昇進し、この半年以上の期間で奮闘しトータルバウンディ億の海賊団を捕縛した事でとうとう中佐に昇進し独り立ちになった。部隊からはお祝いの言葉等を頂いて最後に模擬戦でほこぼこにしてから去って行った…といっても、普通に海軍本部内で会うんだけどね。そうそう、ヒナ中佐は大佐に昇進していた。

私が知らないうちに、ガープ中將が独り立ち記念で私専用の船を造ってくれていた。

まあ設計から何まであの水の都で行ったそうだ。電気を動力にして動く船で最大10人まで乗船可能。

船は一見木造だが、中身はハイスペック。しかも、巨大充電器があるのでそこにある程度電気を流すと直ぐに航海可能になり、ずっと電気を流す必要もない。

そんなハイスペックな船をいつの間にか私の全財産の7割が投入されておき、後はガープ中將のポケットマネーだそうだ。…あれ？これプレゼント？…まあいつか。食費と服と本にしかお金使わないしな。

そうして、その船とアラバスタのエターナルポーズを借りて急行したのだ。

「へ〜海軍本部中佐になったの」

「うん。これでちよくちよくビビの所にいけるようになったよ」

食事前の準備時間にビビの部屋に行ってゴロゴロする。

すごく女の子の部屋って感じがして、匂いも何かすごくいいにおい。…比べて私の部屋は潮の香りがする位だお。…これでいいんだよ…これで。

「本当？嬉しいなあ」

笑顔で言ってくれると結構嬉しい。…まあたまに立ち寄るレベルだけど、全くいけないというわけでは無い。なので、これでも相当な進歩なのである。

「へえ〜そんな事があったんだ、もしかしてそのコーザ君に惚れているとか？」

「あははは、コーザとはそんなんじゃないよ〜ただのお友達だよ」

コーザ君。まだ見ぬコーザ君。君の今後の武運を私は密かに祈っているよ。

とまあ、女の子二人で、それに思春期ともなると、こういう恋愛話に花が咲くのは当然の帰結である。

それにしても、中々アクティブな…というよりアクティブすぎるだろう…この王女は。

そうそう、何で敬語で話していないかというところ、手紙で敬語NGを食らったのだ。おいおい、一国の王女が…とも思ったが、まあ私も友達相手に何してるんだらうという気持ちが出てたので、手紙内でも敬語は無し。

一気に距離が近づいた感じがした。美少女は世界の宝だねえ。

「ビビ様、アイラ様、お食事の準備が出来ました」
「はい」

前衛的な髪型の人…イガラムさんの声がして食事をする部屋に行き
食事に取り掛かると思ったが…

席に座るとナイフとフォーク…おんりー。

「ねえビビ」

「なあに」

「テーブルマナー…知らないんですけど」

「いいのいいの気にしないで」

あはははと笑いながらビビも私の隣の席に座っていく。食べ物に感
謝を捧げながら食事を開始する。

入口には兵隊さんや、召使いさんがズラリと並んでおり食いつらい
なあ…と思っていたが、あまりにも出された食事がおいしすぎて、
それも全く気にならなくなった。

王宮の食事はもっと堅苦しいかと思っていたが、コブラ王がフレン
ドリーな事もあり、そこまで固くは無かった。というより、家族の
会話とかもあつたり、私も会話に混ぜてもらつたりとなんだかんだ
で楽しく食事が出来たのは僥倖といったところか。

さて、食事の次はお風呂である。既に一緒に入る約束を取り付けて
おり、一緒に脱衣所で服を脱ぐ。

じ

「もう、どうしたのよ、アイラ」

「こやつ……本当に12歳なのか……胸が既に膨らみ始めている……だと……！」

しかし、逆に納得だ。うつすら記憶に残っているビビの原作でのおっぱいのでかさを考えると

当然の帰結である。そう思えてしまうので不思議なもんだ。

「いやあ……将来が楽しみだなあ、と思って」

「もう！アイラったら、急に親父臭くなるよね」

けらけらと笑いながら私に痛恨の一撃を見舞うとは……流石だ。気を取り直して、お風呂場に入ってみると……

「なんじゃこりゃ」

でかい……いや、広い……広すぎる。何だこれは、家の風呂が物凄くちんげに見える。

ガープ中將も入れるような風呂の大きさだが……こいつぁ……比較しない方が良さな。あ、マーライオンだ。

「ふふ、ビックリしたでしょ」

ビックリしたよ。本当に、最高の広さだけ。だが、その前に……体を洗わないといけないよね。

「ビビ、洗いつこしよう」

下心を自慢のポーカーフェイスで隠して提案をする。さあ……乗るか、

乗らないか！！

「わかったわ」

そう言つて、風呂用の椅子と石鹸やシャンプーをもつてくる。お互い全裸で向き合つて

「…何か、恥ずかしいね」

「う、うん」

うつむいているが、顔が真っ赤である。無論私も顔が赤いはずだ。まあ提案したのが私なので、まずはビビの髪をシャワーで濡らしてシャンプーで洗髪する。

眼を閉じて此方に身を任せて気持ちよさそうにする姿を見ると邪な気持ちでは無く何とも微笑ましい気分になる。…まあ将来ナミと洗いつこするはずだがな。こういうおいしい場面はやたら鮮明に覚えているのだよ。

洗髪し終わつたら、今度は洗髪される側になつた。

ビビがたどたどしくも一生懸命洗ってくれるのでこれ以上の褒美は無い。しかも全裸である。

そうしてお互いに髪の洗いつこが終わつた所で今度は体だ。

流石私と褒めたい程のポーカーフェイスで

「じゃあ、今度は体ね」

「う、うん」

背中向いて〜と言つて背中を向けさせてタオルにボディソープを付ける。

タオルで丁寧に泡立たせてから背中を前世から培ってきた絶妙な力加減で洗っていく。
洗っている最中にビビが

「ん……ん……」

と、声を抑えるので正直、興奮した。背中を丁寧に洗い終わってお湯で一気に泡を流す。

そして……

「じゃあ、今度は前ね」

一瞬体がビク！となったけど、徐に此方に振り返って

「優しくお願い……」

と、顔を上気させて言うもんだから、危うく理性の枷が外れる所であつた。

そうして正面を向きあつて最初は首から優しく洗っていく。徐々に下に行く……

「あう……」

胸の辺りを満遍なく丁寧にねっとり優しく洗い、腕、お腹と洗う。気持ち良いのか恥ずかしいのか、女性経験が無い私にとって、

「あ……んう……」

こついうのは少し刺激が強いのだ。それが美少女となると…く！治まれ！私の性欲！！
此方もドキドキしながら下腹部をスルーして、まずは足先から。くすぐりたいのか
じゅっかん笑い声が零れているが徐々に下腹部へ近づいてくると、また先ほどの刺激が強い声を出す。

…流石にここは自分で洗うのがベストだろうと思ってやめようとしたら

「え…」

と、何だか絶望を感じたような顔をして此方を見るではないか。…え？いや、こつちが…え、だよ。

「やめちゃうの？」

眼をつるつるさせて此方を見てくる…ええい！ままよ！

「さ、最後までするね」

「うん！」

元気いいな、おい。そうして、下腹部も丁寧に洗いました。ええ。描写は無しです。

私も普通に満遍なく洗っていただきました。初心な精神を忘れずに可愛く育ってください。ビビよ。おじさん期待しちゃうぞ。

そうして、ようやくお風呂に入浴タイムだ。私はすぐさま転ばない

ように駆け出して

「とうっ！」

ダイビングをする。この大きさの風呂を目の当たりにしてダイビングをしない人間なんざいないね。

そう思っている、此方に微笑ましい視線を向けながらちゃぷっと静かに入ってくるビビ。

「何で？」

「え？」

「何で飛ばないの？」

「あ、あははは…」

若干引き気味だったが後悔は無い。ビバ！大浴場！これでお酒でもあれば最高なんだがなあ…

「ふう…いい湯だね」

「ありがとう」

一緒に並んでゆっくりと体を休める。そんな中。

「ねえ」

「どっしたの？ビビ」

軽く此方を見つめている。本当にどっしたんだ？

「なんでもない」

「…何でも私に話していいんだよ？」

「ふふ、ありがとう」

そうして、また体を湯船に任せる。ビビの顔には若干の曇りがあった事を私は逃さなかった。

アラバスタへ（後書き）

誤字脱字等ございましたらご指摘をお願いします。

実力

湯船につかった後に、ビビとは別の部屋で寝るという予定だったのだが…

「一緒に寝ましょ？」

こう提案されたので二つ返事でOKと返した。天からの恵みというものはこのいう事を言うのだと初めて知った。二人でパジャマに着替えて…無論、同室である…二人で夜遅くまで語り合っていたの間にか寝てしまっていた。

朝になり…といっても習慣というものは恐ろしいもので、早朝に起きて、ビビがまだ寝ている事を確認。

そっと、起こさないようにベッドから出て、既に用意されているアラバスタでの衣服を着る。

何と言うか…アラビアンです。しかし、これはこれで趣があり、この国ならではのファッションなのである。

色合いも、すごく絶妙で、腰には透けるレースが腿位まである。サンドルも、動きやすいように工夫がされており、随所で匠の技を感じられる。砂漠部まで行かなければ、この恰好で外を歩ける程の日光なため、ローブは持つていかずに出かけようと考え、動きやすい服にまた着替え、外に出る。

…何の事は無い、ただの朝訓練なのだ。どうも体を動かさないと一日が始まらない。

ビビが住んでいるこの宮殿：アルバーナ宮殿は非常に立地がいい。アルバーナ市街地を見渡せて上りゆく朝日と相まって非常に神秘的に見える。さらに宮殿内の庭も広いし、訓練場も勿論ある。その訓練場を借りようと思って、昨日ちらつと見た記憶を頼りに進んでいくと、何やら音がする。

既に、誰かが使っているのかあと思って、ひょっこり顔を出したら「は！せい！」

と、剣を振るっている男の姿：チャカさんがみえた。

「おや、そこにおられるのは、アイラ殿では御座いませんか」

と、声を掛けられた。しかし…

「あゝすみませんお邪魔してしまっただようで、あと、もう少し碎けた感じで大丈夫ですので」

「はは、全然邪魔ではないですよ」

先ほどよりフレンドリーになったのでまあ良いかな

「それより、アイラ殿は朝早くにこのような所に赴くとは…」

「あゝ、まあ私も腕っ節が仕事なんでね、朝一番は自主訓練に割り当ててるんだ」

そうでございますか、と一言返事をし、ピコーンと、擬音がつきそつな程、名案浮かびましたな顔で

「では、一手お相手願えないでしょうか？」

そういうことで、私とチャカさんが対峙しているわけだが…

「得物は…」

「あ、本番の得物で構いませんよ」

「ほう…これは楽しみだな」

まあ鉄塊出来るし、大丈夫だろう。しかし、奴さんやる気満々である。

「では、行きます」

「お相手仕る」

その瞬間に、剃を掛けて瞬時に近づく、眼を見開いて驚いているが腕を鉄塊で強化して掌底で攻撃する。

「ぐー!？」

ギン!と金属同士がぶつかる音が聞こえて、流星の威力にたたらを踏んでいる。

すかさず足払いを掛けようとするが、絶妙なタイミングで獣化し、難を逃れている。

「能力者ですか」

何かあれだな蝙蝠マンに何処となく似ている気がしないでもない。

「まさか、これほどとは…」

そう静かに言っただけで構えてくる。完全に油断が無くなり、此方の隙を窺っている。

「私も能力者なんですよ」

バチツと体に電気を弾けさせ

「【ブルースターター】」

そこから一気に電気を纏わせる。バチバチと電気が体に馴染んだ事を確認してから

「さあここからが本番ですよ」

そう宣言して再びぶつかり合う。相手はゾオン系能力者で相当な俊足を誇っている。

しかし、私は更にその上に行く。剃を掛けながらチャカさんに攻撃を加えていく。

「ぐう！」

まさかここまでとは思ってもいなかったであろう。しかし、ここまでの差がある。

その差が私たちの表情に出ている、という事だ。

「鳴牙!!」

「鉄塊」

斬り付けられるが、金属音がするだけで私の体にはダメージ無し。

…無論服も大丈夫です。

「海軍の方は全員そんな事が出来るのかい？」

「ごく一握りの人間だけですよ」

「それは、安心したよ！」

最後の一言を言い放った瞬間に距離を詰めてくるがその上を行く速度で瞬時に懐に潜り込み

「電気ショック」(サンダーボルト)

バチバチ!とチャカさんの体に電気が走って体を硬直させる。その隙に足払いを掛けて地に伏せさせて

「私の勝ちです」

「…負けたよ」

そう言って、朝の訓練に終わりを告げたのである。

「いやあ…失礼ながら、最初は何かのコネで昇進したのかと思って

おりましたが、朝の件で実力で上り詰めたのだと確信しましたよ」

訓練がおわり、アラバスタ風の衣服に着替えて、ビビを起こして朝食の場へそこには既にコブラ王や、親衛隊の方々の姿も見受けられる。そんな中チャカさんがいきなりこんな事を言い出したのだ。

「ほう、チャカがそんなご…おっほん！マ〜マ〜マ〜 ……そのような事を言い出すとは、何かあったのかね」

その事に疑問を入れるイガラムさん、それにビビが此方を窺っている。私はご飯を食べて気付かない振りをするのだが…

「ええ、朝に一手お相手して頂いたのだが…」

「ほう、どれ位であった」

「…私の完敗でした」

「「な！」」

イガラムさんともう一人の…ペルさんが驚いたように此方を見ている、ビビも相当驚いている。

「「じらじら、ここは食事処であるぞ」」

そのコブラ王の一言で二人は申し訳ありませんと一言謝り、食事を再開する。

「まあそういう事は朝食が終わってからでも遅くは無い」

その一言で、私の午前中の予定が決まってしまった。…そう、どれくらいの強さを有しているのか。

それを確かめたいらしい。ビビも興味あるのか

「そういえば、私もアイラが戦う姿って見たことないのよね」

こうして、王宮の親衛隊との模擬戦が始まってしまっているのである。

朝と同じルートをビビと一緒に歩き、訓練場に顔を出す。既にイガラムさんとペルさんとチャカさんが待機している。コブラ王も行きたいと言っていたが、政務があるため丁重にお引き取り願いました。

「ここは3人掛かりで行きます」

訓練場に入るや否や、そんな事を言ってくる。…まあ大丈夫だろう…多分。

「そんな！アイラが不利に決まってるじゃない！」

それが普通の人の感想だろう。イガラムさんとペルさんも何処か納得いってないご様子であるが、

「ビビ様、あなたのご友人と戦うのであれば、我ら3人でも負けてしまふ恐れがあります」

「え？」

その事が信じられないのか、何度か此方を瞬きして見つめてきている。

これは格好悪い所は見せられないなあ…と、思いながら、3人と対峙する位置へ移動する。

「朝の用にはいきませんぞ」

「チャカがこれほど警戒するとは」

「我らも、油断はできませんね」

そう言つて、チャカさんは既に獣化をして、得物を構えている。

イガラムさんはラツパを、ペルさんは鳥になつて戦闘準備が完了している。

「【ブルースターター】」

バチバチと、電気を纏わせて、体中に電気を浸透させる。

「！…！…能力者ですか」

「なるほどのう」

いつでも剃が出来るように構えて宣戦布告をする。

「いつでもどどどぞ」

緊張感が高まる中、アラバスタの戦士が宣言する

「はじめ！…！」

瞬間、剃を掛けてまずはイガラムさんの後ろに回る、

「！？」

「早い！…！」

貰ったと思ったら、予測を付けていたのか、チャカさんが剣の腹で私の蹴りからイガラムさんをガードしていた。

「お二人とも！油断は負けを意味しますぞ！！」

そこで、剣を強引に横薙ぎで斬りつけてくるがステップして避ける。イガラムさんがラッパ状のショットガンを此方に放ってくるが、全てかわす。

鳥になり、ガトリングガンで此方を責め立てているperlさんが、相当厄介なので
月歩を利用して一気に空へ駆け上がる。

「馬鹿な！？」

perlさんが驚いている。：何か驚かれっぱなしだなあ
そう思つて体が交差する瞬間に電気で体を強引に回転させて空にいる横っ腹に遠心力を伴った蹴りを放つ。

「がはあ！」

微妙に避けられそうになったが、完全に回避が出来なく私の蹴りが綺麗に決まり、地上へ落下していく、
私もそれに伴って落下し着地した瞬間に

「イガラッパッパ！！」

イガラムさんのショットガンが炸裂する。当然、予測していたので全身を鉄塊で硬化しやり過ごす。

瞬間にチャカさんが高速の剣技で猛攻を仕掛けてくるが、紙絵でのらりくらりと避けて、剃を掛け一瞬で距離をあける。先程まで私が

いた箇所にはガトリングガンの弾が地に穴を空ける。

「これ程とは、思わなんだ」

「伊達に海軍本部中佐を名乗ってないですよ」

軽いやり取りをするが、私は涼しい顔だが、向こうはすでにペルさんが負傷し、イガラムさんとチャカさんも自身の技術が通じないと判断し、冷や汗を垂らす。

「…アイラ殿の技術は海軍のものなのかね」

「そうです」

そうか…と一言、呟いてチャカさんが構える。その顔には笑みが浮かんでいる。

「…アイラ殿、本気を出して頂きたい」

そう一言、チャカさんが発した。…まあ戦士として本懐を遂げさせてやるか。

ペルさんと、イガラムさんも目がそう物語っている。

「分かりました」

自身に纏わせていた電気をバチバチと鳴かせて青に変色させる。

「さあ…行きますよ」

瞬間、私は紫電と化した。

最初は、チャカの冗談かと思ってた。何故なら、チャカはこのアラバスタで親衛隊の副隊長を務めるほどだ。そう、ほんの軽い冗談だと思ってたの。…模擬戦を見るまでは。

一緒に訓練場に向かっていているアイラを見ると、とてもじゃないけどそんなに強そうには感じなかった。

…以前、助けてくれた時は確かに、驚く程の速度だと思ったけど、足が速いのと強いは決してイコールではない。かけっこが早くても喧嘩が強いというわけじゃないと思うの。

実際、チャカ以外はいつも軍にしている訓練より空気が張り詰めていない。

私もアイラは無茶するなあと、思っていたの。いくら能力者でも流石にこの国のトップ達には勝てないだろうと、そう…思っていた。どんな言葉を掛け様かな…そう考えていたときに訓練が開始した。その直後に、アイラは私の視界から消え去り、一瞬でイガラムの後ろに現れたの。

うそ！？

声が出ないとはこの事だと思う。距離は20Mは離れていたはずなのに、瞬きしたら既にイガラムの後ろに居る。早いなんてものじゃない。チャカも早いけど、どちらが早いんだろう。

そのチャカはアイラの動きを予想していたのか、イガラムに当たる

攻撃を防いでいてイガラムとペルに叱責を飛ばす。…本当にチャカに勝っちゃってたんだ……3人の攻撃を避けていく中で、ペルに視線を向けたかと思えば、空中を蹴って上空に舞い踊る。…もう何でもありだね、アイラは。

空中で回転してペルを撃墜する。あつという間に地上へ落下して行ったが、ぎりぎりチャカが間に合い、大事には至らなかったが、イガラムがアイラに向けてショットガンを放つ。

危ない！

と、思ったけど、何故かダメージが無い様子で、チャカの攻撃をのらりくらりと避けている。

そこでまた消えて、距離をいつの間にか取っていた。そんな中チャカが本気を出せっていうもんだからもう、笑うしかないよね。アイラを覆っていた電気が、青色に変わり…青い軌跡が3人をあつという間に地に沈めた。

…私も…強くなりたい。

あそこまでは望まないけど。

実力（後書き）

誤字脱字等御座いましたらご一報ください。

一步

あの後、一瞬で3人を地に沈めて、一般兵が

「え、衛生兵〜！」

と叫ぶもんだから、衛生兵が駆けつけてくれて担架を用意し3人を運んで行った。

その後、直ぐに気を取り戻して3人そろって参りましたと言って来たのは吃驚したけども。

まあ直ぐに動けるようになりますと、伝えたら

「我等の事はもう大丈夫なので、ビビ様と自由な時間をお過ごしください」

との事なので、遠慮無く遊びに行こうと…そう思っていた。

そう、手紙とのやり取りで事前に、どこのお店が美味しいとか、この服屋は素材がいいとか…

そう、この一月の休暇を有意義に過ごそうと…何度もベッドの中でシミュレートしたはずだ。

しかし、計画なんざ案外簡単に崩れ去るものである。それが、子供が立てた計画なら尚更の事。

「ねえ、アイラ」

「何？」

訓練の後、軽くシャワーを浴びて着替えている時にビビに声を掛けられた。

これからどこ行くとか、そういうことだと思っていた。

「私も強くなりたいの」

…い、一体どうしたというのだ。と、思ったけど…ビビのことだ。
何か訳があるのだろう。

「急にどうしたの？」

「もう、守られるだけじゃ嫌なの」

…恐らく、昨日語ったコーザ少年の事が起因になっているのだと思
う。

それと、守られるのは…性に合わないのだろう。

「だから、私に稽古をつけて！」

その頭を下げられるけど…どうしたもんか。…まあいいか、一月も
あるし。回りきれなかったらまたアラバスタにお邪魔すればいいし
な。

「了解。覚悟してね？」

「ありがとう！」

ぎゅっと抱きしめてくれる。それだけでやる気倍増ってやつだ。

「じゃあ、最初は…というより私が居る間は体力作りね」

「え？」

いや、え、じゃない。体力が無ければ訓練も直ぐに集中力が切れて
むしる悪い動き…疲れが混じった動きを体に覚えさせてしまう恐れ

がある。それは非常にナンセンス。それと、何事も土台作りをしないと大成はしない。小さなことからこつこつと積み上げて行つてようやく完成するのだ。

…私の場合は何故か急速に体力等が付いたけども。まあそれだけじゃ詰まらないだろうから、技術等も教えて行く。そう伝えると、

「あの、一瞬で移動するやつも!？」

と、興奮していたが、もちろんそれもだけど、というと素晴らしい笑みを送ってくれる。

よし、おじさんががんばっちゃうぞ〜!

こうして、ビビ強化月間が始まったのである。

まず始めに、体力作りから、まあこれは地味な走りこみや筋肉トレーニングとか、海兵さんの通常訓練である。が、まあ普通の12歳の少女が付いてこれるはず…いや、ぎりぎり付いていつてるな。さすがビビである。それが終わったら少し休憩を挟み、技術についての訓練と、理論の説明。実践しながら体に覚えさせて行く。流石に六式はまだまだ早いので、それは最後、帰るときに理論だけ伝えよう。

技術といっても色々幅がある。しかし、戦闘におけるもつとも大事なことは生き残ることである。

そこで、まず始めに回避術を徹底的に仕込む。というより、この1月間はこの2点を集中的に鍛える。

重心はどうとか…そういうのを2時間程行つ。まあそこまで行くとビビは既に体力限界なので、訓練はそこでお終いとなる。…あまり無理させて怪我をするのは本末転倒であるのだ。

そうして、ビビと一緒にシャワーを浴びて、午後の夕食までの時間でお買い物をする。

しかし、凄く疲れているビビを連れて行くわけには行かず、

「私のことは良いから、遊んできなよ」

と、ベッドで既に眠りそうな勢いで私にそのような事を言ってきたので、お言葉に甘えさせてもらう。

町まで降りてきて、まず行くことは地図を買うことである。そして、珍しいものや、軽く食べれるもの、本や服など目星を付ける。目星付けた物を地図へ書き込んで独自のタウンマップを作成する。

こうすれば、あそこ行きたいと思った瞬間に簡単に道筋が分かる。なので最初は情報収集が主なのだ。

…まあビビが居れば案内してもらおう事に越したことが無いのだけど、それが不可能になった現在はこうしてタウンマップを作成して行かなければならない。

そうやって、三日が過ぎた。

そろそろ、アルバーナタウンマップも結構埋まってきたので、お次はナノハナ地域である。

このナノハナは私も通ったところだが、航海してきたものにとってアラバスタでの玄関口になる。

よって、人や交易品が多数集まっており、人口も多い。

故に、このアラバスタでトップクラスの活気があふれている地域となる。

体力作りに丁度いい距離ということもあり、走ってナノハナまで行き、そこで情報を収集する。

そんな中、褐色のえらい美人さんが船を下りてくるのを目撃した。
：どこかで見えたことあるような無いような……ん〜と考えていると、何か、乗り物をチャーターして直ぐにどこかへ向かってしまった。
く！我、一生の不覚！！

気を取り直してまた情報収集を行う。そうしてナノハナのタウンマップも完成したのであった。

もちろん、美人発見マークは既に記入済みである。

もう一度会いたいなあ〜と思ってナノハナから撤収するのであった。

「せい！」

「はあ！」

ギギン！と鉄塊状態で二人の攻撃をやり過ごす。今は夜訓練である。無論、毎日ではなく、気が向いたらである。：休暇中は朝訓練以外気が向いたらしか行わないのだ。

そうして、ビビが見学し、チャカさんペルさんのお相手しているわけだが：

「鳴牙！」

チャカさんが高速での必殺の斬撃を放ってくるが、剃で懐に潜り掌底で体を貫通させるように衝撃を送る。

「ぐふ！」

溝に思いつきり攻撃を食らい派手に吹っ飛んで行く。攻撃した隙を付いたのが、ペルさんが

「飛爪！」

と空中からの攻撃を仕掛けてくるので、此方に攻撃が当たる瞬間に踵落しを決めて地に沈める。

「うはあー！」

これで、5連勝目である。

ビビは凄い！と目を輝かせて此方を見るが、私にとってはビビのほうに凄いなと思うんだけどなあ…

なんていうか、器が違うよね。しかも美少女。もうね。神様を信じても良いかもしれん。

「本当に、アラバスタ親衛隊の副隊長と、アラバスタ最強と謳われる二人をあっという間に倒すとは」

声が出た方に顔を向けると、そこには若干驚いているコブラ王が此方を見ていた。

「これでも海軍本部中佐ですよ」

「そうか、ビビも鍛えていると聞いたのだが」

「ええ」

それにもそうか、と答えて此方に近寄ってきて、耳元で一言

「家の娘はどうだったかね？」

体中に何か走った瞬間であった。…そう、正に同士と会った…そういう衝撃が体中を駆け巡ったのだ。

「将来は…Dいや、それ以上かもしれません」

「くくく…その観察眼。やはり…」

そこで、一端顔を離して、徐に右手を差し出して

「「同士よ!!」」

シェイクハンドをして意気投合。やはりコブラ王は分かっているらしい。

「流石コブラ王の娘さんですよ。立派（色々な意味で）に育ちますね」

「そうだろう、そうだろう。この前もチラッと見たけど、やはり君の観察眼通りに行くとも踏んでいるのだよ、まあ君も将来には期待といった所だけだな」

はははは！と笑っているが、あれ？何か凄い事言っていない？

「もう一度先ほどの言葉をお願いします」

「ん？君の観察眼かね？」

「いえその後です」

「ああ、チラッと見たのか、君も中々よく」

バチバチバチ！！

「ぐあああああ！何故だ！同士よおおおお！」

「覗きは…犯罪です」

グフと地に落ちるコブラ王。しかし誰もフォローを入れない。とうよりフォローした瞬間に女の敵確定である。ビビも腐った汚物を見るかのような視線で自身の父を見ている。

「変態」

ビビの一言でコブラ王は完全にその機能を停止した。

「王ー!!」

色々な感情が混じった叫びが訓練場に木霊した。今日も月が綺麗である。

一歩（後書き）

誤字脱字等御座いましたらご指摘お願いします。

砂の守護者（前書き）

遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

砂の守護者

「はあ！」

「そうそう、その調子」

コブラ王が機能を停止した日から丁度1週間が経ち、現在もビビに技術を教えている最中である。

ビビは飲み込みが早く、基本的な技術は結構さまになってきている。…が、あくまでもさまになっているだ。

まだまだ、日が浅すぎる。漸くハイハイが出来そうになると行ったところだ。

ただ、今のうちからしっかりと鍛錬していけば、原作開始当初は結構強くなっているのではと思う。

そこは、ビビの努力次第だけだね。でも、本人は根気があるのでたぶん、原作より強くなっていると思う。

無論、私だけではなく、親衛隊の皆さんもビビに対して訓練を行っているのでいい経験になるであろう。

さて、私なのだが…まあ私はこれといって特にやることは無い。

朝は訓練、夕方まではビビの特訓。その後町へ散策しに行く毎日である。あの美人に会ってからは毎日目撃した場所へ足を運んでいるのだが、美人さんと全然会えないでいて、実に残念である。

今日も散々にビビを扱きあげて、町へ散策に躍り出る。

今回は裏通りとかで隠れた名店を探す目的を持って前にタウンマップを完成させたナノハナに来ている。

相も変わらず活気がある。交易品の中に何か掘り出し物が無いかなあ…と思っている。

「か、海賊だ〜！」

そんな声が聞こえてきた。声がした方に駆けつけてみると

「食料と金と女を奪いつくせえ！」

「「「おお〜！！」「」」

と、一般的な海賊が暴れている姿を見つけた。どうやら、邪魔をしなければ殺されないのか、逃げていればスルーされている…男性であれば。女性を襲おうとするとは言語道断。貴様らに男を名乗る価値なし！！

さあて、汚物の消毒だ〜フウハハハ〜！を行おうとしたら…

「何時、俺の縄張りで遊んで良いと言った」

声が上がからしたので、見上げると、ガープ中将並みの巨体が民家の上に立っている。

…どこかで見覚えがあるんだけど…

「クロコダイル様だ！」

町の誰かがそんな声を上げると、一斉に始まるクロコダイルコール。そうだ、クハハハ！な、笑い方の人だ。あれだ、砂人間だ。ワニだ。

「クロコダイルウ…王下七武海様が何でこんな所にいんだあ？」

最もである。確か、何かこの国を乗っ取るうとしていたような…

っは！そつだ、この男アラバスタの内乱を招く人物じゃねえか！おいおい、どうするよ。

現状、王下七武海なので懸賞金は取り下げられ名目上は政府関係者となつてゐる。

そのため、此方から手を出すわけにもいか無いのが現状である。

…扱的にも向こうのほうが高いしな。そも、何とかワークスの証拠を揃える事が…出来ないと思う。

あれだけの組織を海軍や政府に直前まで隠す芸当は、私が今から動いても原作までに足が辿れるかどうかだろう。…頭を使うのは私の役目ではないのだ。

が、それだとビビが何とかワークスに潜入捜査をしてしまふ。

しかし、そのおかげで全てに辻褃があつたわけで…まあ将来のルフィ兄に期待つて所かな。

そんな事を考えていたらワー！と歓声が広場に木霊する。

どうやらクロコダイルが相手の海賊団を殲滅したらしい。これがロギア系の力かあ。

私も攻撃力なら匹敵しているけど、事、防御面では普通の人間と変わらないしなあ。まあ鉄でも切れなければ私の鉄塊も敗れないであろうけど。

海賊が残して行つた財宝を片手にどこかへ去つて行くワニさん。

もしかして、付いて行つて、ワニさんを亡き者にすればこの国は平和に過ごせるかもしれない。何人も死なないかもしれない。それだけの實力はあると自負している。

しかし、私は犯罪者扱いである。そうすると、ビビともう会えなくなるかもしれないし、美味しいものもゆっくりと食べれなくなるかもしれない。

…そう思うと、やはり保身に走ってしまう。自分の身が一番可愛いのだ。名も知らない人間を助けられるが、友達と居られなくなり、二度と平穏が訪れない様になると、名も知らない人間が死んでしまおうが、最終的にはハッピーエンドを向かえ、友達とずっと居られる。何れかを選ぶとしたら…私は迷わず後者を選ぶ。

私だって人間なのだ。幾ら力があるうとも、それを行った際のメリツトデメリットを主観的に考えると、そういう結論に至る。しかし、その時になって止められるかもしれないから、この選択肢は意味無いのかもしれない。そうだ、その時になってどれだけ人を救えるか。

そも、今クロコダイルを亡き者にしてしまうと、この国が海賊に、強い海賊に襲われてしまった場合の抑止力が無い。あるとしたら、親衛隊のお二人位なものだ。しかし、そのお二人も駆けつけるのに時間要る。

そして、駆けつけるためにはその事を二人の耳に入れなければならぬ。

それにどれだけ時間が掛かるといふのだ。その間に海賊はやりたいたい放題であるのだ。

そうすると、救援が遅い国王軍に対して不満が募る可能性も捨てきれない。…あれ？原作後のアラバスタはそういった意味で言うところ…まあ大丈夫なのだろう。そういう事原作通りになっていればであれば。

今は大航海時代であるが故に、あまり平和が長続きしないのはこの世界の摂理である。

しかし、そういった芽を少しでも取り除く。そのために海軍が存在していると思うのだ。

…まあそれでも海軍にクレームとかはガンガン上がってきているけ

ど。特に救援が遅いとか…

それはさて置き、要するに今クロコダイルに手を出すのは得策では無い。やはり機を見て逮捕しなければならぬ。…ビビには無理をさせるけど、無事であることを心から祈っているよ。

さて、そうするとビビの特訓を更にスパルタにしなければならぬな。そう思って、帰路に着くのであった。

次の日、ビビと一緒にベッドで一緒に寝ていたベッドからビビを起こさないように出る。

早朝訓練を行っている最中に、最近ではビビも遅れながら混じって行く。…本当に向上心の強い人だ。

軽く体を動かして、シャワーも一緒に浴びてご飯を食べる。

この日は、訓練を休むらしく珍しく私と一日中行動を共にする事となった。

「ごめんね、せつかく来てもらったのに」

街中を歩いていると、そうビビが言ってきた。しかし、街中を歩いていると結構フレンドリーに

ビビに話しかけてくる町の人を見ると、平和なんだなあと思う。

「どうしたの急に？」

「私の稽古が終わった後、一人で町に行っていると聞いて申し訳なくて」

「ああ、気にしないで。ビビはやりたいようにやってみてよ」

「…ありがとう」

ばあつと満面の笑みを此方に向けてくれるだけで、それだけでおじさんの心は癒されるってもんだ。

「そういえば、町に出掛けて何をしていたの？」

こんな質問が飛び出てきたので、私が持っている手荷物から作成していたタウンマップを見せる。

「アラバスタの各町の地図に色々書いてあるけど…」

「地図を買って、ここにこれがあると云う事を記したタウンマップを作成済みよ」

そうなんだ！と返事をし、地図をまじまじ見る。そこで質の良い服屋を指差して、ここにいこう！と誘ってくるので二つ返事でOK。
断る理由何ぞ無いのである。

「いらつしゃいませ、まあビビ王女！」

「ふふ、気にしないでね」

お店にはいるや否やこんなやり取り、いやあ有名人も大変だねえ。さて、このお店の品揃えは同なんだろうと中を見渡せば、やはりアラバスタ。

踊り子みたいな服や、砂漠を越える際に着用する日光避けのローブ等がずらりと置いてある。

それに、前世でインドの方が着ているようなものもある。…確かサニ―だったかな。

しかし、何時見ても露出度は高めである。無論、普通の服も存在しているが…やはり、アラバスタ特有の服のほうに魅力的なので此方に目移りしてしまう。

色や模様のバリエーションも様々で、半透明なレースがそれらを実際立たせている。

そこから2時間以上もこの店で試着会を行い、会計を済ませた。結構な額であるがそこは王族と、海軍本部中佐である。現金一括払いでお店を後にする。

「いっぱい買ったね」

「そうね、カルガモにこの荷物を届けてもらいましょう」

ということ、このアラバスタでの配達方法は主にカルガモが主流なのだ。

足が速いし、スタミナがあり、知能も高い。よって配達にうってつけなのである。流石に配達人が搭乗するけどね。

荷物を頼み、お昼も済ませて、お次はナノハナの香水店へ
お店に入ると、香水の匂いが広がってくるが、安物みたいにしつこくなく、爽やかに私たちを包んでくれる。

…香水が有名になるのも無理は無い。確かに、どの香水を手にとってもいい匂いなのである。

ビビからお勧めを教えてください、二人同じ香水を買う。いやあ〜青春だねえ。

買い物完了したので、さて、帰ってお話しますか！と、行きこんだ矢先に前方から美人さん発見。

よくまじまじ見ると…ニコ・ロビンじゃん。普通に買い物してるよ。

そう思って、すれ違うときに

「ねえ」

うおおおおおい！何か声を掛けられたよ！！ご自慢のポーカーフェイスが崩れる所だったでは無いか。

「どうかされました？」

ビビが平然と答える。そうか、ビビはこの人の正体を知らないもんな。

「すれ違ったときに香水の良い匂いがしたの。その香水は何処で売ってたのかしら？」

…この話を聞くと普通に普通の美人さんなんだよなあ

「あ、案内しましょうか？」

「ええ、お願いできるかしら」

そういって、ビビと仲良く私も一緒にロビンと先ほどの香水店に向かった。

しかし、ニコ・ロビンが何でこんな所に居るのかなあ

「あら、私の顔に何か付いてるかしら」

そういって此方に話しかけてきた。じろじろ見すぎたな。

「いやあ〜美人さんだなあ…と、思いました」

「ふふ、ありがと」

屈託の無い笑みで此方にお礼を言うてくる。…やはり、原作通りに

行く。

ルフィ達と一緒に居たほうが、彼女の夢も叶うとおもつ。

「あ、見えてきました」

そういつて、先ほどの香水点を指差して案内した。

「ありがとう、このお礼は」

「あ、好きで案内したのでお礼なんて」

「そう？ありがとう」

それじゃあね、と挨拶をしてお店に入ってしまった。

「うむ、やはり美人は良い」

「ほんと、アイラってたまにおじさんになるよね」

む、失敬な。これでも12歳のぴちぴちの少女なのだぞ。訂正を要求する。

はいはい、と笑いながら返事をして、一緒に帰っていくのであった。

砂の守護者（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をよろしくお願いいたします。

オカマ

「ジリジリジリ」

このアラバスタに滞在して、半月が過ぎた頃。
何時もの様にビビと一緒に朝訓練が完了して、シャワーを軽く浴び、
食事を食べて、特訓開始前のこと。
一応持ってきた海軍本部と繋がるデンデン虫が突如鳴り響いた。

「アイラ、鳴ってるよ?」

此方の様子を伺ってきたので頷いて返事を返す。
デンデン虫に近づいて行って、受話器を取った。聞こえてきたのは…

「もしもし、アイラです」

「アイラ? 休暇中申し訳ないけど、ちょっと頼みたいことがあって
発信者はどうやらヒナ大佐だ。しかし、何だろっ頼みたいことって。」

「頼みたい事とは何でしょうか?」

「ええ、そのことなんだけど…」

要約すると、支部からの連絡で分かったことなのだが、どうやらこのアラバスタの海域に海賊が居るらしい。

直ぐに動ける人間が現状居なく、であればと、アラバスタに滞在している私に白羽の矢が立ったのである。

まあ、一月も有給含んで休暇が取れたのである。そんな事お安い御用だ。

「了解しました。今回のターゲットは」

「海賊の名前は「カ・マセー海賊団」よ賞金額は2000万だから、アイラにとっては簡単でしょうね」

との事である。まあグランドラインに入ったばかりの新鋭なのかも知れないが…名前からしてないだろう。

それでも油断は禁物である。早速捕縛しに行こうかと思ったけど…

「アイラ、私も連れて行ってくれない？」

と言って来たが、丁重にお断りさせてもらった。まだまだ実践に出すのは早すぎるし、運が悪ければ死んでしまう恐れがある。ビビに危険な目には会ってもらいたくないのと、今度埋め合わせをする事を約束して、しぶしぶ引き下がってくれた。

「それじゃ、行って来るね」

「気をつけて…絶対無理しちゃだめだよ」

ものすごく心配してくれて嬉しい限りであるが、私が帰ってくる前に倒れるんじゃないのか？

「心配だから、付いて行きたかったの」

むむ、こやつ…私の実力を信じておらんのか？これでも逃げ足だけは自信があるのだ。

「大丈夫だよ、逃げ足だけは速いんだから」

そう笑みを向けて、出発する。まあ大丈夫だろう。

ナノハナについて、停泊している私の船に電気を充電させて動かす。しかし、アラバスタの海域という情報しかないので、正直見つかるかどうか分からないなあ。

任務なので見つかりませんでしたじゃすまないから、今日は遅くなりそうだ…そう思っていました。

「いたよ」

遠方に1隻の船が髑髏のマークを掲げて前進してきている。

私の望遠鏡が曇っていないのであれば、手配書にある海賊旗と一緒にある。

…死なないように、全身に電気を流して、捕縛しようか。と、思っていたら、何やら煙を上げているではないか、その部分に望遠鏡の倍率を拡大してみると…

「じょーだんじゃないわーうー！」

なんかアヒルの首の飾りを股間部に装着している変態がいた。

海賊団相手に孤軍奮闘している。…一体何があったのだろう。正直、オカマはキャラ的に好きだが、実際目になると、きもい。何がきもいといったら、全身の造形がなんだかキモい。

まあ良いやつなんだけど。きもいけど。

私が近づく前に戦闘が完了してしまった。そして、とうとう私の船に気づいたのか、此方目掛けて手を振ってくる。…これはやつと接触しなければならぬのか。…：…いずれにせよ、海賊団の生死の確認を行わなくてはならない。こうして、仕方なく手を振るオカマの元に船を進めるのであった。

「それで、貴方は何故この船に居たのですか？」

「だあゝかあゝらあゝ、こいつらがあ、アチシの部下に攻撃したからあゝ単身乗り込んで戦ったのお！」

…うぜえ。とりあえず、今回は海賊拿捕協力ということで、戦闘行為に関しては大目にする。

幸いというか、殺しはしていなかったので、ここから近くの海軍支部に連絡を行い、海賊の引渡しを行った後、アラバスタへ帰還する際に、同じ目的地なため乗せて言って欲しいとのこと、ついでだから事情聴取を行った様がこれだよ。

「んゝ…あなたよおくと可愛いわなあゝい」

と、右手で肩を叩かれる。…叩かれて気づいたがこいつ確か能力者

だったな。確かまねまねの实の能力者だったような。∴私の格好で変態行為を行った瞬間この世からおさらばして頂くか。

まあ、私の不利になるような事じゃなければいいや。流石に能力までは真似できんだろっしな。

「でも、本当に海軍本部中佐なのお〜？」

「∴これで証明になりますか？」

と、証明書を差し出して見せる。

「わお！本当にジョーダンじゃないわねえ〜」

懐にしまつて海軍の正義印を背に背負う。∴単純に着たかつただけである。

私は背が低いので、特注でサイズを合わせたものだ。結構あつたかいので重宝している。

「海軍も可愛い子がいるわねえ〜」

と、感心しがちな顔でこちらを見てくる。∴ルフィはよくこいつとフレンドになてて

「私と同じくらい可愛いじゃないのよう！今日からマイフレンドねえ〜！」

フレンドになつてしまったでござる。がっはっはっはとパンパンと肩を叩いてくるオカマ

「それじゃあ〜記念に私の芸を見せてあげるわ〜」

わーぱちぱちぱち。と気の無い拍手で迎えても歓迎されていると思
っているのか、のりのりで能力で色々な人に変化している。

「それじゃあ、はい！アイラちゃんよ」

と、私の姿でセクシーポーズを取って此方に投げキッスを送って
くる。

…私の現状の体でセクシーポーズは無いな。逆に可愛らしい。つか

「何をなさっているんですか」

手をおでこに当てて痛む頭を抑える。

「アイラちゃんの真似よ、どう、凄いでしょ。もちろん体もね」

と、ぱつと服をオープンにして胸が、この遮る視界の無い箇所
で丸見えになった。

「面白いこと出来るんだね、ボン・クレーさん」

「そうよ、体まで真似…ちよ、ちよっと、何、何なに？じよ、ジ
ョーダンよ、ジョーダン。ちよっとした御茶目なよう！」

「……私の姿で遊ぶな！」

大海原に雷鳴とオカマの悲鳴が響き渡った。

「それじゃあ、ねえ、アイラちゃん！」

漸く港に着いた頃には既に日が完全に落ちて、夜となっていた。一日で完了したのだから別に文句は無いけどね。港にオカマを降ろして、別れる際にこんな公共の場で大きな声で言うもんだから、凄く注目を集めてしまった。オカマは何時も通りか分からんが意気揚々と帰って行ったけど…周りの目が非常に痛い。

こいつも同類なのか…そういう哀れみの視線が…痛いです。や、やめろ！私はち、違うぞ！

み、見るな…見るなあああ嗚呼！！

「くっそおおおお！」

私は全力の剃でその場を後にした。その時の月は…滲んで見えた。

色々な思いを振り切って、ようやく宮殿に着いたら

「お帰りなさい！アイラ！」

さあ挨拶でもしようかと…と、思っていた矢先にビビが此方に飛び込んできた。

ふわっと抱きとめて、お互い見つめ合う。無論、息が触れる位接近

している。

「ただいま、ビビ」

「うん！」

…ビビの後ろに尻尾が見えそうだな。まさか、ここまでアクティブだとは思ってもいなかったが…

この感触はたまらん。まず匂いが良い。少女特有の匂いと、アラバスタの質の良い香水の匂いが見事にマッチしていて素晴らしい。次に感触、その素肌はすべすべしており、潤いがある。また、体温も若干大人より高く布越しに心地良い温度が伝わってくる。

…惜しむらくは私が男であればなあ……まあいつか。

一通り楽しんだ後に、惜しみながら体を離していく。もう恋人でいいんじゃないね？元男のチェリーはこういうことされちゃうと勘違いしちゃうぜ。

「怪我は無かった？」

「もちろん」

「良かったあ」

と本気で心配してくれていたのか、安堵の息が零れている。ねえ恋人でいいよね。おじさん勘違いしちゃうよ。

「それじゃ、一緒にお風呂入りましょ」

「了解」

そうして、私達はお風呂に向かって歩き出した。無論、今日も洗いつこはしました。もう恋人で良いよね？

え？女の子同士は恋人になれない？…愛に性別なんて関係…無い！

……たぶん。

オカマ（後書き）

誤字、脱字等御座いましたら、ご指摘をお願い致します。

アラバスタ滞在も残る二日となった。一ヶ月の有給を含めた休暇が終わりに近づき、いよいよ各地を動き回って仕事を行うときが近づいてきた。：まあ本来であればその準備期間等の休みであったが、すでにガープ中将が船を用意しているからその必要も無く、こうしていられるのだが。

この期間は：まあビビを鍛えていた。これといって技術が身についたとか、技が出来るようになったとかではない。体力が少し付いたくらいである。それでも、進歩していることは間違いない。そこからこつこつ積み重ねて行って欲しいと切に願っている。

後二日ということなので、町で出会ったときみたいに鬼ごっこをする事になった。

時刻は分からないけど結構遅い時間である。鍛錬にも慣れたのかビビはまだまだ元気である。

そした、範囲は城下町内。：広いお！まあこれは鬼ごっこというよりかくれんぼのほうに近い気がする。

事実、私が鬼になって数を数え始めたら一直線にどこかへ向かっていった。恐らく時計塔であろう。

まあいいか、とゆっくり数を数え始めた。

side ビビ

アイラが来てもう一ヶ月が経とうとしている。あつという間だったけど凄く楽しくて充実した日々だと思う。またちよくちよく遊びに来るみたいだけど、今日みたいに長期滞在はもう難しいと言ってた。だからか、分からないけど自然と鬼ごっこしようと言口に出していた。

鬼ごっこの次に会うアイラはまた一緒にわたしと駆け回ってると思う。それが何歳になろうと変わらない。そういった願いを込めて鬼ごっこを一緒に。

…足では確実に負けるので、秘密の時計塔で身を潜めることにしよう。

そう思って時計塔の近道に入ったら、男が3人位いた。ただの通行人だろうと思って通り過ぎようと思ったら

「これはこれは、ビビ王女じゃないですか」

その声を掛けられた。

「はい、そうですけど」

国民なら知ってると思うし、なんら不思議ではなかったので普通に

返事をし立ち止まってしまった。

「こんな夜中に何をしていたらっしゃるのですかい？」

「へへ、危ないですね」

夜中といっても、夕飯の準備に取り掛かる頃でそこまで遅い時間ではない。

その時間帯と、アイラの強さがあったがこの時間帯でも外に出て遊んでいられるというわけなんだけど…

何か嫌な予感がする。

「あ、ありがとう。気をつけますね」

そう言って、立ち去ろうとしたけど。急に肩を掴まれた。

「きゅん」

強引に、床に倒され、膝をちょっと擦りむいてしまった。

「何をされるのですか！」

アイラとの特訓の成果を見せてやる！そう思って睨みつけたのだけど

「何って…決まってるじゃないですが…ビビ王女。男が女にするのは」

「ひひひ…もう俺達は明日がないんだ。せいぜい最後の夜は楽しむとするか！」

ゾク

男達の顔を見た瞬間に、恐怖が私を埋め尽くした。

「…いや」

さっきまでの思いは恐怖に塗り替えられた。コーザ達の時はどういった目で私を見なかった
だから、あんな風に振舞えやし、そういった知識も無かった。

でも、今は分かってしまう。この目は…そういった目だ。

「へへ…いいねえ。やりがいがありそうだ」

「おいおい、もう少し人を呼んだらどうだ？俺達だけじゃもったいないだろ」

「ああ、いいねえ」

何か話しているのが聞こえる。気が少しそれたみたいだ。その際に

私は
近くの砂を手一杯握りながら、立って、勢いよく男達の顔を目掛けて振りまけた。

「うお！」

「この！」

そうって、少しの間だけどひるんでくれた。その隙に全力疾走で宮殿の方向に向かおうとした。

走り出した直後に、お腹に猛烈な衝撃が来た。

「かはっ……」

砂を掛けた二人に気を取られて、前を見ていなかった。既に、他の男達も…集まってきた。

「おいおい…せっかくのパーティーなんだ…楽しもうぜ、ビビちゃん」

「へへ、ありがとよ。危うく逃がすところだったぜ」

苦しい。息が思うように出来なくて頭がボーっとする。けど、直ぐに逃げないと…

しかし、そんなことは叶わない。

「へへ、俺が一番だ！」

両腕が抑えられて、服も脱がされる…いえ、破かれる。足も他の男に抑えられて…何も出来ない。

「いいねえ、まだ12歳なのにかわいそうですねえ」
「はははは！」

自然と涙がでる。もう助からないのかな…ねえ、助けて。助けてよ。

「助けて！アイラー！」

「その手をどける！この屑共が！！」

瞬間。覆いかぶさっていた男が轟音を響かせながら彼方へと吹き飛んでいった。

side アイラ

鬼ごっこが始まって、私が鬼になった。まあ数えて直ぐに空へ飛んで、何処にいるのかなあ…

と、探したけど…暗い。流石に夜となると。暗い。全然わからねえ。まあ、気長に探すかと、最近発見した磁場と月歩を応用して、空中に足場を作る。

…最高だぜ！気温も心地いいし、月明かりは幻想的でその足元には雄大に広がる砂漠の町。

所々光っている建物には人の温もりが灯っている。まさに絶景。

「いやあ…いいねえ。最高だ」

そうやって、ちまちまと散策している。何か可愛い子いないかなあ…と。

暫く探していると、何か怪しい男がいる。かなり遠めでうつすらとしか見えないけど、

幸いと言うか、その男自体が明かりを持っているから、まあ分かると言った所か。

おいおい、いかにもだなあ…と、思っていると何かを蹴るような動きをとつ……た？

…おいおいおいおい。あの糞共…ビビに、私の親友に…手を出して
るじゃねえか。

思った瞬間。いや、ビビだと認識した瞬間。磁場の反発を利用して
一気にトップスピードに

あんまり早いと、ビビにも被害が行くと思われるので、被害が発生
しないように…

ソニックムーブを起こさない限界で、近づく。

直ぐに見えてきたのは、組み伏せられたビビ。

そして聞こえる、私の名前。言われなくても、何時でも何処でも。

私は駆けつけるぞ。

「その手をどける！この屑共が！！」

開口一番にビビの上に乗っている男を殺す気で吹っ飛ばす。うめき
声を発しないまま彼方へ吹っ飛んでいく。そこで他の二人は漸く、
私に気付いたらしく、ビビから離れて、それぞれサーベルを構える。
ま、そんなことはどうでもいい。まずは、ビビの格好が非常にあれ
なので、海軍のコートを掛けてあげる。

「大丈夫？ビビ」

やさしく、なるべく刺激しないように。その声を掛ける。

「う、アイラ〜！」

涙声になりながら私の胸の中で安心をかみ締めるように泣く。

「怖かったよね？ごめんね。傍にいて上げれなくて」

「うぐっ…アイラぁ…怖かったよぉ」

よしよし、と抱きながら頭を撫でる…が

「おいおい、何無視してんだよ」

「お前ら、俺達をしらねえのかよ」

何か、聞こえる。ああ、そうだ…ビビを襲ったやつらか。耳障りだ。

「てめえの力には驚いたけどよ。そんな王女を守りながら俺達を相手に出来るのか？」

「へへ、あの子も可愛いな」

「ねえ、耳障りだから。黙ってくれない？…ま、答えは聞かないけど」

そういつて、ブルースターターと剃の組み合わせで瞬きもしない内に懐へ潜り込み、掌底。

「がは！」

「な！「邪魔なんだよ」！！？」

もう一人の男を足払いを掛けて地面に落ちる前に、溝落ちに踵落としを決める。

「があ！！！」

「喚くな。そんなに死にたければ別だけど」

踵落としを決めた瞬間に地面に亀裂が走り、男の口から大量の血が吹き出る。

恐らく内臓がやられているだろうが、どうでもいい。それに、これくらいじゃまだ死なない。

「や、やめてくれ。お、俺達が悪かった！俺達の海賊団が一人の男に消されるのを見て、逃げただけど、直ぐに追ってg「ねえ」はい！」

「そんな話、知ったことじゃないんだけど」

瞬間。男が絶望の表情になった。

「まあ、いいや……消えろ」

そういつて、手に電気を集める。チ……チ……チチ……と千鳥が鳴く。

「や、やめてくれえ…か、金ならやる！だから命だ」「うるさい」「け、いやだああああ！」

思いつきり、胸を貫く瞬間に

「だめー！！」

ビビの声が聞こえた。振り向くと、私に抱きつくように止めてるビビがいた。

「だ、だめだよ！アイラ！」

「何で？だって、ビビをこんな風にしたんだよ？生かしておけないよ」

そうだ。俺の親友をこんな目に遭わせやがって。その面を見ているだけで反吐が出る。

「確かに、確かに怖かったけど、でも、アイラが助けてくれたよね？」

「それは結果論だ！！もし私が来なかったらどうなっていたか分かるか！！、こいつらの慰み者になっていたんだぞ！」

「でも、今は何もされていない」

ふざけてるのか！そう声を上げようとして、ビビを見た。

泣いているビビ。けど、その瞳にはそんなことを望んでいないと。そう私に訴えている。

「その人も、生きている。生きていれば間違いは起こしてしまうよ」「…けど、その間違いはとてつもなく大きなものになる所だったんだよ？」

「それでも、死んでしまつたら…私はその人のことを許せなくなつちやうよ」

……は、ははは…はははははははは！

「はははははははははは！」

「ど、どうしたの！？」

「い、いや…ははは…本当に、ビビは…ぷ…く…く…」

「もう、何よ？」

本当に、素敵な女の子だ。輝いて見えるよ。ビビの器のでかさは…私じゃとてもじゃないけど量りしれん。全く…いや、本当に全くだ。やはりビビは強い。俺の数百倍、いや数千倍心が強い。

「も〜ビビ〜やっぱ最高！」

「へ！？あ、ありがとう」

ガバ！つとビビを抱いて耳元で叫ぶ。何か、ほっぺが赤い気がしているが…そんなことあどうでもいい。

「ふふ、ほらおっさん。私海軍だから。まあ逮捕するよ。大人しくしてね」

「あ、ああ」

そうして、この事件はひっそりと終わった。

「ねえ、ビビ」

「なあに？」

ひとしきり、コブラ王に怒られてから、ビビの部屋へ。さあ寝ようかなと思ったけど。どうしても伝えないといけないことができた。

「強さって何だろうね」

「え？」

戸惑った顔を見せるビビ…あれは無意識だったのか。

「私は思うの。暴力だけの強さは確かに明確だ。けど、私はそれ以外の強さも欲しかった」

「それ以外？」

「そう…暴力以外で人が守れる…そんな強さ」

思う所があつたのか、じつと考えている。

「その強さは恐らく砂の城みたいに脆く、崩れやすい。けど、それ

を誰かが一生懸命守っていけば、自然とその砂の城を守ってくれる人が増えて、その砂の城は堅固なものとなる」

「…」

「ビビには、そういう強さがあるのかもね」

「ありがとう、アイラ」

「此方こそ、誘ってくれてありがとう！」

とうとう、マリージョアに帰る日がやってきた。あれからは二人でいちやいちゃしながら最後の日を過ごした。まあ、正直惚れたね。ビビに。最高だ。こんな器のでかい人は見たことないぜ。

その後、普通に寝た。互いに眠かったしね。ただ、あの日からビビの雰囲気は何となく変わったように見受けられる。この経験がビビにとって幸福であるよう、願う。

「またちよくちよく遊びに行くね」

「手紙絶対忘れないでよ」

互いに約束事を結んでいく。絶対にまた合つと誓いながら。

「アイラ君。本当にこの一月の間お世話になった」

「いえ、此方こそ本当に楽しい時間を頂きましてありがとうございます御座います」

何と、コブラ王も見送りに来ているから凄く豪勢なメンバーだ。

…まあ来た理由は分らないはない。

「いやいや同士よ、また何か困ったことがあれば何時でもきなさい」
「さすがコブラ王、お分かりになりますか」

「くく…後何年で「お父さん」…うおっほん！まあ、冗談は抜きにして、また遊びに来なさい。歓迎する」

「はい。ありがとうございます」

さて、積荷は積んだし、食料も持ったし…忘れ物も…いや、一つ忘れてたな

「ビビ」

「なあに？」

「リボン、交換しない？」

「…う、うん！…」

また遊べるように、お互いが何時も傍にいるように。…と

「じゃあね、ビビ。ビビが困ったときは、私の名を呼んで。直ぐに駆けつけるから」

「うん！ありがとう！…」

「…またね！」「」

そうやって、帆を広げて私は船を出した。

「またね、私のヒーロー…:か」

最後にビビがそういていたような気がした。まあ空耳でも何でもいいわ。

そう、私はビビのヒーローだから。

「さーってと、今日の晩御飯は何にしようかなあ〜」

進行方向に異常なし。本日も快晴也。

ビビ（後書き）

アラバスタ原作前編終了です。

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘を宜しくお願いいたします。

仕事

短い休暇が終わりを告げて、砂の国から海軍本部…マリンフォードへ帰還した

恐らく、というより確実に原作の流れが変わるであろうが……いい方面に転がって欲しいと願うばかりだ。まあ、何が起ころうともビビは守っていければなあ…と思う。

「さて、アイラ中佐の勤務地なのだが」

現在、海軍本部のセンゴク元帥の部屋で、新たな任務の内容を聞かされているわけだが、

マリージョアに帰ってきて直ぐにガープ中将と、ヒナ大佐とその他将官の方々に挨拶を行った

ヒナ大佐は休暇中の際に任務を受けた事に対してお礼を言ってくれた。こんな年下にも礼儀を欠かさないヒナ大佐は本当に尊敬できるぜ。

挨拶が終わり次第、センゴク元帥が部屋で待っているとの事なので、挨拶に来て見ると…まあこういうことになったのである。

「基本はこのマリージョアを中心とした海域を担当してもらう」

「了解しました」

「うむ」

このマリージョア中心の海域は…結構、いや、かなり広い
グランドラインは勿論のこと、新世界も範囲に入るので中々厄介で
ある。しかも、この海域まで駒を進める海賊は総じてレベルが高い。
トータルバウンディー1億は最低ラインと見て全く差し支えない程度
である

「私単独でしょうか？」

「うむ、アイラ君の場合は専用の船もあるしの。しかし、一人が厳
しいと言うなら部隊をつけるが…」

「いえ、確認のためでしたので問題ありません。休暇は何時取れば
宜しいのですか？」

休暇を大量に頂いた後だけど、これはこれで大事なことである。海
軍は警備であれば基本シフト制であるが、こういった広域の見回り
の任務を課せられるとぶっちゃけ、休暇は無いに等しい…いや、何
もなければ休暇同様なんだけど、結構気疲れするのだ。何時海賊が
現れるか分からないしな。

「休暇は規則に則って構わん。但し、臨機応変に対応を頼む」
「了解しました」

海軍の休暇は基本週に2日である。まあ結構親切なんだけど…命張
ってるからなあ…
どうなんだろう？職場の雰囲気は硬くないし、私は一人なのでぶっ
ちやけ毎日が休暇だ

「一人だからって、職務を全うしない…と言うことにならないよう
にな」

「は、はい！」

元帥…心眼でも開眼してんのか？すげえびびったんだけど

まあ、毎日報告書を送らないといけないしなあ…そういえば、私直属の上司って誰なんだろう。

「一つご質問宜しいでしょうか」

「許可する」

「ありがとうございます。私の上司って誰に当たるのでしょうか？」

…あれ？センゴクさん？あれ？何でため息なんかついているのでしょうか？

何？何か余計なこと言っちゃったのか？

「アイラ君の上司は…私だ」

「…え？」

「いや、私だ。…よく思い返して見る。誰がアイラ君に任務を課しているのかを」

「…センゴク元帥です」

「左様」

…マジですか。いやいやいやいや、私なんぞ、たかが海軍本部中佐ですよ？

いや、確かに、部隊に入った際は、ヒナ大佐が上司だったのだろうけど、え？マジですか？

「アイラ君は特殊なのでな」

…さいですか。いや、確かにいきなり中尉で辞令を直々にセンゴク元帥から頂いたもんな。

普通ならあり得ないよね。

「申し訳ありませんでした」

「よいよい」

快く許してくれた。うがー！知らなかったとはいえ、上司に上司誰ですかとか…馬鹿だろ俺。

しかし、許してくれるセンゴク元帥にはもう頭が上がらん。

そして俺は、深くお辞儀をして部屋を退出するのであった。

任務を貰い、その詳細が記載された指令書と、これまで海軍が集めてきた情報を下に作成されたグラントラインの海図が支給された。その後、これから数日はその準備に追われるわけだが…まあ今日は長旅の疲れもちよこつと、ほんのちよつとあるしな。明日にしようと思った。

ガープ中将も今は仕事に従事しており、この家には私一人しか居ない。

まあデンデン虫があるから何時でも話は出来るけどね。夕食を作って食べ、カフェオレを作って

冷蔵庫で冷やす。その間に入浴してさっぱりだぜ！と言う状態になった。

「どれどれ、どの位の範囲なのかなあ…」

自室へ戻り、指令書を読んで今回の任務の概要をもう一度確認する。まあ簡単に言うと、指定された海域をぶらぶらして海賊を捕まえてきてねっていう指令。で、その気になる海域だけ……

「広すぎだろバーロー」

あほみたいに広い。広っていうレベルじゃない。意味が分からんアラバスタ王国まであるけど……まあ私一人が担当しているのではなく、かなりの人数がこの海域の担当である。なので、カバーしきれないことは無いけど……

「広い……広すぎる……新世界も入ってるし……」

……まずい、航海術……全然鍛えてないや……ははは……まあ、普通にグラウンドラインを航海するのは可能だけど、ナミみたいに気候とか全然読めないからね。行き当たりばったりだからね

覚悟するしかない……とさめざめ泣いてから気持ちを切り替えて、何が必要なのかをリスト化して本日は就寝した。

「あら、アイラ中佐じゃないの」

商業地区で航海に必要な物を集めていると、丁度、ヒナ大佐が通り掛かった。

「ヒナ大佐、任務お疲れ様です」

ビシッと敬礼をして、挨拶をする。それに綺麗な敬礼を返して

「ご苦労様です。…で、アイラ中佐は何をしているのかしら？ヒナ疑問」

「はい、任務の準備をしております」

「そう…察するに結構大変な任務じゃない？」

「お分かりになりますか」

そういって、どんな任務か伝える。まあこれはヒナ大佐の所にいた時と同じことなんだけどね。

それでも、広いぜ。

「そう、私達もそれより狭いけど、結構海域被っているわ。海であつたら宜しくね」

「本当ですか！？此方こそよろしくお願いします」

そういって、お辞儀をしてヒナ大佐と別れた。さてと、水はこれ位でいいとして、今度は保存食料か…

そういえば、青キジさんは確かチャリーつでグランドラインを横断していたっけ…

食料とかどうしてるんだろ？…いや、これは突っ込むべきではないな。

さてと、保存食料買ったら、今度は船の修理材料か…いや、待てよ。私の船って確か特殊だったよな。

素人が船を修理するのはあまりにも無謀か。…まあいいや。船に指一本触れさせなければいいし。

砲弾なんか全部叩き落せば良いし…まあ定期的に町の船大工に見せてメンテすればいいかな。

とすると、衣食住は揃ったわけだ。明日が出発の日だから…丁度良いな。

後は、行きつけの店で大量にカフェオレを当日に買い漁ってから、出航しよう。

最初の行き先は…むう、何処にしよう。………ダーツで決めよう。

自宅へ戻り、薄い紙の下に海図を敷いて、複写する。精密じゃなくて大体の形でぱっと作って壁に固定する。

さて、記念すべき最初の島は…ここだあ…!!

ひょいっとダーツを投げてサクッと刺さった場所は…

「むむ、シャボンディ諸島か。そういえばあんまり見て回ったこと無いなあ」

まあいつかと思い。夜の鍛錬をするべく準備を始めるのであった。

仕事（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、指摘をお願い致します。

……この回、難産でした。

ここ、シャボンディ諸島は巨大な79本のマングローブが連なり成り立っている島である。

正確に言うと、島ではないのだ。何故なら、ログが溜まっていかなことから。しかし、このシャボンディ諸島は非常に重要な島といえよう。

そう、グランドラインから新世界への玄関口となっており、グランドラインに入る際に7つに分かれた進路の終着点がこのシャボンディ諸島となる。故に、海賊が多く存在しており、レベルも非常に高い。

…まあ億超えじゃないと、新世界での活躍は非常に困難だけど。

私も新世界に入る前に一度だけ立ち寄ったことがある。つか、ここを通らないと新世界へ入る際の手形が発行できないからな。まあ海賊はここで魚人島へ向かうため、準備をして、出発するわけだ。

だから、ここの警備は結構厳しい。まあそれでも海軍より、ここに来た海賊のほうがレベルが高い事が多々あるので、ここの警備の殉職率は…まあ高いのが現状だ。

そうして、厄介なのがまだある。…そう

「天竜人…か……」

「申し訳ありません！！」

遠くのほうで、ここまで聞こえるくらいの声で必死に子供を守る、子供の両親。

何が起こったのかは…まあ想像するだけ無駄と言うものか。どうせ意味分らないことで処刑なのだろう。…そう、ここが勤務地になった暁には、天竜人の護衛も行わなければならない。

胸糞悪い話だが、海軍も所詮政府の駒に過ぎない。だから、逆らえ

ないのだ。

軽率な行動が、どういった影響を及ぼすか分からないし、もしかしたら、フーシャ村の皆や、ビビにまで手が及ぶかもしれないのだ。それだけは何としても避けたい。

そう、だからここは見過ごすことが正解なのだ…

「そこをどけ！その子供は余の前を無断で通つたのだえ！ここで処断してくれるえ！」

「お願いします！この子だけは！この子だけは！」

そう、見過ごすのが正解なのだ。運が悪かった…そうだけの話である。

「ええい！お前ら全員処刑だえ！！死ね！」

銃を構えて指に力を込める。その風景がやけに遅く感じた。そう、運が悪かった。それだけ…

本当に？

「天竜人様に何をしているのだ!!」

気付いたら私は駆けていて、ひれ伏している親子を死なないように吹き飛ばした。

「誰だえ! 邪魔をするのか!」

「申し訳ありません。ですが、天竜人様の御身に、下賤な者の血を目に入れるのは、毒です」

まあ、こんな事に対応できるわけないと思うけどね。やっちゃったもんは仕方が無いよね。

「そ、そうかえ。そうだな! うひよひよひよ! 余みたいに高貴なものか!」

ふう…何とか大丈夫になったか…と思っていたら

「むむ…お前…」

私の顔を見て何か品定めするような目つきで此方を見てくる…こいつあ、まずいかも。

いつちやなんだが、容姿は結構整っていると自負できるし、将来が楽しみでもあるような顔だ。

…まあ、覚悟したことだ。受け入れるさ…めちゃくちや逃げたいけど…

「まったく、余の前によくその不細工顔を見せてくれたえ！まあ余は寛大だえ。今日は見逃してやろう」

そういつて、高笑いしながら護衛と

「ほら！いくえ！」

首輪についている紐を引っ張り、頭を下げていた奴隷が顔を上げる。
………わぁーびじんだぁー……あはははは………はぁ、美的センスが
世間一般と違っていて本当に良かった

ふう……とため息を吐いて、吹き飛ばしてしまった家族の所へ

「申し訳ありません。大丈夫ですか？」

「げほ！……ええ、大丈夫です。ありがとうございます」

そういつて頭を下げる、子供の父親。

「いえ、此方こそ手荒な前をしましてしまい申し訳ありません」

「いえいえ、こうやって家族みんなが生きているのです。感謝こそすれ、怒りなぞ毛頭ありません」

「それでも…謝罪させてください」

そう、確かに結果的には命は助かった…しかし、私の気持ちが収まらない。

…自己満足なのだろう。でも、それでも。

「申し訳ありませんでした」

私はその家族が見えなくなるまで頭を下げ続けた。

そう、海軍は海賊を取り締まるだけが仕事ではない。綺麗な側面もあれば、当然汚い側面もある。

この、シャボンディ諸島では、人間売買も成立している。政府は黙認しており、表向きには職業安定所である。政府が黙認している

のであれば、海軍もそれに従うまで。

…これがまかり通っているのは天竜人がそれを必要としているからだ。娯楽のためだけに。

胸糞悪い話だが、それを守っている自分にも反吐がでる。そうやって、自己嫌悪に陥っていると

「ははは！これで魚人島へ出発できる！が、その前に金と、食料、女を根こそぎ奪っていけ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

目の前で暴れている海賊がいる。…あいつと天竜人、そして海軍。何が違うのだろうか。

同じ殺人者でましてや海軍は、その犯罪者…天竜人も守ることも仕事である。

まあ流石の海賊も天竜人には手を出さない。何故なら手を出した瞬間に海軍本部大将が直々に殺しに行くからだ。それは既に周知の事実。

…まあだからと言って、今、ここで、私の目の前で、この島の秩序が乱れている。

……そうだ。関係ない。天竜人を守るとか、平和のために人を殺すとか…関係ない。

今、ここで、私の目の前で、助けを欲している人がいる。困っている人がいる。

そういつた、人たを助けるのに…理由なんて、いるのか？否。不要だ。

私は私のまま、なるべく多くの人を助ける。それだけだ。助けるのに、守るのに殺人が必要であれば

殺人者となる。それで平和が保たれば、満足だ。そう、只の自己満足だ。

「っは…天国へは行けねえだろうな」

そう呟いて海賊の前に踊りでる。

「ストップ！海軍だ！大人しく捕まれば手荒な真似はしない！」

「海軍だあ…？ははは！おいおい、これは可愛らしい嬢ちゃんだ。おい、俺の女にならねえか？」

「…はははは！」

本当に、海賊は馬鹿が多い。でも、一部の海賊はいいやつもいる。だけど、殆どがこいつらみたいなのだ。というより、シャンクスやルフィみたいなのが全ての海賊に当てはまるのなら…海軍はここまで大きくならなかったはずだ。

「お断りします。抵抗するとみなし、攻撃を開始いたします」

「っは！嬢ちゃんが、まあいい！おい！野郎共！なるべく死なないように捕まえる！…後で楽しい宴をしようじゃないか！」

「…おおー！」

そうか、そうか…まあいい。こつちも気持ち的に疲れているのだ。さっさと終わらせよう。

「【ブルースターター】」

「!?!?気をつける!能力者だ!」

漫画では悪魔の実ばんぼん出ていたけど…実際は能力者なんて殆ど見かけない。

メリットデメリットで考えると、売ってお金にしたほうがいい。何故なら食べたとしても、確実に強くなるか分からないからだ。それに最大の弱点が生まれてしまう。そう、海である。

海賊にとって、相当致命的である。よって、進んで食べる輩はあまり居ない。まあ見つけた悪魔の実が確実に自身の戦力になるという確証を得られればそれに当てはまらないだろうけど。

「誰一人として逃がしません」

そう呟いて、音の壁を突き破る寸前まで加速する。

「がぁ!?!」

「は、はやい!?!」

まあこの距離で、音速に近い速度で移動するのだ…普通であれば認識できない。

それに、まだブルースターだ。最終的にはこの100倍の速さを出すことが可能である。

まあ、私の体が耐えられるかだけど…覇気で体を保護すれば、いけるかもしれない。

しかし、なるべくそんな敵には遭いたくない。そこまでして漸く勝てる相手とか…大将クラスじゃねえか

そう考え事をしながら戦闘していると、気付いたら、船長一人しか

立っていないではないか。

「てめえ…もしや【紫電】か?!?!?」

「ご名答。運が悪かったね」

「…しょ…ちくしょー!!!」

常人より遥かに早く、私に向かってくる。しかし、遅い。瞬時に懐に潜り込む。

「?!?!?」

遅い。遅すぎる。気付くのに0.5秒も掛かっている。それでは私を出し抜くにはあまりにも遅すぎる。

息つく暇も与えず、蹴り上げる。空中に上がった巨体を更に空中へ。

「ふはあ!」

体が一時停止する程度の電気を絶え間なく与え続け、エアリアルコンボを決める。

月歩で相手の上に行き、磁場を利用して、一気に0-1000の速度で鉄塊を掛けた掌底を溝に決める。

「ふはあ!」

凄まじい勢いで地面に激突した所で、体を分断しないように力加減に気をつけながら、最後に踵落とし。

地面が抉れて、K.O。あれだ、某忍者のあのお姫様より抉れている。

…死んだか?

そうおもって、胸に手を当てるとわずかに聞こえる鼓動。死んでないならよし。

そういつて、シャボンディ諸島の海軍支部へ連絡し、捕縛をお願いした。駆けつける間は一応見張りをして、時間を潰した。

そう、何時もどおりだ。

「ご苦労であった」

「は！では失礼致します」

そういつて、デンデン虫を切った。本日の事を報告書に纏め、報告を実施。

相手は、トータルバウンディ8000万の海賊で、まあちまちま賞金の額を上げてきたらしい。

なので、それほど強い海賊ではないが、油断なら無い相手である。と言った評価だった。

こいつらが、ここまでの賞金になる前にはどれほどの人が犠牲になったのだろう。

…まあ考えても仕方が無い。自分もまだまだなあ…ビビったらどうするのかな。

いや、私は私の信じる道を往こう。

「ぶはあー…上手い！」

この島に来て、あまり気持ちのいい出来事が無かったので、こういう日は酒でも飲んで酔うのが一番いい。そう思い、近くの酒場でかなり弱いカクテルをがぶ飲みしているわけだが…

素晴らしい…まさかこの世界でもカルーアミルクに出会えるとは…まあ名称は違っただけ。

それでも、とんだ掘り出し物だ。まさに奇跡！！これで、昼、夜のお供が揃ったってわけだ。

まさに鉄壁！これでかつる！ふははは！私の財布が空っぽになるまで飲み続けるぞ！！

あ、おつまみも！そう！卵焼きね！

何故酒を飲めるのか……ぶっちゃけ、権力はこういうときに使うものだと思うのですよ。

「おい！きいてる！？」

「きいているよ…」

少女が酒を飲み始めて、数十分が経った頃、一人の男が入店した。一瞬、海軍の服を着ている少女の方に目を向けるが、直ぐに視線を外し、カウンターの席に座る。

少女も、ダンディだなあ…と、思いながらも、出された卵焼きに舌鼓を打って酒を飲んでいた。

「いらつしやい」

「ああ、何時ものを頼む」

はい、と返事をし女主人が酒の用意をする。そうして出された酒をちびちびと飲んでいると、

「ねえおじさん。せいぎってなんらるね」

酔ったせいかわ、上手く呂律が回らない舌で、そう問いかけてきた。

「正義…か」

男は思う。自身は恐らく一般的に指す正義とは真逆の道を行ってきた。今でこそ暴れてはいないが、当時はでかく暴れていたもんだと、ふと昔の光景が蘇る。考え事していると、少女が聞いている！？と怒鳴ってきたので、軽くあしらうように返事をし、

「正義何ぞ、酷く曖昧な物だ。何が正義で何が悪かなんて、考えるだけでも無駄つてものだ」

「なあにい！おい！わたしはそれでなやんでいるのに！かんがえらられれもむらつらつれ〜！！」

何か、少女の逆鱗に触れてしまったのか分からないが、突然憤慨した。

男は、厄介なのに絡まれたな…と思い、女主人に助けの目線を送るが、華麗にスルー

はあ、とため息を付き

「ああ、考えるだけ無駄だ。何故なら正義とは人それぞれだからだ」

「ひとそれぞれ？」

「そうだ。人を殺すのが悪なのか？助けるのが正義なのか？どう思う」

「…」

「ふ、答えられないと言うことは、それなりの事をしてきたと言うことか。まあ悩む事はいい事だ。大いに悩み、そして見つける。自分だけの答えを。誰にも曲げることが出来ない…信念を」

そうして、男も当時の事を振り返る。様々な大冒険があった。その中で色々な出会いがあった。

別れがあった。挫けそうになることも多々あった。でも、仲間とそして自分だけの信念があったからこそ、今の自分がいるのだ。懐かしいな…そう、思いふと、横を見ると

「か…すぴー…」

寝ている少女の姿が目映った。

「…ふ」

こいつは…と思わないことは無かったが、昔の事を思い出させてくれた隣の少女に鼻で笑いながらも、感謝の気持ちを抱く。

「ふ〜今日も酒が上手い」

これから何かが起こりそうだ。そんな予感…いや、期待が灯った夜であった

表裏（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願い致します。

… 今回の回は結構悩みました。天竜人に危害を加えて海賊になるか。それとも奴隷になって、ダーク系にするか。

ただ、この小説のコンセプト「最強物」を行くのであれば海賊かな… と思いましたが… 読んで頂いたとおり、ご都合主義全開です。申し訳ありませんでした。

インペルダウン

「お客さん、起きて。閉店時間ですよ」

そういつて肩を揺さぶられて、徐々に覚醒する。そういえば、酒を飲みたくて入店して…

カルーアミルクみたいなカクテルを発見した事に感動し、がぶのみして…

そう、ダンディなおっさんに…

「絡み酒か…」

そつだ。絡んでいた。間違いない。うわー…海軍が何やってんだよーっていつ以前の問題だよね。

まずいよねこれ、ばれたらまずいよね。

そんな表情を察してか察していないかは定かではないが、

「まあ、色々あるわよ」

そういつて、ウィンクしてきた。…さすがです。

さて、閉店時間なんだから、お金払って出ないとなあ…と思い、金を払おうとしたが…

「御代は、あなたが絡んでいたレイ…お客様から頂いたよ」

…マジですか。おいおい、こればれたらまずくね？まずいよね。

まあ、まて慌てるな。まだばれていないはずだ。何故なら今は明朝

4時位

うつすらと日差しが差し込んでいる。

しかもだ…名前を覚えていない！そう！このまま今日、ここを発てば何も問題が無いはずだ！

「そうですか…では、次にお目見えになられたら、感謝を伝えて頂けませんか？」

「わかったわ」

ありがとうございます御座います。…と…店を出て行く。ふう…朝の空気は上手い。

このまま、朝訓練…と言いたい所だけど、それは船の上でいいや。

…一刻も早くこの島を発たねばならぬ。

そう意気込んで、そそくさと、借りた宿から荷物を受け取り、船に乗船する。

出発する前に、船の物資が足りていることを念のため確認し、出航する。

「ふうはは〜！これで大丈夫だ！」

本当はあと一日いる予定だったけど…まあ良いよね。さて、今後のスケジュールをリスケするか。

そういつて、充電が十分になったことを確認して、リスケする作業に移るのであった。

約半年もの航海の間に捕まえた海賊達のトータルバウンデイが2億を超えたので一旦、海軍本部へ帰還しようとした。そんな中、ジリジリとデンデン虫がなり始めた。

「はい、こちら海軍本部中佐アイラです」

「アイラ中佐！緊急事態です！」

「…何が起こりましたか？」

インペルダウンにいる、シリユウ看守長が囚人をあまりにも殺しすぎたらしい。

それを見かねて、監獄へ入れようと思ったのだが…抵抗にあっただらしい。

しかも、マゼラン署長と互角の腕前をもつ人である。更に、マゼラン署長はトイレに入ってそこを襲われたとか…

…おい！マゼラン署長！緊急事態だよ！なあにやってんの！と、思ったが…過ぎたことに何を言ってもしょうがない。まあいいや、確かに全力で行けば、数時間で到着する距離にある。

昨日の報告で確かにこの近くの海域っていったけどさあ…仕方が無いか。

まあ、幸いなことに、マゼラン署長は寸での所で回避し、大事には至っておらず、外に出ないように時間稼ぎなら出来るらしい。他の海軍も向かっており、もし、脱獄囚がいた場合は…殺しても問題ないとのことだ。

…全く、タイミングが悪いよ。しかし、やるしかない。

そう思い、全速力で船を進め、インペルダウンへ急ぐのであった。

怒声や叫び声が聞こえる中、漸くLEVEL4について、マゼラン署長と接触する。

「海軍本部中佐、アイラです」

「マゼランだ。手短に言う。シリユウ看守長の捕縛に力を貸してくれないか」

「了解いたしました」

マゼラン署長の部屋に着いたのはいいが…まあ結構重症だと思う。命に別状はないと思うけど…

でも、確かドクドクの実の能力者だね。…いや、それを含めてマゼラン署長と同レベルなのか。

「シリユウは巨体に似合わず、高速の剣技を持つ。気をつけてくれ」
「了解いたしました…速度勝負なら、負けませんよ」

そういつて、LEVEL4から、LEVEL5へ向かって移動する。
…暑いので覇気を纏いながらである。

しかし、ここは惨い。この暑さの中で牢獄とは…人の法とは本当に恐ろしいものだ。

漸くLEVEL5に着き、極寒の監獄内の通路を歩いていると…

「シリユウ看守長！おやめください！」

「おいおい…カスを何人殺しても、誰も困まんねえよ…」

そういつて、刀を抜こうとするシリユウ看守長を発見した。
ここからの距離は大体…まあ300メートル…しかない。

「【ブルージェット】」

私は一気に電気を纏い、剃で近づき

「き」《ガキン！》む？」

「させませんよ」

海兵が斬られる寸前に鉄塊を左手に展開し、攻撃を防ぐ。

「これはこれは…お嬢ちゃんがこんな場所に何のようですか？」

そういつて、刀を引くシリユウ看守長…後ろには大量の囚人の死体。このクラスだと、素手でも結構強い囚人なんだけどなあ…と思うが、今はそれどころじゃない。

「シリユウ看守長。マゼラン監獄署長の命令です。あなたを拘束し、インペルダウンへ収容します」

「ほう、やれるものならやってみろ、餓鬼が」

瞬間神速の剣撃が私に向かって襲い掛かってきた。確かに早い。が、ボルサリーノ大将より…

「遅い」

全て往なし、回避し、掌底を叩きつける。

「!?!…ほう、面白い」

難なく防がれるが…私は海軍本部でも上位に位置する馬鹿力である。流石にたたらを踏んでいる。その瞬間を逃さず

「紫電・嵐脚」

高電圧を纏った、鎌鼬を容赦なく全身へ叩きつける。が、そこはシリユウ看守長、平然と鎌鼬を叩ききっているではないか。

「そのような、電気で俺を止められると思うなよ」

やせ我慢乙。と、いいたいところだけど…確かに、効いてなさそう…

「餓鬼にしては良くやったが…お痛が過ぎたな」

「まずい！」

「足が…動かん!？」

ふふふ…くくく…

「あつはははは!」

「貴様!何をした!？」

何をしたかだと…くく…

「それを教える分けないだろ？」

「きつさまあ!」

何をしたか…単純明快。私はビリビリの能力者で電気を操る。まあここまで言えば分かると思うが…紫電・嵐脚は只の布石に過ぎない。

鎌鼬に纏った電気が触れた時点でアウト。その電気は既に私の支配下にある。

しかし、それだけだと、あそこまで完全に動けなく出来ない…せいぜいが足止めレベルだ。

だが、来る前から、散布して置いた微弱の電子!何故300M先の相手の詳細な情報が読み取れたか?

それは、既にトラップを張り巡らせていたに過ぎない。そうして、呼吸するたびに、自身の体内に微弱な電子が滞留する。その電子と電気を併せてこのトラップが完成する。体内の電気信号を違和感なく把握し、紫電・鎌鼬で一時期、電気信号を混乱させた際に、脚に電気命令が届かないように細工するだけ。

「あつはははは！まあ…感謝してよね、心臓も……止められるよ？」

「……おっかねえ嬢ちゃんだ」

前世からの知識で、体は電気信号で動いているとい事を知っていて動物で実験し実用化となったのだ。

しかし、これが一筋縄でいかなくて、まあ取得にはかなり時間が掛かったけど…もう少し早く止めたいな

「此方、アイラ中佐です。マゼラン署長。シリユウ看守長を捕縛しました」

「何！？…状態は」

「無傷です」

「……そつか、ご苦労であった」

報告を実施し通話を切る。他の海兵が動かないように縛り、マゼラン署長を待つ。

「…本当に無傷とは…どんな手品を使ったのかね？」

「企業秘密です」

「そうか…シリユウ……連れて行け!!」

マゼラン署長が顔を出し、部下にそう命令する。

は！っと、海兵が敬礼を返し、シリユウを連れて行く。彼はもう、生きて娑婆に出ることは無いだろう。

しかし…

「この惨状…どうします？」

そう、この惨状はまさに血の海である。生きている人間はおらず、至る所に、人の各部が転がっているのだ…正直、あまりここに居たくない。

「ここからは我らの仕事だ、ご助力感謝する。アイラ中佐」

「は！それでは本官は帰還いたします」

「うむ、ご苦勞であった」

まあ確かに、私に与えられた任務は「シリユウ看守長の捕縛」だけだ。後は突っ込むべきではないのだろう。仕事は、割り振られたとこしかしたくない。というより、割り振られた人間がすべきなのである。

本当に、助けて欲しかったら、手伝ってという意味表示があるはずだ。

では失礼いたします。と挨拶を行いその場から離れた。

s i d e マゼラン

「なんといい力だ…」

確かに、トイレに籠っていたのは事実である。だからこそ、おれにその情報が来るまで時間が掛かった。

その些細なことが原因でいきなりトイレで襲われたが、何とか致命傷は負わずにすんだ。しかし、この傷となると…対抗するのは難しい。

囚人が脱獄するわけではない、ただ…この問題を起こしているのが政府側の人間となると、それはそれで問題だ。これは内々で処理せねばならない。民衆を不安にさせるわけにはいかん。

まずは、本部に現状を報告し、救援要請。シリユウに対抗するとなると、このインペルダウンでシリユウに対抗できる人物は…おれしかいない。ここの監獄の囚人ならあるいは…と考えたが、やつらに借りを作ることだけはしてはならん。

救援要請をしたら、この海域の近くにあの【紫電】がいるらしい。

…しかし、彼女はまだ中佐である。噂は耳に入っているが、それでも…年端も行かない少女に縋り付くのは、面子の…いや、今はそれ

所じゃない。実力は大将に並ぶと聞く。おれはお願いしますと伝え、彼女をまつ。

入ってきたのは、まだ150cmも満たない小さな女の子だ。将来は俺好みの美人になりそうだが…ここには似つかわしくない。海軍、と言うよりも、何処かの劇団の子役として出てきたほうがよっぽど似合う。

それ位の少女である。この少女の何処にそんな力が…とっていたが…

覇気を完全にコントロールしている。それもかなり強力な。成る程と思う。

このインペルダウンのLEVEL4の温度をもとめせずに歩く少女を見ると、頼もしく感じるが…このような少女に戦わせるのはやはり、心苦しい。だが、手段は選んでられないのだ。

さて、彼女に万が一があつたらいけない。おれの仕事の場所で部署が違う女の子に働かせて、怪我をさせたとなると…おれはおれを許せなくなる。なんのための監獄長だ。そう思い、脚に力を込めた所で、デンデン虫が鳴った。

そのデンデン虫から、無傷でシリユウを捕らえたと報告が、直接彼女から上がった。

…まだ彼女が出てから一時間も経っておらんぞ…どんな方法を使つたのか、気になるところだが…

いまはそれ所じゃない。再び脚に力を入れて、シリユウが拘束されているエリア…LEVEL5に向かった。

結論から言おう、彼女は…アイラ中佐は化け物だ。
このおれのドクドクの実をもってしてもシリユウと互角である。し
かし、そのシリユウをもってしても、
例え油断したとしても…この結果はあり得ない。

だが、目の前で双方無傷である。そうして、彼女には任務ご苦労と
いって完了通知を伝えた。

…何があつたのか、本人は教えてくれなかったが…

「シリユウ」

「……なんだ」

「何があつた」

戦つた本人にそう問いかけていた。気になった。彼女がどうやって
シリユウを捕らえたか。

「さあな」

「分からののか？」

「…ああ、分かることと言えば…おれはもう、やつとはやりあいた
くねえな」

「……………」

ガシャン！

… 本当は何者なんだ。アイラ中佐は…

インペルダウン（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願い致します。

シリユウの強さに関しては、不明点が多すぎるゆえになんともいえません。

もしかしたら、今後凄い技とか使ってくるかもしれないが。今回は油断していたという事を加味すればこれ位かな…と判断しました。

約束

インペルダウンの事件は内々で処理された。当然である。正義の名の下に集結した兵が、あのような行為をってしまった。それは、海軍の信用にも関わる問題である。よって、内々的に処理されたのである。

その一件が終わり、私は任務完了の旨を伝える為にセンゴク元帥の部屋に訪れたのだが…

「本日を持って、海軍本部大佐に任命する」

…わお。びっくりですよ。まさか大佐になるとは思わなかったよ。もう少し中佐なのかなあ…と置いていたけど…まあこれで部隊の指揮権が手に入ったわけか…部隊、持ってないけどね！
まあ、これで何が変わるのか…といわれると、ぶっちゃけあんまり変わらない。

指揮権等々が付与されるだけで、私は…ワンマンで動いているのであまり意味を成さない。

いや、海賊を拿捕した際に、支部を動かせる権力はあるよな…確か。まあ拿捕したのなら、直ぐに連絡を入れて身柄を確保していただくから、さほど変わらないけどね。

ビビにも手紙で送ったけど…最近、やけに手紙の返事が遅い。なんかあったっけかなあ…
あ…くそ。思い出せん。確か、何とかワークスに忍び込むんだけど…その発端ってなんだったけかな。
…ルフィ兄。ビビを傷つけたらその100倍にしてプレゼントしてやるよ。…嘘ですけど。

ヒナ大佐にも挨拶がてらに昇進しましたと伝えたら…

「もう大佐なんて…ヒナ嫉妬」

と言われたけど、まあ冗談らしい。…目は冗談ではなかったけどね。しかし、階級が一緒だからって、目上の先輩で、尊敬できる方だ。敬語は忘れないさ。

祝いに、飲みに行くことになって久しぶりに楽しい一日を過ごせたと思う。

そうして、約半年が経過した。

私も、もう13歳になり、前世では中学1年生だ。ここから二次成長が始まり、より女性らしくなる。

…まあこの話題を出したから察すると思うけど…ついに来てしまったのだ…あれが。

最初は兎に角驚いた。直ぐにヒナ大佐にすがり付いて、

「わだじ、じんじゃうよ〜！」

と泣き叫んでしまったのは、黒歴史としてインペルダウンLEVE L5に封印したい。

ヒナ大佐の微笑ましい表情が何時でもハイライトでリピートされる

…ああ、おうつくしゅう御座います。
でも、その瞳を向けなくてくださいまし…涙が出ちゃうの…だって、
女の子だもん（体は）

そんなわけで、一気に女性として意識が高まってしまったが…この
私が、綺麗な女性意外にせい…ごほん！好意を向ける対象にはな
らない…はず！男性とくつつくとか、あり得ん！まだこの私には…
男としてのちっぽけなプライドが残っているからな！！

…まあそれは置いておいてだ…すっかり、美少女になってしまった
のだ。

もう、完全に美少女。何処をどう見ても美少女だ。まだ可愛い
と言うレベルだけと…

ヒナ大佐みたいにクールビューティーになって、おねえさま…って
持て囃される野望があるのだ。

…そんな事、ありえないけどね…くそ、チェリーは卒業したかつ
たぜ。

さて、現在グランドラインをふらふらと彷徨っているのだが…何時
もの如くペリカンが新聞を配達しに着たので、お金を払い、広げる。
そこに複数の指名手配書が付随されていて、その中に

「スピード海賊団？」

エースの顔写真が載っていて、賞金首になっているではないか。

…今現在、何処に奴がいるのだろう…そう思うと、直ぐに本部の情
報部へ連絡した。

まだグランドラインに入ったばかりだが、多数の海賊を蹴散らし、またそれらを傘下に治めている、今注目されている海賊団らしい。

そうか、エース兄…いや、エース。遂に来たか。何時出発したか分からないが…

「約束、果たさせてもらおうよ」

私の呟きは風に乗って…消えた。

まずは、エースの所在の調査…もとい、足取りを掴まなくてはいけない。

そういつて、足取りを追うが…物凄い進軍速度で、グランドラインを航海中らしい。

はやいっていうレベルじゃない。しかし、グランドラインは、7つの航路しかなく、行く先は…既に決まっている。そう

「次は冬島か…」

エース…そこで約束を果たそう。これが私の選んだ道。エースが選んだ道。後悔など…無い。

そうして、滞在すること1週間。前の島のログが溜まり、出航するタイミングを考えると、そろそろこの島に着いてもおかしくは無い。

私も船から下りて、何か戦いやすい地形を探す。目視よりより詳細が把握できる、電子を散布し、満遍なく調査すると…

「およ?」

なんか、でっかい船と人が一杯集まっている。…誰かは分からないけど、先客がいるな。

…まあいいや。どうせ何も無い島だ。ログがたまったら直ぐに何処かへいくさ。

そう思つて、丁度いい場所を吟味するのであった。

その翌日…

「来たか…エース」

望遠鏡を掲げて、スペード海賊団のロゴを見る。手配書と同じだ。あそこに、エースがいる。最後にあったのは何時だっけかな。…確か、4年前かな。

「ふふ…」

知らずに笑みが零れる。あのエースがどんな風に成長しているのだろうか。

楽しみで仕方が無い。…この時点で悪魔の実を食べてないと…エース。君は敗北を喫するだろう。

しかし、私の覇気の前ではロギア系の能力をもつてしても…ダメーシが通らないなんてことはあり得ない。

シリユウの時に使った技は使わない。確かにあれはあれでありだが

…正々堂々と勝負をしよう。
何故か、一人でこの島に入っていくエースを捉えて、私は歩を進める。

この時、電子を散布していれば、まだあの集団がいた事に気付いたのだが…

エースを相手にすることで頭が一杯で気付かなかったのが、最大のミス。その事を後で実感させられる。
まあ、内心ではほっとしたけどね。

「久しぶりだね…エース」
「あ、アイラ…」

久しぶりに会ったエースは…このやろう！イケメンになりやがって！！

私だって、前世で本気出せば…そう！足元にも及ばないほどのイケ

メンだったんだぜ！
…いってて虚しくなるぜ。

「スピード海賊団船長、ポートガス・D・エース。貴方の首に懸賞金が掛かっています」

「へっ…俺もでかくなつたもんだ」

…まあエースなら、無駄に町の人に迷惑をかけずにここまでのし上がってきたのだろう。

だが…まだまだ世界を知らない。君はここで私に討たれるのだ。

「出る杭はさつさと打つ…エース。貴方は危険なのだよ」

「へえ…アイラ。ずいぶんと強くなつたじゃないか…【紫電】だっけ？」

ぼう！

エースの体が炎になる。なるほど既に能力者になっていたか…

「ロギア系…メラメラの実の能力者ですか」

「は…！…ご名答だ、アイラ。お前は、ロギア系を目の前にして、どう戦う？」

どう戦うかだつて？…やはり、知らない。まだまだ世界は広いと言っことを。

「どう戦うかは…実践したほうが早いよね」

ブルースターターを起動して、全身に電気を纏う。身体能力も強化して何時でも飛び出せる準備が出来た

「…あの時の約束、覚えているか？」

「勿論」

「なら、問答無しだ!!」

そういつて、炎になり一気に此方に接近し

「火拳!!」

巨大な火柱が私に向かって一直線に射出される。しかし、そんなもの予想済みである。
即座に射程外へ行き、剃で一気に接近し

「紫電・嵐脚」

1000万ボルトを携えた鎌鼬を無数にエースにお見舞いする。

「は!ロギア系にそんな攻撃、効くかよ!」

…そうだとも、効かないに決まっている。なんたって、霸気を纏っていないからな。

「知っているよ」

「どうするアイラ!さっきの言葉は威勢だけか!？」

「流石だね、エース…じゃあテンション上げていきますか!」

一気に霸気を纏い、急接近する。エースも霸王色の霸気を纏って、威圧感倍増。

「はあ!」

「!?!」

私の拳が、エースに届く。しかし、何かを悟ったのか咄嗟に防御してきたが…私の力は既にガード中将レベルなのだ…その程度の踏ん張りじゃ…

「うお!? なんつう馬鹿力!」

流石に、防御仕切れなかったか、しかし息つく暇も与えんぞ!

「後ろがから空きだよ」

一瞬で背後に回り

「千鳥!?!」

思いっきり心臓を取りに行くが、上空へ回避される。しかし、上空では逃げ場は無い…
月歩で一気に接近して決めようと思ったが…

ぞく

第六感が警告を出し、それに従い即座に退避する瞬間に

「火柱!」

天にまで届こうとする、大きな火柱が私がほんの0.1秒位前にいた場所を焼き尽くす。

…おいおい、ロギア系の威力は流石だなあ…焼け野原だよ。一気に。

「さすが、アイラだぜ…今のを避けるか」

「生憎、もつと早い人を相手にしてきたからね…ギアを上げないと、直ぐに倒れちゃうよ?」

「言ったな…アイラ!!」

「ごう!」

そう擬音が聞こえるほどに、霸王色の覇気を纏う…大気がビリビリと震えている。

しかし、私も負けじと武装色と見聞色の覇気を纏い対抗する。

「本当に…ルフィよりずっとつええよ。…いや、今まで相手にしてきた中で最強だな」

「どうも…でもここでエースの物語は終わりだよ」

「ぬかせ」

そういつて、また私達は激突する。大気が振るえ、地は焦土と化す。

「火銃!!」

「指電!!」

エースが能力を使うのなら悉く無効化して見せよう。

「蛍火!!」

「雷剣!!」

無数の炎は電気の剣で悉く切り裂いて見せよう。

「クソ！火拳！！」

「雷砲！」

その拳も…電子レーザーで悉く打ち抜いて見せよう。

「神火 不知火！！」

「二頭雷槍！」

突き出る炎の槍も雷の槍で悉く相殺して見せよう。

「くっそああ！」

「遅い」

一瞬で懐に潜り込み、磁場の反発を利用して初速から音速と同レベルの覇気を纏った蹴りをみぞに叩き込む。

「ふー！」

胃液を撒き散らしながら、上空に打ち上げる。この程度で、エースが降参するわけが無い。倒れるわけが無い。更に磁場と月歩を利用して一気にエースの上空へ移動し

「紫電・六王銃！」

1000万ボルトを纏った、六王銃を叩き込む、海軍内で最速の六王銃と謳われる程の速度だ。

決まった！そう、一瞬だけ油断をってしまった隙に

「火拳！！！！」

巨大な炎の拳が私の体を焼き、殴られたような重い衝撃が体を襲う。くそ！油断した！一瞬でも勝ったと思っってしまったが…やはりというか、さすがである。

肉を切らせて骨を絶つか…だが、その骨はエースが思っていた以上に頑丈だったけどぬ。

流石にやけどを負ってしまったが、戦闘には問題なし。一方エースはまともに六王銃を喰らったし、体内に私の電気を直接叩き込んだのだ、もう起き上がれないだろう。

「がは、ごほ！…ま、ただ…」

そう確信していたが…ゆっくりと立つエースに畏敬の念を覚える。あそこまでなつて立つ信念。私にはそれが無い。だからと言って、ここで手を抜くのはエースも本望ではないだろう。

「【ブルージェット】」

纏っている電気を鳴かせ、青に変化させる。1億ボルトだ。

「は…はは、アイラ…つええじゃねえか」

「エース、降参してくれない？」

「…アイラ…あまり俺をなめるなよ！！」

炎帝！！

私の目の前に、小さな太陽を携えたエースが、不適に笑って此方を見ている。

此方も不適に笑い返して、コインを一枚懐から取り出す。

「アイラ、こいつを破ったら約束を守ろう」

「じゃあ…破らせてもらおうかな」

「は！ぬかせ」

ピンとコインを上空へ弾く。エースも本能的に分かっているのか、徐々に炎帝を大きくしていく。

コインの周りに青い電気が纏わりつき、溜めた電気を一気に開放する。

レールガン
超電磁砲

小さな太陽と、超極太電子レーザーが大気を震撼させながら…衝突した。

約束（後書き）

誤字、脱字等御座いましたら、指摘をお願いします。

結果

「あああああ！」

「は！」

冬島に二つの巨大なエネルギーが衝突し、大気を震撼させる。始めは拮抗していたが…

「く、ああああ！」

先ほどのダメージを引きずっているのか、エースから苦しそうな声が零れるのを私は逃さなかった。

しかし、これ以上出力を上げるとなると…島を破壊してしまう。よって、この形態で押し切る。…それも時間の問題だろう。

錬度が違う。エースは最近になってようやく能力者になったのだ。…まあこれほどまでに扱うとは思ってもみなかったし、コインは既に溶けている。しかし、そこまで。

私は、4歳の頃からこの能力と付き合ってきたのだ。いくらロギアであろうとも…差が出るのは明確だ。

そうして、とうとう終焉が近づいてきた…

「ぐ！…アイラアアアア嗚呼！！」

意識的なのか、無意識的なのか…壮絶な霸王色の覇気を拡散しながら…私の名を叫ぶ。

天が震撼する。しかし、それで止まる私じゃない。何とか受け流して、

「エースうううう！！」

此方も覇気を全開にして…押し切る！！

そして

とうとう

私の超電磁砲がエースの炎帝を貫いた。

「ほんと…つええ……な」

そう聞こえて、炎帝が霧散し、1億ボルトの極太電子砲がエースを
食い破ろうと襲い掛かる。

そして、エースの体を貫いた

砂埃が立ちこめて、あたりは…悲惨なものだ。草は燃えて、焼け野原になり、地面は抉れている。
そこに一陣の風が吹いて、砂埃が風に乗って消える。

エースは…まだ立っていた。

「うそ…」

1億ボルトを、霸気に乗せた1億ボルトが直撃してなお立つか…エース！

そこで、今度こそ地に伏せさせようと接近して拳底を鉄塊を掛け、繰り出そうとした瞬間に

ガキン！！

海賊がよく持っているサーベルに私の攻撃が防がれた。

「こいつはもう…気を失っている」

「…その声、シャンクス？」

両腕が健在しているシャンクスが、私とエースの間に滑り込んでいた。

距離を一瞬で開けて、何時でも戦闘できるように瞬時に電気を纏う。

「もはや、アイラ嬢ちゃんか？」

「うん…久しぶりだね」

「そうだな……俺を捕まえ……いや、この坊主が本命か」

その問いに、頷いて返す。……まあ気絶しているのであればそれでいい。

これが私の選んだ道、エースが選んだ道。約束の果てである。後悔は無い。

「しつつかし、派手にやってくれたなあ……もうちっと抑えられなかったのか？」

「いや、エース相手だと厳しいよ」

「エース……？この坊主の名前か」

「ええ」

しかし……エースと約束を果たすにはエースが生きていなければならぬ。

……まあこれくらいで死なない……と、おも……あー！もう！

「シャンクス」

「どうした」

「エースを治療していただけませんか？」

一瞬、目を張るシャンクスだが……何かを理解したのか、にたとと屈託の無い笑みを見せて

「当たり前だ、これほどの人材。今ここで消えるには惜しい」

……最後の覇気か……確かにあれは凄かった。私も気絶しそうになったよ。……まあ私もそれに劣らないレベルの覇気を纏ったので大丈夫であったけど。それでも、私は鍛錬と実践の中でようやく手に入れたレベルを無意識に使うとは……末恐ろしいもんがあるね。

「しっかし、あのアイラ嬢ちゃんか……大きくなったな」
「シャンクスさんはお変わりないですね」

この人は相も変わらずイケメンである。…すべての海賊がこういう人であればなあ…

「はは…何時か俺も捕まえるのかい？」

「そうですね…まあ今は捕まえることは無いですよ…実力的にも」
「そうかい…それじゃあ、着いて来い。俺の船に案内するよ」

はい、と返事を返してエースを担いだシャンクスの後を歩く。
今日中には目を覚ますだろうと、そう呟いてシャンクスは歩く。

「おう、シャンクス!…その二人が争いの原因だったのか？」

赤髪海賊団のキャンプ地に来た。顔ぶれはそうそうたるメンバーで、ぶっっちゃけビビッてます。

「っ!…少女の海軍…てことは、今巷で噂になっている…」

「海軍本部大佐、アイラと申します。…恥ずかしながら【紫電】と呼ばれております」

「ほっほう…アイラの嬢ちゃんがねえ…って、アイラア!？」

「はい、お久しぶりですね…ヤソップさん」

そういつて、久しぶりに見た凄腕ガンマンに笑みを送る。いやあ…敵本陣で何やってんだろ？

まてまて、無理だアイラ。このメンバーを抑えようなんて…自惚れるなアイラ。

……まあ、今はそんなことは置いて、久しぶりに会った海賊団と

「おう！なあシャンクス！！」

「ああ、分かっている。おまえらあ！宴だあ！！」

「……おお〜！！」「」「」

そう、今は再開を祝して、飲み明かそうではないか。…エースは船医に任せてあるので、大丈夫。

逆に心配するのは、赤髪海賊団の船医を疑っていることになる。シャンクスも慌てていなかったし、

まあ、心配は無いだろう。

「いやあそれにしても、アイラ嬢ちゃん…まさか本当に海軍にはいるとはなあ……」

「今は大佐なんかをやらせて頂いてますよ」

「はは！俺たちを捕まえるか？」

シャンクスにも言われたけど…

「いやあ…実力的にまだ厳しいかな、と思いますよ」

あつはははは！と酒を飲みながら笑う。だって、シャンクス両腕あるもん！勝てるわけが無い。

こいつらを逮捕するのであったら、この島を海図から無くすほうが100倍は楽である。

…正に一人バスターコールが出来るのだ。…上層部には伝えてないけど。

「ははは！まあ俺もあの闘気を感じてたが…流石に一人だと俺も厳

しいだろうなあ！」

肩をはたいて、笑いながらそんなことを言ってくる。おいおい、そんなレベルじゃないだろ、あんたは。

と思ったが、内心を読んでか、読まないか分からんが

「確かに、アイラ嬢ちゃんを相手にするのは…骨が折れそうだな！」

そう、シャンクスが酒と肉を片手に持ちなんか言ってきた。

「またまたあ…そんな事無いですって」

「いや、アイラ嬢ちゃん…うちの船長は冗談は言うが、友達に対して…嘘はいわねえ」

そう言ってくるのは、ここの副船長、ベン・ベックマンその人である。

ううむ…すげえイケメンだぜ。シャンクスとはまた違ったイケメンだ。嫉妬しているぜ。

「あっははは…どうもです」

「どうだアイラ？俺と腕試しでもやるか？」

そう、シャンクスが言ってくるが…お話にならないだろう。しかし、自分の実力が…四皇相手にどれほど通用するのか…試したくなった。

「あ…殺し無しであれば、一手お相手願いたいです」

「はは！そこなくっちゃな！」

そういつて、サーベルを取り出し広い所…先ほど戦った場所にぞろぞろと移動する。

流石に、エース一人にするわけにはいかずに、その場に何人か残るが、ほぼこちらに来た……私とシャンクスの模擬試合に興味津津らしい。

広い平野が広がっており、先ほどまでの痕跡もまだ生々しく残っている。

「さて、あまりでかいのはやめてくれよ？」

「ええ…島が無くなるのは私としても忍びありませんからね」

「へえ、いうねえ」

そうして、緊張感が高まるなか、戦闘準備に入ろうとしたのだが…

「む」

「お？どうした？」

「いえ、ここから北東の海岸に停泊していたスピード海賊団…エースの海賊団がなにやら動き出したみたいです」

「へえ…それも能力で分かったのか？」

「はい」

そうか、といい、近くの船員を呼んで、経緯と、エースが何処にいるかを伝えて来いと指示をだし。

数人と、副船長ベン・ベックマンが北東に向かって歩き出す。

「さて、これで大丈夫か？」

「はい、島全体には私達とスピード海賊団以外にいないはずですよ」

「そうか…じゃあ始めるか！」

そう、気合を込めて覇気を纏うシャンクス。エースのより洗練で強大だ。私も負けじと覇気を纏って

「【ブースター】」

身体強化を図り、臨戦態勢を整える。…さて、勝負と行きましようか！

結果（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願い致します。

四皇

「【ブルースターター】」

「へえ、それが【紫電】の由来ってわけか」

その言葉に返事を返さず、シャンクスへ一気に剃で接近し、磁場を利用し音速と同等の速度で掌底を放つ。それを見越していたのか、それ以上の速さでガードをされる。しかし、忘れることなかれ…私の力は…

「!!!？」

そこには、胴体を揺るがしてもいないシャンクスがいる。これが四皇！さすがにこの形態じゃ…歯が立たないかな。

「速いな…だが、まだまだだ」

神速の抜刀が来る。この距離から回避は逆に危険と抜刀する前に悟り、鉄塊と武装色の覇気を当たる箇所集中し、やり過ごす。それでも、かすかな切り傷が出来る。…これで本気だったら腕なくなつてたかも…

早々にこの形態に見切りをつけて、次なる形態を展開する

「【ブルージェット】」

纏っていた電気が鳴いて、青へと変わる。1億ボルトまでの開放だしかし、それでも勝てる絵が思い浮かばない。何度頭でシミュレートしても敗北しか浮かんでこない。

唯一は特攻。しかし、ぶつちやけ命何ぞ模擬戦でかけるのは…無しだ。

「ほう」

余裕で構えるシャンクス…せめて彼の本気をこの形態で引き出した。いずれ来る戦いに備えて、エルブスの形態はあまり見せたくない。…いや、ここでエルブス発動してどれほどまでいけるか試すのも…良い経験になるのではないのだろうか…まあそのときのテンションに任せるよ。ほんの少し未来の私よ。

先ほどの10倍の速度、磁場の反発を利用、そして、身体強化で重力を無視した0-100の移動でシャンクスに挑む。

「『速い！』」

音の壁を越えて、空気が弾ける。そこで、ようやくシャンクスが動き出した。

完全に私の動きを見切って、音速を超える袈裟切り。それを胴体をそらして、回避し剣を持つ手に音速を超えたハイキックをかます、それを肘でガードされた瞬間、空気の弾ける音が漸く、私の耳に届いた。

「は！大層な速さだな！」

瞬間私の視界から消えるシャンクス

速い！！

これでも動体視力には自信があったのだが…それを超える速度で私の後ろに回りこんだのを感じ取る。

…そう、既に散布しているのだ。我が電子を。

紙絵で避ける。その際、脇を掠めたが問題ない、海軍の服が少し切れただけである。

布石は打ってあるが、後はどうやって電気を当てるかだが…まあやるしかない。
距離を開けて

ライトニングブレード
「雷剣！」

自身の周りに8本、そして空中に10本雷剣を展開して光速に近い速度を持って叩きつけるが、
全て片手で切られてしまう…が、そこまですぐ！体の電気信号を一気に掌握しようとしたが…

！！！？

気付いたら既にこちらに切りかかってくるシャンクス、咄嗟に転がって避けた。

ズバ！

その擬音が一番正しい。正に地面とその直線数百メートルが一直線に斬られている。

…なるほど…正直ちびりそうでした。

「よく避けたアイラ。今のは…全力だったぞ」

冷や汗が垂れる。何とか周囲の散布した電子をソナー代わりに使って動きを追えているが…

あまりにも速い。さすがに、完全な認識外になる黄猿よりは遅いが、それでも総合的にみると…やはり赤髪のシャンクスのほうが上なのだろうか…まあそこは分からないけど。

只、一ついえることは…エルブスじゃないと勝てない。それだけははっきりした。

そう、今回の模擬戦はこれで十分じゃないか。この形態だと四皇を相手にするのは骨が折れると。

それだけで、十分なはずなのに

「ふふ…」

「??どうした」

「ううん…私って馬鹿だなあと思って」

頭に疑問符を浮かべて此方を伺うシャンクス。周りの赤髪のクルー達も怪訝な顔をする。

「ねえシャンクス」

「どうした？降参か？」

「違うよ…今から私も全力全開をだすよ」

「へえ…これ以上強くなるのか？」

その問いに不敵な笑みを浮かべて答える。そう、意地になっているだけだ。ほんのちよつと、闘争本能に火がついた。それだけなのだ。只それだけを理由に戦うだけ。…愚かだと思う。馬鹿だと思う。でも、試してみたいと思う。実験以外でこの形態になったことは無い。訓練の時もこの形態になったことは無い。誰も知らない。誰も見たことがない。それはそうだ…いかに訓練といえど、上手く扱える気がしなかったのだ。だけど、今なら扱える気がする。

「ねえシャンクス」

「どうした？」

「死なないでね」

「はっ！大層な自信だ…掛かって来い！」

その言葉が聴けただけで僥倖。

「私はビリビリの実を食べた、能力者。∴電気を操る能力者」

「電気は雷も含まれる。その雷で発生する最高の電圧は……」

「【エルプス】」

大気に電気が伝線し、私が立っている地面が電圧に負け、決れる。

「10億ボルト」

「おいおい…とんだ隠し球だなあ……………」

深紅の電気が高鳴る。正に轟音。雷のそれである。

…流石に神の槍は使用グングニルしないが…その速さは、音速なんて生ぬるい。その10倍を持って移動する。

しかし、それだと自身の体が耐え切れない…よって、考えたのが覇気での強化、保護

そう、まさに武装色の覇気がそれに該当する。更に、見聞色でソナーの精度をより精密に。

精密…というレベルじゃない。電子を散布する範囲を小さくすればより密度が増す。

そして、その範囲は須らく。私の領域。たとえ姿が見えなくなったとしても…呼吸一つ手に取るように分かる。見える。聞こえる。相手がどう動くか…音が知らせてくれる。覇気が直接脳に届けてくれる。

そんな領域を展開する

「神の眼」

須らく私からは逃れられない…

「さあ、始めよう。……………【四皇】シャンクス」

「…受けて立つ。海軍本部大佐…【紫電】アイラ」

シャンクスも、大気を割るような覇気を…霸王色の覇気を全身に纏う。しかし、私は一步も引かない。

そして

激突

空間が裂けるような、斬撃を迎え撃つのは

超高密度の高圧電流を纏い、渾身の覇気と鉄塊を灯した、右腕

大気が裂け、電気に誘発された雲から雷鳴が轟く。

既に、上空の雷も自身の支配下。よって、

「ジャッジメント
裁きの矢」

光速を誇る雷の裁き…深紅の雷の矢を、悠々と避ける姿は正に圧巻。

「こんな小雨じゃあ…俺を止められねえよ」

そう聞こえてくる。そんなもの期待していなかったよ。こんなもの…只の眼くらましに過ぎない。

目的は眼くらましを利用した、移動。

音は聞こえてこない。いや、かなり遅れて聞こえてくる。マッハ10の世界。

覇気で全身を強化しないと、戦闘なんて出来やしない。でも、出来る。覇気があるから。極めたから。

だが、そこは四皇。少し遅れながらも反応してくる。

しかし、完全に速度では上回った。が、どうしても負ける部分がある。

リーチ

相手は確かに飛び道具を使っていない。だが、自身の接近戦でないとともに当たってくれない。

それゆえ接近するが、そのリーチを上手く利用されて決定打を与えられない状況。

私が、ソニックムーブを伴った渾身の突きも剣で往なされたりして、後一步及ばない。

いや、最初は防御をして、体に届いていたが、眼が慣れたのか…いまは往なされる。

電気信号の障害をしようとしても、何故か掌握できない。…霸王色の覇気にはまだまだ秘密が隠されているようだ。…いや、違うな…私の電子のコントロールが覇気に触れた途端不可能になる。

なるほど。強い。

ならば、その上を行けば良い。

どじやって？

決まっている。

エースがやったみたい、肉を切らせて骨を絶つ！

ライトニング・ランス・オープン
「電槍展開」

瞬間に、一つ一つが超高圧の電気の槍が空一面に広がる

「大雨警報…てね」

「は！新世界よりひでえ天気だ！」

空一面、真っ赤に彩るその槍を一斉にシャックスへ解き放つ。

「はああああ！！」

気合を込めてシャックスはそれを迎撃するが、それだけにかまけて
いられる時間は…与えない。

マツハ10で接近する。それを神速の突きで迎撃してくる…しかし、
関係ない。

致命傷にならないように、だが、死ぬ一步手前の怪我を覚悟し、そ
のまま少し、右にずれて前進する。

わき腹に灼熱が走る。でも止まらない。目的を果たすまでは。

「神雷・六王銃！！」

わき腹がごっさり斬られたのと同時に、本当の最速の六王銃を放つ。二発、体を捻られて避けられたが、残り四発は完全に決まった。決まった瞬間、六王銃と大量の電槍で体内と体外から超高压電気を浴びせ…

「うそ…」

はは…エースといい、シャンクスといい…こつも立つとは…本当に化け物だ。

「がは！…はあ、効いたぜ、アイラ…」

流石にノーダメージではないが、それでもまだ動けるらしい…私もまだ動ける。これくらい

「どつつてことない」

「は！いいねえ！」

一瞬で距離を開けて、さあ再開だ！という所で

「ストップ！…船長、アイラ。二人とも、もう満足だろ？」

そういつて、副船長…ベン・ベックマンが声を掛けた。

「…だそうですけど」

「はは…アイラはどうだ？」

「うーん…満足です」

「そうか」

そういつて、互いに覇気を霧散させる。あたり一面…エースと戦っ

たときより酷い事になっている。
地面が抉れているのは勿論のこと、クレータが出来たり、山が切られていたり。

「いつつ…」

全身に激しい痛みが走る…恐らくエルブスの反動であろう、筋肉痛の痛みに似ている。…なんか癖になりそうだ。全力全開でも四皇相手に捨て身ならば、ダメージを与えられることが出来るレベルと分かったのだ…まだまだ、強い人はごまんと居るな。それが分かっただけで…十分だ。それにしても

「この島、無人島でよかったですね」

「…ああ。びつくりしたぜ」

とりあえず、白熱しすぎだと、ベックマンから拳骨をお互い頂き、キャンプへ戻る。

…今冷静だけど、わき腹が凄く痛いです。キャンプ地へ戻ると、スレード海賊団と、エースが何か喋っている所に出くわした。

まあ、その前にだ…エースが起きたんだ挨拶くらいしないとな…

「おおう、エース…大丈夫？」

「いや、おめえのそのわき腹が大丈夫かよ」

大丈夫じゃないぜ。痛くて脂汗がすげえ出てくる。泣きたい。筋肉痛はもはや心地良い痛みだ。

「おいおい、シャンクス…暴れてくるのはいいが、もうちっとだな…」

「はいはい、もうしませんよー。とりあえず治療を頼む！」

バーンと、悪びれもせず指示を出すシャンクスに、苦笑いしながら船医は私と、シャンクスの治療を始める。…その手つきは正に名医の如く。まあとりあえず綺麗に縫って貰った。

「これで一ヶ月位で抜糸すれば、綺麗な肌に元通りだよ」

そういつて、治療していただいた。お金を出そうかと思ったが…

「いやいや、ちらつと聞いたんだけど、シャンクスも本気で暴れたらしいじゃないか…それに張り合えるお嬢さんに敬意を表して、サービスだ」

何と…素晴らしい。私がそっちの立場であつたら、セクハラぎりぎりで診察をして、お金を請求している所だよ。そういつて、海軍コートを着たら…

「海軍！？何で赤髪と仲良くしてんだよ！？」

そこにいたスピード海賊団が何か言ってくるが…正直、あんまり喋りたくない。

わき腹ぱっくり行ってるからね？綺麗にいつてるからね？

「ああ、こいつの故郷に一時期停泊しててな、そこで友達になっただよ」

シャンクスが代弁してくれる。なあという視線を投げかけてくるので頷いて答えを返す。

「でも、エースにこんな怪我させたんだろ？」

「だから、それは約束が……」

「エース！……それでも俺たちは心配だったんだ……」

「お前ら……」

全員男なんで……なんか、絵的に……いや、なんでもない。

事情を説明し、今日は休日ですので何もしませんという説得で漸く、警戒心を解いてもらった。

そして、夜。赤髪とスピードそして海軍が、同じ鍋を囲んで宴に心を躍らせる。

「よお、アイラ」

わき腹が痛いので隅っこでちびちび酒を飲んでいたら、エースがひよっこり隣に腰を掛けて来た。

「何？」

「いや…あの時の約束をよ…」

「ああ…逮捕されたい？」

「やだ」

そして笑う。私も逮捕する気なんざ無い。なんたって今日は休日だからな。伊達に一週間ここで過ごしていたわけじゃない。…こなかったらどうしようと思っていたけどね。

そして、聞いた。あの一年間に何があったのかを。

「そう…」

言葉に出来ないとは正にこのこと…まさか船を横切るだけで民間人を打つとは…

「お前は…この話を聞いても、海軍を続けるのか？」

「…うん。それでも、海軍続けるよ」

「……………そうか、なら、何もいわねえ」

そういつて、空を見上げる。そうだ、困っている人がいる。助けを求めると人がいる。

正義とか、悪とか関係ない。自分で出来ることをするんだ。只、それだけ。

それにうってつけなのが、海軍なのだ。人、金、物…すべて揃っている。

確かに、出来ることを行うのは重要だ。だが、それも自分の身がある話である。

私が暮らすのには、お金が必要だ。万が一冒険者であれば、給金という形でお金は支給されない。よって安定した生活が出来ない。…まあ海軍以外でもこの容姿を生かしてウェイトレスとかでも暮らしていけそうだけど…まあ、それはこの際置いておく。それに、様々な情報がいち早くキャッチできない。やりたいことが直ぐにできない。…そう、私にとって海軍は理想の職場なのだ。

…死と隣り合わせだけどね。

「シャンクスや、エースみたいな海賊だけだったらよかったのになあ…」

「どういう意味だ？」

「そりゃ…無闇に人を襲わないでしょ？」

「まあ…な」

それだけで十分だよ。そう呟いて、酒を煽る。

「にが」

まだ、エールは早いかな…そう思いながら宴を楽しみ、夜を空けるのであった。

次の日の朝、いよいよ帰還する時間になった。

「じゃあ、私は海軍本部に帰るね」

「おう！」

「また遊びにこいよ、アイラ」

二人に、またいつかねえくと、手を振って船に乗船する。

昨日は、あのままドンちゃん騒ぎし、途中全く記憶が無いが…スピード海賊団から何故か畏敬の念を込められた視線を向けられる。何かしたかな？とエースに問いかけても、しらばっくれるばかりだ。…まあ気にしないようにしよう。

「エース、シャックス」

「ん？」

「何だ？」

「また、どんな形になっても…会いましょう」

返事を聞かずに船室へ行き、既に充電してある動力を動かす。帆が自動で広がり、冬島を旅立つ。

「アイラああああ！」

ふと、声が聞こえる。甲板へでて、冬島のほうに視線を向けると…

「今度は負けないからなあ！！！！首を洗って待ってる！！！」

そういつて、手を振ってくるエース。…はは、いい年して…本当に光って見えるよ。

私はそれに答えるべく、あの時のようにサムズアップする。そうして、激動の日に幕を下ろしたのだった。

この世界に新しい風が吹き込んでくる事を信じて。今日も船を進めるのであった。

四皇（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願い致します。

エルブス解禁です。捨て身であれば両腕健在のシャンクスにダメー
ジが与えられる位かな…と思いました。

あの日から、約半年が経った。最後にビビに送った手紙はもう一月以上前だ。

…これはいよいよもって、何とかワークスに潜入捜査に入ったのか？……気になる。

しかし、私が独自調査して、もしビビに何かあったら私は悔やんでも悔やみきれない。

…いや、独自で調査をすれば良い。あの何とかワークスがどういう組織か…

どういう動きをしているか…いや、最低ビビが無事であるかどうかを確かめられれば…

いや、それはビビが望んでいないだろう。

ビビは物事を見極められる人だ。私の手が借りたのであれば、手紙でその旨を記すはずである。

…待つしかないか。はあ……なんだか恋しているみたい……だって女の子だもん。…自分でやっていてきもいな。

まあ気持ちを切り替えよう。今は目の前の相手をどう捌くか…

「考え事とは余裕だな」

そういつて、氷で作られたパルチザンを私に神速をもって振りかざしてくる。

それを、海軍の武器庫から拝借した、只の槍を武装色で強化し、折れないようにしたもので防ぐ

「すみません、故郷のカブトムシが元気かなあと、思いを馳せておりました」

「…昆虫嫌いじゃなかったっけ？」

「嫌いです」

「おい」

そう今現在、青雉と訓練中である…まあ私が暇そうにしている青雉を発見し、強引に手伝って頂いているだけなんだけど…

何で私が武器を持って戦っているのかと言うと…シャンクスと戦って痛感した、リーチ差

四皇以外であれば、電気で何とかいけると思うけど…それ以上となると、やはり厳しいものがある。

この世界は、普通に巨人とか、3メートル以上の人とか…とりあえず、リーチが長い人が大勢いる。

速さで出し抜ければ一番だが…手札は何枚もあったほうが良い。

幸いかどうか分からないが、飲み込みはいいらしく、付け焼刃で終わらないレベルにはもうすぐいけそうだ。

だが真の…この訓練での真の目的…それは

神の槍グングニルの多様化

最初は、作って投げるだけの運用にしようと思ったが…せっかく槍

の形なのだ。手段は多く取るべきだ。

投げるもよし、武器として使うもよし。…やっぱり、エルブス形態をとって正解だったな。

盲点だった。つか、光速に近い速度を平然と受けるあいつらがおかしいんだ！

予想して無かったよ！全く予想していなかったよ！何で避けられるんだよ、斬ってくるんだよ！何で効かないんだよ！あほか！常識はずれだよ全く！ありえん！大將なんて、何処を攻撃しても氷、マグマ、光に変えられて全然ダメージが通らないんだよ！

…いや、まあ戦えはするようん。ダメージもちゃんと与えられるよ？うん。

でも、絶対に倒せないよね。あれどうやってぶったおすの？私は何回もKOされて病院の常連と化してるからね。描写はしてないけど。

「こちらから行きます」

「へいへい」

この、だらけきった正義め。とりあえずやる気を出して欲しい。

…まあ確かに何時もの訓練よりはあれだよ？でもかなり進歩してない？いつの間にか、刀の名人とも打ち合えるようになったんだよ？その名人をパルチザンで瞬殺する青雉はどうかと思うけど。

電気を体に流して、音速の突きを叩き込む。全部、氷になって受け流している。

…チート乙。覇気を全力で叩き込まないと碌にダメージも与えられないよ。

粉々になって碎け散るが、私の死角で上半身を再生して、パルチザ

ンで攻撃してくる。

それを、六感で感じ取りその方向を見ずに槍を立て、防御する。

防御した後に、しねえ！青雉！と怨念を込めて突いてやるうかと思っただけ…

バキ

どうやら凍っていたらしく、柄の中ほどでボツキリと天へ召されてしまった。…これで通産30本目だ。

「はい、今日はここまで」

そういつて、爽快に去っていく青雉さん。その後姿に敬礼し再度武器庫から、槍を借りて素振りを行う。

…槍術というのはちゃんと載っており、それを見て勉強したりしている。

…この広い世界の中で、槍を使っている人間は、あんまりとういうか、全然見かけない。

銃と刀、サーベルが主流で、ほかには能力にあった武器や道具が主だ。後は素手。

つか、六式はそもそも素手の格闘が前提だ。むしろ、普通の武器より強い。

でも、名刀とか普通にあったりする。うーむ…極めるとどっちが強いんだろう。

まあいいか。考えても答えがでないしな。というより、神の槍ゲンゲニルを使わなければ、それに越した事は無い。ただ、万が一と言つものがある。準備するのに早すぎるといふことは無いのである。

その後、更に自主特訓を行い。書類の整理と片づけを実施し、就寝した。

時に任務に行き、時に訓練を行い、時にカフェオレを飲む。

そうやって、数ヶ月がすぎ、いよいよこの年になってしまったのである…

14歳

前世では厨二病が発症する年齢になってしまったのである。…といっても、一度思春期を通ったものとしては、そんなもの関係ない。寧ろ現在進行形で厨二病である。いいじゃない。夢を見たって。

13歳から14歳にかけて、体もより女性に…つつか完全に女性なんだけど。胸ももうC位あるし、ウエストも引き締まって、お尻も肉付きがより女性になった。顔の造形も美少女で前世では見たことないレベルだ。…くそ！何で男じゃないんだ！このレベルで男だったら、お前…

まあいまさらだな。最近は、自分の裸体にもう何も感じなくなってしまった。…他の女性の体には興味深々だけど。いやあ…いっしょに温泉に入ったときのヒナ大佐の体は正にパーフェクトボディだったね。

思わずゴクリとつばを飲み込んだほどだよ。

その時

「アイラも後2、3年したらこれくらいになるんじゃないの？」

とってくれたが…お世辞であろう。私があのようなパーフェクトボディになるわけが無い。

というより、あの胸のでかさは犯罪である。しかも張りもいい。ただ……戦闘中絶対邪魔だろ、流石に。いや、見る分には最高だけどね。ふるんぷるん震える所とか。

でも、自分があんな巨乳にはなりたくないなあ… なってDレベルで収まって欲しいね。うん。

そうそう、身長は155センチになって、町で見かける同年代の子と並んだように感じる。

……そこ、同年代の友達がビビ以外まだいないのかよって指摘しない。お願いだから。

独り立ちしてから、あんまり海軍本部に居られなくなったんだよ。そうだ。それが一番の原因だ。

まあ社交性があまりないといえばそこまでんだけどね。ただ、そうだな…住む世界がやっぱり違うことが大きな要因だね。

あそこまで無垢に笑えるんだなあ…とおもったよ。というより、人殺しがその中に入っていくのは、気が引けるんだよね。よって、ビビ以外に同年代の友達は居ない。…同僚なら一杯居るけど。

これが私の選んだ道。もう引き返せない道。…後悔は無い。断言できる。

しかし…これはちょっと…

「それでは、何かポーズをお願いします。アイラ大佐」

「あ、はい」

14歳、美少女、実力も折り紙つき…これだけの条件が揃えば……そう、海軍の広告塔として、たまにこういったことを行い始めた。流石に、幼女時代はまずいだらう。というのがあって、比較的に穏

便に過ごしていたが、14歳となると、ロブ・ルツチさんもある意味活躍した年代だ。大丈夫だろうとの事。何をもって大丈夫かは分からないけどね。

それに、海軍は殉職率が高い。離職率も他の職業に比べると最も高いのだ。原因として挙げられるのは、大怪我をしての退役。もしくは、心が折れた者が一番多い。

故に慢性的な人手不足に陥っている。別段、海軍は引き止めることはいらない。分かっているからだ。わが身が…家族が大事という事を。だからこそ人手不足に陥る。…まあ大航海時代幕開けと共に、海賊に恨みを持つている人とかも多く入ってきたらしいから、そこまで人手不足…ということは無いが。それでも、人材はあるに越したことが無い。

しかし海軍の金払いは最高に良い。手柄を立てれば手当ても付く。完全な実力主義。

私は上手くそこに合致したので続けられるが…もしあわなかったとなると、どんな人生を送っていたのだろうか。

考えても仕方が無い。今、私は海軍本部大佐であるのだ。

「はい、カメラ向いて笑って」

「はい」

…そう、大佐なのだ。これも立派な仕事なのだ。そう言い聞かせてカメラに向かって渾身の笑顔を向ける

「いいねえアイラ大佐！輝いてます！」

「あ、はははは」

渾身の笑みを浮かべたまま苦笑い。…これが、本や新聞に載るのだからと考えると、恥ずかしくてたまらん。というより、もっと美人をとれよ！と思った。ヒナ大佐とか、最高だろ。

私だったらほいほい釣られるね。この美人と同じ職場だと！？と思うね。しかも独身。なはず。

プライベートあんまり覗いたことがないから分からないんだよなあ…ま、いつか。

この後、海兵の制服で撮影を行ったり、訓練の撮影を行ったりと、ある意味疲れた一日であった。

後日、その記事を見て、青雫が態々私の目の前で爆笑しに来たので、渾身の覇気を纏って盛大に訓練をした。訓練は夕方にまで及び、双方ぼろぼろになったのは良い思い…出じゃねえよ！畜生！

なんで、見つけちゃうのかな？ガープ中将も爆笑してたし。お前ら…

ヒナ大佐はよく撮れているじゃないと、大人な対応をしてくださいました。女神に見えたのは気のせいじゃないと思う。

中二（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願い致します。

しいでし

「うーん…良い天気」

そうやって背伸びをして、船の甲板に設置された椅子に腰掛け、読書に勤しむ。

そう、現在船を航海させている。目的地はと言うと…

「アイラ大佐、本当に申し訳ありません」

「いえいえ、気になさらず、楽にしてください…たしぎ伍長」

「は！ありがとうございます」

楽にしているのに…と内心思っけど、まあ階級が階級であるから仕方がない。

何故こうなったか…簡単にいうと、イーストブルーの私の故郷…フーシャ村へ行くかなあ…と、一緒に食事をしていたヒナ大佐にぽろぽろと零したら…

「あら、丁度いいわ」

と、いきなり声を上げるもんだから、なんだあ？と思っていると、小型のデンデン虫を取り出して、

何やら、親しげに話すではないか…話し相手は男で。

何！？ヒナ大佐に男とな！？おのれ！この私を出し抜くとは良い度

胸じゃないか！！

と、密かに闘志を燃やしていたのだが…

「…ええ、分かったわ。…：大丈夫よ。アイラ大佐は優しいから。

…ええ、じゃあ、またね」

と、デンドン虫を切った。何だ？私の名前を出して…まさか！いや、まだ早いですよ！？

男なんて紹介されても嬉しくないから！それより、女の子紹介してください！なるべく百合属性の！

そんなことを思っているたら

「アイラ大佐、ちょっとお願いがあるのだけれど…：」

「いや、まさかお二人が本部から支部へ転勤なさるとは思いませんでしたよ」

ケムリンことスモーカー大佐と、たしぎ伍長。まだ伍長だけど、原作までに昇進するのである。まあ、剣の才能あるからなあ…おつちよこちよいだけ。

「まあな、だがあの町は始まりの町であり、終わりの町である」

「ええ、それ故…」

「ああ、海賊が集まりやすい…グランドラインに入る前の海賊がな」

そう、始まりの町でもあり、終わりの町でもある…ローゲタウン。かつて、海賊王が、生まれ、処刑された場である。なにより、イーストブルーでのグランドラインの玄関口みたいなものだ、結構海賊が停泊している。

「出る杭は、出る前に潰す…か」

「ああ、それで被害が最小限に抑えられるならそれに越した事はねえ」

それはそうだ、グランドラインに入って、飛躍的に実力が上がる海賊は多々存在する。

その海賊が後々、一般市民を巻き込んで暴れてみる。…取り押さえるのにも最低限の被害を覚悟しなければならぬ。それはナンセンスと言っものだ。

「そうですね、平和が一番ですよ」

「…ああ、全くだ」

その面で…いや、彼も列記とした海軍。平和を求めるのは当たり前だな。

「それにしても、個人船ですか…」

「ええ、私の能力用に作った船ですから、私しか動かさせませんけどね」

「へ〜…っは！すみません！」

「あははは…もうちょっと、気楽に行こうね〜、全然気にしてませんよ」

それでもペコペコ頭を下げてくるたしぎ伍長。うつむ…自分より年上だが、可愛い。

なんとというか、保護欲をそそられる。守ってやりたい気持ちにかられるね。

く！私も部下が欲しくなってきた！…けど、ワンマンの方が動きやすいしなあ…

「しかし、お前さん…グランドラインを普通に航海しているな」

「まあ、何時もワンマンでしたからね。…新世界も一応航海できますよ？」

天候とか読めないけどと、笑う。いや、ナミとか…何で天候読めるの？

ありえないよ。行き当たりばったりだよ。私は。…船は特別頑丈だから大丈夫だけど。

「【紫電】ね…確か、ヒナの所にいた時も活躍してたらしいな」

「いやあ、ヒナ大佐の指示のおかげですよ」

「くく…謙遜はいい事だが、過ぎた謙遜は嫌味に聞こえるぞ」

すみません。と言って、カフェオレを飲む。うむ。今日も美味しい！

「だが気をつける、本部内では大将と渡り合っていることは既に周知されているが…」

「それ以外、つまり支部では親の七光…まあおじいちゃんだけど、それで出世していると思われている」

「ああ、というよりだ、実際に目の当たりにしないと信じがたいぞ…お前は特に」

「む、それはどういう意味ですか？」

こんなに、たくましく成長したのに…いや、まあそこらの美少女より美少女してますけど。

力だって、覇気無しでも地面が陥没するレベルになってしまったからね。

でも、体のライン、柔らかさは完全に女のそれなんだよね。世の中の不思議だらけだぜ。

「…まあそういう意味だ」

二の腕とか、お腹とかぶにぶに触っている私に対して、冷や汗垂らしながらそういう。

は！貴様！たしぎ嬢が居ながらも私も求めるか！

「この変態！」

「え！？スモーカーさん…」

「何でそうなる！？？どういう頭をしているんだ！」

ちよつとからかっただけじゃないか…まあ面白かったからいいけど。

因みにタシギさんは、本気でスモーカー大佐に不審な目を送っていたのは完全な余談である。

ゆったりと航海していると、なにやら前方に…海賊船が見えてきた
ではないか。

「あゝ…お二人さん」

「何だ？」

「はい？」

望遠鏡を覗きながら声を掛け

「海賊船が1時の方向にいます」

「ほう」

「…捕縛の為、ご助力願います」

わかった。了解。と二つ返事でオーケーして頂き、準備を整える。
奴さんも此方に気付いたのか、方向転換して、向かって来る。…中
々好戦的な海賊じゃないか。

ドン！ドン！

奴さんの的確に砲弾をこの船に当ててこようとするが…無意味。

「アイラ大佐。この船に砲台は？」

「ありませんよ」

「…携帯できる砲台も？」

「ありませんよ」

「じゃあ…どうするのですか？」

そう、たしぎさんが問いかけてくる。その間にも放物線を描き、此方に砲弾が向かってくる。

「どうするか…どうするのですよ」

一瞬にして空中へ踊りだし、瞬時に砲弾が向かってくるコースに磁場を展開する。

磁場が展開された箇所に砲弾が来た瞬間に

ピタ

強力な磁場で空中に貼り付けにする。

「な！」

「うそ！？」

全て船に落ちる前に須らく止める。そこに電気を纏わりつかせて…磁場を一気に逆向きの力に変え、反発を利用し更に

「電磁砲」

1000万ボルトの砲弾を伴ったレーザーが一気に海賊船に向かって…着弾。

爆発に伴う轟音と、衝撃波が此方にも伝わる。黙々と煙が立ち込め…海賊船は沈んでいく。

「なあんだ、斬らないんだ」

まあそんなもんだらうと、とん、と磁場と大気を蹴って私の船の甲板に降りる。

「……」

「どうしました？」

おいおい、無言で此方を見てくる二人。…そうか、そんなに暴れたかったのか

「なあんだ、お二人も暴れたかったですか？」

「いや、ちげえよ」

……まあそうだろうな。スモーカー大佐の目には驚愕しかなかったが…

たしぎさんの目には、若干の恐怖も混じっていた。

「ふふ、たしぎ伍長」

「っ！は、はい！」

「…その反応は正しい。実際…化け物みたいと感じたんでしょ？」

「そ、それは…」

そう、一般人を守った際も、たまにそういう目で見られる。…まあ子供の場合は寧ろ目を輝かせて此方を見てくる子供もいたけど。

「確かに、怖い…そう感じましたが、でも、私達の仲間です。寧ろ、仲間にそのような目を向けてしまった私が…恥ずかしいです」

今度はまっすぐ私の目を見て、そう言った。…なるほど。

「ふふ…スモーカー大佐が気に入るわけだ」

「おい、アイラ」

「？」

凄く素直だ。真つ直ぐで、芯が通っている。そしてスモーカー大佐もその気質だ。成る程…お似合いだ。

「別段気にしていないよ。慣れてるのもあるけど…」

「…けど？」

「私より酷い化け物何て、ごまんというからね。…大将とか大将とか大将とか」

「あ、ははは…」

むしろそつちのほうが化け物だよ。倒せる気がしないんだよ。意味わかんないんだよ。

光なんて、認識できないし、氷とか海に落ちても無事だし、マグマは大地を支配するし…

どう戦えばいいんだよ。まだ、マゼラン署長を相手にしてるほうがいいよ。

あの人、体術そこまで鍛えてないので、電気を避けられ…ないと思う。うん。でも毒は怖いなあ…

いや、いい人なんだけどね。下痢がなければ。あの子の勤務時間4時間程度だからね。羨ましいぜ。

「それより、どうします？一応生き残っている海賊が居ないか見てみます？」

「…そつだな、万が一がありうるからな」

そつ返事を聞いて、船を沈没中の海賊船に近づける。

「…居ないみたいですな」

「ああ、全員くたばったのか…」

そう思っていたら、海から鉤爪付きのロープが私の船に引っ掛けられる。

「…居ましたね」

「ああ…まあいいじゃねえか、そいつを逮捕しよう」

そうして、上ってくるまで待つ。…まあ海王類のエサにするのもいいけどね。ただ、なるべく逮捕したい

「…はあ…はあ、おい！俺の船を沈めたやつはどいつだ！」

…まあ遠かったからね結構。かなり目がよくないと姿なんて割り出せるわけないか。

そう思つて、スモーカー大佐を指差す

「おい、お」「おまえかあ！」「…ホワイトブロー！！」

があん！と床に叩きつけKO。はいはい、お縄を頂戴しましょうね。縄をきつく締めて、船の脇に吊るしておく。…私の船に独房なぞありはしないのだ。

「たく…余計な手間だったな」

「まあいいじゃないですか、終わったことですし」

「…まあな」

そういつて、納得する。まあいこうぜといったのはスモーカー大佐

だからな。

それにしてもこの人は面白い。

「スモーカー大佐、お疲れ様です」

そういつて声を掛ける部下…：やっぱ欲しい。

「お疲れ様です、アイラ大佐」

「ありがとう、ふふ…：ちよつと疲れちゃったみたい」

「では、私とマッサージいたしましょう」

「ええ、是非」

そうして、マッサージと称したいけな事を…：ふひひ

「おい、顔がだらしないぞ」

っは！な、何だ…：夢か。相手はビビみたいな子だったから、夢中になりかけていたよ。

…：まあこういうことは妄想だけにしておこう。

「さてと、じゃあ海賊引き渡す為に近くの支部まで行きましょう。

そこで各自休憩と、必要なものの調達をしますか」

「了解」

「わかった」

そういつて、近くの支部へ向かうのであった。

ついでに(後書き)

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願い致します。

レストラン

近くの海軍支部へ海賊を引き渡し、その島で一泊しグランドラインを逆送する。

「何時見ても…大きいですね」

「ああ、この世界の唯一の大陸」

レッドライン。四つの海と、グランドラインを隔てる大きな壁。かつて、太陽海賊団のフィツシャー・タイガー。彼がこの大陸をよじ登り、聖地マリージョアへ侵攻。奴隷開放をした。

ぶっちゃけ、生まれて3年目だったから、言伝しか聞いたことないけど。

まあ、正直さまあ見ろってやつだね。天竜人には丁度良いクスリに…はならなかったけど、痛い目を見てほしいというのが本音である。…あいつらを心から守りたい…そんな感情は海軍内でも稀な人間しか居ないか、もしくはお金で繋がっている輩とかだ。

…原作は何処まで進んだのだろうか。ルフィが海賊王になって、世の中平和になったのか…

それとも、変わらないのか…そも、最後の島「ラフテル」は実在しているのか…分からん。

ただ、海賊王が居たという事実だけはある。…ずいぶん不確定なもので大航海時代が幕開けしたものだ。

いや、生ける伝説が処刑寸前にあんなことを言ったのだ…無理はないか。

「さて、カームベルトを横断しますか」

まあ、今は故郷へ帰って、件の主人公がどうしているか一目でも見ましようかね。

「ありがとうございます」

「世話になったな」

ローグタウンへ着き、スモーカー大佐とたしぎ伍長を降ろす。

あの海賊を捕縛した後は特に海賊は襲ってこなかったし、発見もしなかったので予定通りに到着できた。

が、予定通りといっても、日付的に予定通りでありもう辺りも暗くなっている。

「いえいえ、私はここで一泊しましたら発とうと思います」

「ああ、見送りはいけなと思うが、また来たときには歓迎する」

「はい！お待ちしております」

そう、言葉が送られ迎えに来た海兵と一緒に支部へ移動して行った。さて、一杯引つ掛けたくなったから、ふらふらと酒場でも探そうかね。

原作キャラとか、なんか重要人物に遭えるのかなあ…とっていたけど、そんな分けない。

普通に酒場で軽いカクテルをちびちび飲んで、船に戻りぐっすり寝た。

ローグタウンの酒場にはカルーアミルクみたいなカクテルが無かったので、酔うに酔えなかつたのが残念である。

翌日

事前に、ガープ中将からフィシャ村への最短ルートが記されている地図を貰い、それを眺めると…

まあ最低でも3日は掛かる。これに海賊を加味すると…もっと掛かると予想される。

物資を確かめ、十分であることを確認し、帆を広げて出向する。

また、お邪魔するときが来るのかなあ…そう胸に抱きながらローグタウンを背に海を走る。

「…一人って、結構さびしいもんだな」

ハンモックに寝転び、本を読んでいたら、ポロつと自然に零れていた。

なんだかんだで、結構面白かった。…くそ、一人になるとネガティブに考えちまう。

「あ〜！やめやめ！読書じゃなくて、能力の特訓でもしてよう」

そうして、甲板に出て能力の開発に勤しむ。そうだ。もっと家庭的な能力を開発しようじゃないか。

そう、フライパン一つで料理が出来るように…料理できねえや。男の料理でぶった切って炒めるか、煮るかしかしたことねえ。く！やはり淑女の嗜みとして、料理の一つや二つは出来ないとまずいか！

…ん？…淑女の嗜み…！？

「そおい！」

何を考えているアイラ！お前、嫁に入るつもりだったのか！？いや、違うね私は嫁には入らない。

寧ろお嫁さんを取るぞ！そうだ、男と結婚とか…ありえん。つか、このまま行くと独身決定だね。

まあ…色町へ爽快と繰り出せば、様々なパターンで楽しめるからいいや。…たぶん

そう、これからのことで頭を悩ませていると…

「んあ？…海上レストラン？」

魚型の大きな船にどーんと看板が飾られている

「バラティエ？どつかで聞いたことあるような…」

まあお腹も減っていることだし、お金にも余裕があるし、美味しいもの食べたいし、丁度いいな。

そう思い、船を寄せて、停泊する。…因みに現在の服装は海軍の制服では無く、私服である。

流石に私服オーケーと言い渡されているし、誰の目も無いので堅苦しい制服ではなく私服をチョイスするのは当然の帰結である。

白いリボンでツインテールに髪をまとめ、トップはベージュのシフオンカットソーにデニムのホットパンツ、アクセントに十字のペンドアント。それに、足首まである、グラディエーターサンダルを履いている。…うむ。ぶっちゃけファッション楽しいです。

完全に、現代風だね。…まあオーダーメイドって言うのもあるけど、この世界にもまあそこまでは浮いていないので満足である。寧ろ私からファッションの流行を作っていきたいです。…嘘ですけど。手提げバックに財布があることを確認し、店内へ入っていった。

「…いらっしゃいませー！」「」

元気よく、出迎えてくるウェイターと、奥から聞こえてくるシェフの声。そして、堅苦しくない、いい感じの雰囲気を出している店内。…こいつぁ正解かな？そう思って、店員さんを待っていると

「いらっしゃいませ、美しいお嬢様…」

いきなり、ふわっと現れて腰に手を回され、向き合うような形となった

「私、この海上レストラン「バラティエ」の副料理長をしております、サンジと申します…可憐な貴方のお名前をお聞かせ願ひ無いでしょうか…」

……あー！！こいつ！サンジだ！そうか、思い出したぞ。ここはサンジが勤めている海上レストランだったか。つか、顔がくそ近い。ビビにしか許していない領域だぞ。このイケメンめ。もげる！

「アイラ…と申します」

「ああ、アイラ様と申されるのですね。いやぁお美しい貴方にぴったりなお名前です」

「はぁ」

まあ、初対面の人に辛辣な言葉を吐きかけるようなことはせず、流れに身を任せる。

サンジは女に目は無いが礼儀は弁えるし、仮にも職場である。そう変なことはやらないだろう。

……やった場合は、100倍にして返すけども。

そうしているうちに、エスコートされながら二人用席に座る。

「本日はどうなさいますか？」

しかし、普通にウェイターやってるな。…失礼ながらももう少し羽目を外すかと思ってたが…それでもないらしい。意外だな。

「では、貴方のお勧めで」

メニューを見ずにサンジの目を真っ直ぐ見て答える。

「畏まりました、マドモワゼル…しばし、お待ちを……」

そういって、腰を折って厨房へ向かう。……普通である。まあ最初はどうかと思ったけど…普通だ。

そう思っていた時期が私にもありました

「えつと…」

「ああ、その困っている顔もお美しい」

今現在、サンジと向き合いながら食事をしている最中である。

何のことは無い、あの後待っていて、お待たせしましたと声を掛けられ目を向けると

どう見ても二人分の食事が運ばれてきているではないか…：…どういふこつちや？

「ああ、気にしないでください…：貴方のその美しい姿に、私めは心を…：…」

うんたらかんたら言ってるけど、右から左へ…：そうだね、サンジはこうでなくつちやいけないよね。

そして、サンジの私への賛辞が終わり、どう反応したものかと、困ったら、まあそう言ったということだ

「あゝ、まあでは、頂きますか」

「ええ…：ですが、その前に」

そういつて、ワインを綺麗に空けて、ついで来る。ほのかに葡萄の香りが漂ってくる上品なワインをグラスに注いでいただき

「今日という日に…乾杯」

ちん

……ふむ、このワイン。…かなり上手い。つか普通に14歳に酒を勧めてくるなよ…と、思っていたら。

「ああ、ご安心を…お酒は入っておりませんので」

………ありがたいやら、なんやら…複雑な気分である。

「ありがとう」

にっこり笑ってやったら

「ああ！ぼかあその笑顔を見ただけで幸せだあ！」

と、天を仰ぎながら大きな声で言うもんだから、回りにいたお客の視線がこっちに集まって、恥ずかしいのなんの。

「ちょっと、サンジさん…恥ずかしいです」

「ああ！その恥らう姿も何て可憐なんだあ！」

………サンジ…ゆっくり飯を食べさせろやあ…そう思っているが、こいつには何をして逆効果になりそうなので、あえて放置の形をとり、出された料理に手をつける。

「あ、おいしい」

これがサンジの料理か…かなり美味しい。特にスモークサーモンのマリネが美味い。サーモンは臭くなく、上品な風味をだし、その風味とかなりマッチしているドレッシングと野菜。完璧である。

「アイラ様を想って、お作りさせて「おい！サンジ！」…ああ！？」

厨房から声を掛けられて、急に表情を変えるサンジ。この切り替えの速さは凄いと思うんだよね、一体何をどうすればこうなるのか聞いてみたいが…

「俺はこの天使みたいなお方と、一緒に食事をしているだけじゃねえか！」

「あほか！職務中だろ！」

「なあにい…てめえ仕事と美少女との食事、美少女との食事のほうに大事に決まってるじゃねえか！」

席を立って、喧嘩を始めるサンジとコック達。…まあさすが武闘派が集まる所だ。

しかも、周りのお客さんもあんまり気にしていない様子。…これが日常茶飯事なのだろう。

まあ、見ていて飽きないというのは同意するね。つか、サンジの好みってもうちよい年上じゃなかったっけ？…まあ周りには野郎しか居ないけども…

そう思い、喧嘩の声と打撃音をBGMにしながらゆっくりとご飯を食べるのであった。

「本日はご馳走様でした」

「いえいえ、此方こそクソお見苦しい所を見せてしまいました…」

そういつて、会計を済ませた後に挨拶をする。

「いえ、随分仲がよろしくて」

「…ええ、愉快的な奴等ですよ」

そういつて、軽く笑う。原作でもそうだけど、本当にこのレストランを大事にしてるんだなあ…

「それでは、私はこれで」

「ええ、またのお越しをお待ちしております」

そういつて、自分の船に移り帆を張る。最後に何か言っておこうかな…と思ったけど。

それは野暮というものか、まあ彼なら大丈夫だろう…

「麦わらか」

キーを握るのはこれから会いに行く兄。果たしてこの世界はどう動いていくのか…

「まあ、こうして仲良く会うのは最後になるのか…」

それでも後悔は無い。これでも結構人を救ったという自負もある。それが無駄でしたとは言わせない。

だからこの道で後悔は無い。でも、もし、ルフィとエースを捕まえる日が来るかもしれない。

その時は、私はどう対応するのだろうか…

「まあその時になってみてだな」

未来に思いを馳せて、静かに航海するのであった。

レストラン（後書き）

誤字、脱字等御座いましたら、ご指摘をお願いします。

∴ NARUTO小説を勢いだけで描いててしまっていた……NAR
UTO面白かったです。

帰郷

「おーーーーーい！アイラーーー！」

そういつて、手を振ってくるルフィの姿が目映る。

「はは…元気だなあ」

そうは言ったが、こちらでも大きく手を振って返事を返す。他にも、村長やマキノさん、村の方々が出迎えてくれる。事前に村長とルフィ宛に顔を出しますと手紙を送った甲斐があるもんだ。うむ、マキノさんは相変わらず美人だ。

現在、アイラ14歳。ルフィ15歳……原作開始まで、後2年を切った。

「アイラ！大きくなったなあ！」

なははは！と肩をバンバン叩いてくるルフィ……ガープ中将に似てきやがったな。

「まあね、ルフィもすっかり大きくなって」
「おう！毎日、飯を食ってるからな！」

ニシシシと笑うルフィ。いやあ、元気が良いねえ。

「ほんと、アイラちゃんすっかり大きくなって…」
「うむ、評判も聞いておるぞ」

マキノさんから頭を撫でられながら、そういわれる。いやあ…屈むと胸の谷間が…最高！！

「あははは、海軍本部大佐をやらせてもらってますよ」

私に不適合な地位だと思う。…部隊の指揮なんて数回しか採った事がないしな。…事務仕事はバリバリやってるけど。

「ほんとか！？すげえな！流石アイラだ！」

眼をきらきらさせてこっちを見つめるルフィ

「いや、ルフィ…このままルフィが海賊になったら捕まえる側だからね」

「なっはっは！捕まえてみる！俺は簡単にはやられないぞ！」

こついう事を笑顔で言っただけの人ってどれ位いるんだろうな。私だったら笑顔は絶対無理だな。

「ふふ…後悔しないでね」

「アイラも、後悔すんなよ」

次に会うのは戦場か…家族と職務。どちらを優先させればいいのか。ろっか。

まあ何とかなるだろう。いや、何とかするしかない。

「ルフィもだな、ガープやアイラみたいに海軍へ」

私たちの会話を聞いていたのだろう。村長がそうルフィに投げかける。…あきらめが多分に含まれてるけど。

「嫌だ！」

「だろうな」

そう言つて、複雑そうな顔で此方を見てくる。恐らく将来の事を憂いているのだと思う。

…私が海軍をやめれば、ルフィをエースを捕まえるという事は無くなる。

でも、もう後戻り出来ない所まで…というより、流石に退職に関して厳しくない海軍でも、私を手放す事はないであろう。自惚れで無ければ、本部からは信頼されている。

元帥、大将、中将と、大物達から直々に指導してもらい、家族が犯罪者だから取り締まるの嫌です。

だからやめます…何てまかり通るわけない。そも、最初から覚悟していた事だ。こうなる事を。

しかし、実際そう思うと、なんだかやるせない気持ちになる。けど、後戻りはもう…出来ないのだ。

「もうお昼だし、おなか減ってるでしょ？アイラちゃん」

「はい」

「私のお店で何か食べていかない？」

「はいはい！宝払いで俺もくうぞー！」

まあ今はそういう事態ではない。未来を憂う前に今を楽しもうではないか。

そういつて、相変わらずスタイルがいいな…という後ろ姿のマキノさんを追いかけて、ルフィと一緒に道を歩いて行くのであった。

食事を終えていつも特訓していた森へ移動する。本当に懐かしい…あれからもう6年経つのか…
そう思い出に浸っていると

バガン！

と、岩が砕ける音がするので振り返ってみるとルフィは特訓をしていた。

「ゴムゴムのおくピストル！」

びゅん！と伸びるルフィの腕は確かに、ピストルという名に恥じない速度と威力を誇っている。

…しかし、戦闘に関して強くなるにはやはり、誰かに教わる事が一番の近道である。

ルフィはゴムゴムの実を食べたゴム人間。その武器は打撃を無効化にする体と、普通の肉体ではあり得ない軟体さ。射程が伸びることであろう。確か、ギアセカンドと、ロブ・ルッチを下したギアサード。

あれもゴムの特性をよく生かしている。

…まあ教える気は微塵もない。ルフィは将来、確実に海軍の大きな敵となるからだ。

故に、今教えて戦力アップを図る事は…ナンセンスだ。

いや、違うな。まだ恐れているのだ。主人公にむやみに干渉して物語を狂わせる事を。

まあ、妹というポジションに生まれて、今更だけでも。ただ、今のところは順調に原作に入ろうとしている。

…尤も、細部は完全に忘れていくけど。大まかな流れしかメモ程度に取ってないし、そのメモも海軍に入る前に跡形もなく燃やした。

この世界で生きるのに、そんなの気にしていられないと。

でも、先を知っている事がどれほどのアドバンテージになるのか。

…あれ？海軍入ってるのにそんな知識って必要かな？…ま、まあ知らないより知ってる方がいいよね

うんうん考え事していると

「なあ、アイラ」

「んあ？何？」

「俺と勝負してくれねえか？」

ひとしきり訓練を行ったのだろう。岩が砕けていたり、木が倒れていたり、結構派手に散らかっている

「まあ…いいけど…私はこう見えて、結構やるよ？」

「望むところだ」

そういつて、構える。私も油断せずに構える。ただし、能力は使わない。覇気も使わない。言い方が悪いが使う必要性を感じなかったからだ。

「おおおお！」

私が構えて一息した瞬間に、一気に此方へ向かってくる。その速度は常人より遙かに早い。私の前世の世界であれば確実に陸上で金メダルはとれる…そのレベルだ。しかし、この世界で、その程度の速度では…正直遅い。せめて車より早くないとグランドラインではお話にならない。と、思う。

全力は出さないけど、本気を出そう。

「遅い」

剣は使用せずに、ただ体術のみでルフィを圧倒しよう。まずは、襲いかかってくるパンチをひらりと避けて懐へ潜り込みボディブローをお見舞いする。それを避けようとせずには当たって、少し吹っ飛ぶ。

「俺に打撃はきかねえぞ！」

そういつて、また特攻。…打撃が効かない…だから大丈夫か…その認識は間違っている。能力者なんてどうにでもなるような技術がグランドラインにはある。

それがロギアだろうがパラミシアだろうがゾオンだろうが一緒だ。

「でも、斬撃は効く」

そう眩き、落ちている木の枝を特攻してきたルフィを撫でるように滑らせる。

ピッ

ルフィの頬から血が少し流れ出る。

「それくらいじゃ俺は倒せねえぞ！」

そういつて、振りかぶる。テレフォンパンチだ

「ゴムゴムの〜ピストル！」

グン！と勢いよく此方に伸びるパンチ。しかし、ピストルと同じく軌道は変えられないので、ただ一歩横に避けるだけで事が済む。

まあ覇気を使わない限り、勝負何ぞ付かない…が…それでも力の差は明確だ。

パンチを潜り抜けて、何時もの如く蹴り上げる、木を壁として利用し、一気にルフィ目掛けて蹴りを決めようかと思っただが…

「うお！あぶねえ！」

ゴムを利用し、空中で避けられた。私の蹴りが空を裂く。地面に何か叩きつけられたような音と共に、地面が少し陥没する。

「!?!」

驚くルフィ、しかしその隙は致命的だ。一気に接近し、掌底で地面

に叩きつけて、首に木の枝を添え

「私の勝ち」

「…ああ、俺の負けだ」

そうやって、訓練が終わった。

「何で、私と勝負しようと思ったの？」

夕食時、またマキノさんの酒屋を尋ねてご飯を頂く。サンジの上品な味も好きだけど、マキノさんが作る素朴な味もまた素敵なものがある。

隣のルフィはがつがつご飯を食べ、一息つく。

「エースが出航するときには…アイラの話が出たんだよ」

1年前

「さて…と、もう忘れ物はねえはずだ」

あたりを見回す青年…そう、ポートガス・D・エースその人である。
アイラと決闘してから既に5年の月日が経ち、幼かった面影を若干
残しながらも、好青年に成長した。

「そっか…さみしくなっちゃうな」

そう、声を上げる少年…ルフィ。

「けど、俺も直ぐに追いついて見せるからな」
「はは！…楽しみにしてるぜ」

クシャッとルフィの髪を撫でて、笑顔を向ける。また会える…と、信じて。

「あゝあ、サボが1番アイラが2番、3番がエースかあ…」

「ああ、まさかアイラの方が先だとは思わなかったけどな」

兄弟3人。長男2人、次男1人の変てこな兄弟。その中にアイラは入っていないが、それでも同じくらい大事に思っている。だからこそ、エースも先にアイラが発ったことで自身を3番と評したのだ。

「…ルフィ」

「忘れ物か？」

「いや…アイラのことだ」

出向前のコボル山に一陣の風が吹く…風に揺られて木々がざわめくが…二人の気に当てられたのか、直ぐに静かになる。

「アイラは…俺たちの過去を知りたがっていた」

「過去つて…エース！教えてなかったのかよ!？」

「…ああ、その機会があったのだが…」

そうして事情を説明する。あの日の決闘の事を。そして…自身が苦戦したことを。

真剣に聞くルフィ、そして思う。アイラが旅立つ日にエースが叫んだあの言葉の真意。

「ルフィ、もしあいつが来たら…お前も一度戦っておけ、あいつは俺たちにとって、最大の強敵になる」

「!?!?でも、家族だろ!?!」

「ああ、違くない。だが：俺たちが海賊になるって言うことをアイラに話したよな」

そう、アイラには何時も海賊になると話していた。自由で大らかな、そんな海賊になると。

「だが、あいつは海軍に行った。…ルフィ、その真意がお前にも分かるはずだ」

「……本当は、止めたかった？」

頷く。海賊とは犯罪者である。世間一般から見たら、余程でもない限り悪呼ばわりだ。

それは赤髪然り、白ひげ然り、…海賊王然り。家族が、そうなるのは余りにも忍びない。

「でも、止められなかった。あいつも毎回言ってたよな。何で海賊なのか…と」

そして振り返る。最後の最後まであいつは、アイラはそうエース達に投げかけていた。

でも、それでも曲げられないものがある。…絶対に守る約束がある。

「だから、ぶつかれ。俺たちは、止まらない。止めて見せろってな。負けてもいいさ。その時は次に会う時に負けないよう強くなっただいばい」

「…うん」

そうして、山賊が、村長が、マキノさんが見送りに来るのを確認した。

そして、思う。今のアイラはどれくらい強くなっているか。新聞で

も結構取り上げられている。
海賊の捕縛。2億の賞金首の海賊団を単騎であつという間に捕まえる。その力。

恐らく自分より上であろう。それでも止まらない。あの誓いを破らないように。

「じゃあな、ルフィ」

「へーそういうことがあつたんだ」
「かる!?!」

いや、別に確かにそういう意味もあつたけど、本音を言えば。何で海賊なの?という純粋な興味からだ。
恐らくシャンクスの影響もあつたと思う。でも、何かもう一つ隠されてることがあるよな…
そう思っていきてたんだけど…

「それで、俺たちに何があったかというと…」

「ああ、それはエースから直接聞いたよ」

「マジか!？」

そう言っただけで経緯を話す。エースが賞金首になった時に決闘したこと。シャンクスは元気だったこと。

「そうか…俺もつかうかしてられないな」

そういって、マキノさんの料理をかきこむルフィ。うっむ…マジかで見ると本当にゴムって感じがする。

つか、ハムスターみたいに溜めるな。さっさと飲み込めよ。

「ふふ…アイラちゃんが居なくなっただ当時は、結構寂しかったわよ。二人とも」

「ぶふう!」

隣で水を吐くルフィ。おい、マキノさんにかけてよかったですな。私の右手に握られているフォークが光っていた所だ。…っつかし、そんな風になつてたんだ…

「へ…どうお兄ちゃん。寂しかった？」

うるると、瞳をうるうるさせて、胸の前に手を組み、上目遣い。自分でやっててきもい。

「いや、きめえ」

ずがん!!

マキノさんの酒場のドアを突き破って数十メートル吹っ飛ぶルフィ。確かに、自分でもきもいと思った。けど、仮にも此方は女子である。見た目も結構整っていると自負している。…あそこまで否定すると無いじゃないか!!

「マキノさん」

「あ、はははは…」

私もがつがつご飯を食べながら、やっぱりルフィは何処までいってもルフィであった。

少し、安心した。

帰郷（後書き）

誤字脱字等御座いましたらご指摘お願い致します。

異動

フーシャ村へ帰ってから三日。いよいよ、海軍本部へ帰還する日がやってきた。

「もう帰っちゃうのか？」

そう、ルフィが問いかけてくるが此方も仕事がある。

「うん。次に会う時は…海上か、島だね」

「ああ…今度は負けねえぞ」

そういつて、笑いあう。次に会う時は戦場。もう笑い会えないと思う。だから今を笑うんだ。

「アイラちゃん。何時でも帰ってきていいんだよ？」

「うむ、何時までもまっとするぞ」

「はい！ありがとうございます」

そうして、船に乗る。充電は既に満タンである。碇を上げて、帆を張る。海軍マークの帆を。

「アイラ〜！」

少し、島から離れたらルフィが此方に向かって叫びだした。何事かな？と思って振り返ると

「また会おうな〜！」

……そうだな。敵でも家族は家族。

「またね〜！」

そういつて、笑顔で手を振る。悲しみは無い。これは決別だ。エース達の覚悟も聞いた。ならば、此方も覚悟をしないでどうする。だから、これは決別なのだ。また、会う時は…戦場なのだから。

島が見えなくなるまで手を振り、そして一息を付く。滞在中の三日間でかなり疲れも取れたし、何より

「…ふひひ」

思い出す。滞在最終日の夜を

「アイラちゃん」

「何ですか？マキノさん」

「昔みたいだに、一緒にお風呂に入らない？」

「よろこんでー！」

そうして、一緒に入った浴槽はマキノさん用なので、二人は結構狭かった…が！

狭いからこそ、色々接触できたのだ。うむ。……うつ………ふう………おっと、鼻血が出てきやがった。最高だね。ヒナ大佐に負けず劣らず。流石にあらいつこはしなかつたけど、背中だけは流させて頂きました。恐らく、はあはあ言ってたと思う。

まあ語り合ったのは女の子の会話だ。……ここで言うのは野暮ってもんだよ。

「ん………天气がいいなあ」

今度は何時マキノさんとお風呂に入れるのだろう。私ももう少し大きくなって、また入って今度は抱き合う感じで………いい！

これは官能小説が出版できるレベル！……これはチャンスだ。私の名前で百合小説を世間に広めれば………そう言った人たちが買っていく………ファンが集まりしたら、同盟を作るんだ………「百合同盟」

これで、私のコートピアが完成する。態々金を払って色町へ繰り出さなくても良いんだ！

いける。いけるぞ！………しっかし

「風が良い気持ちだ」

さっきまで考えてくだらない事を全て置いておいて………休憩終わり！

「さて………現実と戦いますか」

私の部屋に入ると…机の上に無造作に置かれた資料。それが凄い積み重なっている。

大佐になって初めてこういった資料の「承認」をしている。今後の警備の体制。海賊の牽制の方法。

武器の考案。等々。支部や本部に居る海兵の要望を集め、詳細化。それらを上にもこれこれ、こういう風にしたいのですが宜しいでしょうか？というような案件の資料から。

「ポルトガス・D・エース：白ひげ2番隊長になった。：か」

こういった報告資料やらで山積みなのだ。…随分事務仕事が増えた気がする。つか、何で色々な支部の要望とか私に回ってくるの？意味が分からん。

回された仕事に愚痴を吐くのは、酒場だけだ。そう思って、取り掛かるのであった。

「それで、アイラ大佐の今後は…俺の下で自由に動かすって事ではないんですかい？」

海軍本部センゴク元帥の部屋にて、センゴク元帥を筆頭に、大将、ガープ中將が集まって話をしている。

アイラの今後についてである。

「うむ、ガープから知らせを受けた時に簡単な予定は立てた。が…誰に…という風に細かい所まで決めてなかった…」

センゴク元帥が大将、青雉に向かってそう投げかける。アイラが海軍へ入る前にガープ中將から孫娘がいる。海軍に入る。能力者。強い。等々の報告を受け、仕事の合間に期待の新人の予定を立てていた。

行く行くは大将の下で、という結論に至り計画を立てていたのだが…

「昇進が早すぎる…いや、武功に合わせれば、少将でもおかしくは無い」

そう、文で見ると、全然違っていた。確かにガープ中將の報告は正しかった…ただ、一つ誤算があったのは、我々の予想以上の強さを持っている事である。故に早すぎた。予想以上に海賊を取り締まる。そして、億越えの海賊を物ともしないその強さ。嬉しい誤算であった。

「まあ、そうですね。あやつは存分に働いておりますからな」

そう返事をするのは、大将…赤犬ことサカズキ大将である。彼も、直々にアイラに手ほどきをし、その成長には目を見るものがあつた。

そこは認めているが…

「だが、あやつはまだ温い」

そう、一つだけ認めていないところ…それは、敵に対して温い所だ。尤もそれはサカズキ大将から見た話であり、彼と思考が同じでなければ、いや普通だろという所だ。……犯罪者は死ねば良いと言うわけではない。決められた法があるのだから、それを全うするべきなのである。死ぬことが償いではない。

というのは、アイラの意見である。本人は口にしないが。

「わっしの部下は足りてますからねえ」

そういう、黄猿…ボルサリーノ大将。彼はサカズキ大将と違い、そこまで過激ではない。が、職務にはシビアな所もある。アイラに対しても同じである。だめな所は指摘し、良いところは褒める。そういったスタンスを維持している。寄せず離れずといったところ。

「で、俺の所ってわけですかい」

「ああ…引き受けてくれるか？」

「…引き受けましょう」

消去法で行くと、青雉…クザン大将はそう返事をする。少し溜めたが…断るつもりは毛頭無かった。何故なら

「（労働力ゲット）」

彼の正義は「だらけきった正義」故に事務仕事等は…必要最低限しかやらないのだ。

故に、丁度良い労働力になる。

「センゴクの元でも良かったのではないかの？」

そう口にするのはガープ中将。しかし、その問いに首を振る

「いや、私も残念ながらアイラ君一人を構っている余裕がなくなっ
てしまったの」

元々、こういったことを早く決めておかなかった自分の責任なので、
一応直属の上司として対応してきた

だが、それは本来の形では無い。なので、ここまで上がってきたの
だから、大将の元につけて、暴れてもらおうかと思った。そして、
丁度良くこの3人とガープ中将が居たのでこの場を設けられたのであ
る。

「では、そういうことだ…クザン、頼んだぞ」

「はっ！」

そういって、大将と中将が退出する。全員が居なくなった部屋で一
息を付くセンゴク元帥。

その手にあるのは…アイラの異動辞令の用紙であった。

「モンキー・D・アイラ。貴官を本日付けでクザン大将の副官とする」

「…へあ、あ、了解いたしました！」

「……まあ突然だから無理もあるまい」

そう、軽く経緯を話してくれるセンゴク元帥。なるほどね…つまり

「事務仕事が増える…」

だらけきった正義。結構目の当たりにしてきたけど…あの人何時事務仕事してんだろう？と思っていたけど…聞いてみたら、何と必要最低限しかしていないらしい。これが権力！
ん？もしか、今までの事務仕事も…

「あの、もしかして様々な支部からの資料って…」

「察しの通りだ」

クザン大将…真面目にお願いしますよ、本当に。

「今回の異動で変わる事と言うと、直属の上司がクザンに変わった事だけだと思っても構わない」

「質問よろしいでしょうか」

「まあ、話は最後まで聞け。基本は今までと同じく海を回ってもらう。違う事は、クザンが招集したらすぐさま駆けつけられるようにするだけである。しかし、直ぐには連絡が普通なら出来ない…」

そこでだ…と取り出したのは

「デندن虫？」

それにしても少し大きい…

「うむ、これは子デندن虫より長距離に送受信が出来るものだ。将官は全員これを持っている故に、直ぐに情報が伝達でき、直ぐに招集が出来るわけだ」

そういつて、箱にもう一度詰めて此方に渡してくる。…つばらな瞳で此方を見てきている。

仲間にしますか？…はい。

「これをアイラ君に渡す。それでクザンとも直ぐに連絡が出来るし、紙も送れるから現在位置を直ぐに発信できる。また、クザンの担当地域のエターナルポーズを配布する」

大事に扱ってくれ。…と、箱にぎっしりとエターナルポーズが入っている。

うわぁ…すごい多いんですけど。クザン大将こんなに回っていたのか…

流石大将である。

「以上だ。挨拶にでも行つて、基本指針と指示を仰いで来い」

「は！了解いたしました！」

そういつて、退出する。…事務仕事が多くなりそうだ。まあいいけ

ども。

「来たか」

「は！海g」ああ、ああ、いいよ。堅苦しいのは無しだ「…はい」
「歓迎する」

そう言っつて握手をする。ううむ…すっぽり手が覆われる位大きいな。

「あの、基本的には何をされるのですか？」

「ん？まあ分かっているとと思うが、海賊の取り締まりと…」

後ろに控えていた箱から何やらとりだ…

「何の資料…いえ、言わずとも分かりました」

「随分物わかりがいいじゃないの。じゃお願いね。俺寝るから」
「はあ、了解です」

そういつて、アイマスクを装着し日向がぼかぼかしている所で寝てしまった。

「そういえば、大将しか見れない極秘のやつとか…」

「それは大丈夫だ」

まあ普通はそうだよね流石に

「全てお前に任せた」

「あほか!!」

あほだった。よく今まで大将にいたもんだよ。本当に…

「大丈夫、大丈夫…もし本当に判断つかなかったら俺に報告すればいい」

「クザン大将…」

「聞くだけ聞くから」

……もう何もいわねえよ畜生。そう思って、涙を流しながら資料の整理をしていくのであった。

異動（後書き）

誤字脱字等御座いましたら指摘等を願ひ致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9718p/>

主人公の妹に転生したようです。

2011年7月28日23時17分発行